

柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書 1

— 柏市溜井台遺跡 —

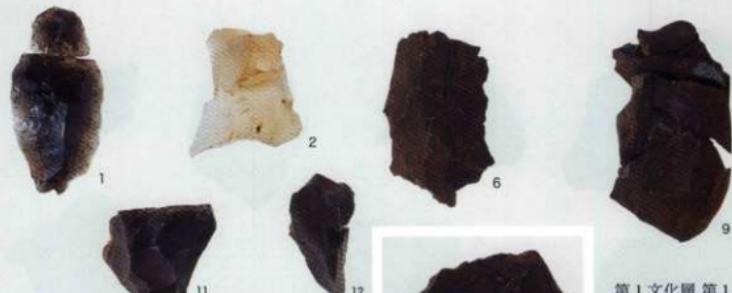
平成19年12月

千葉県県土整備部
財団法人 千葉県教育振興財団

柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書 1

ためいだい
— 柏市溜井台遺跡 —





第1文化層 第1ブロック

第2文化層 第2ブロック



第3文化層 第4ブロック



第3文化層 第6ブロック



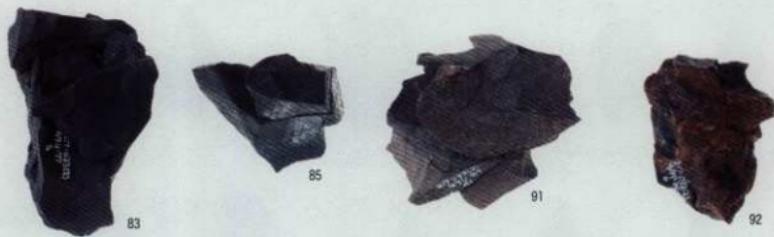
第3文化層 第7ブロック



第4文化層 第8ブロック(I)

旧石器時代出土石器 (1)

巻頭図版 2



第4文化層 第8ブロック(2)



第5文化層 第9ブロック



単独出土

旧石器時代出土石器 (2)

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第585集として、千葉県県土整備部による、柏北部中央地区土地区画整理事業（公共つくばエクスプレス沿線整備委託）に伴って実施した、柏市溜井台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

溜井台遺跡の調査では、立川ローム層中から14か所に及ぶ旧石器時代の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器を主体とする石器群の良好な資料が得られています。

刊行にあたって、本書が学術資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料としても、広く活用されることを願ってやみません。

最後に、調査に際して多大なるご指導、ご協力をいただきました地元の方々をはじめとする皆様や関係機関、また発掘調査から整理作業に至るまで数多のご苦労をおかけしました調査補助員の皆様に、心から感謝の意を表します。

平成19年12月

財団法人 千葉県教育振興財団

理事長 福島義弘

凡　　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部（旧千葉県企業庁）による公共つくばエクスプレス沿線整備委託事業に伴う、埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県柏市若柴字溜井台264-1ほかに所在する、溜井台遺跡（遺跡コード217-033）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受けて財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の実施期間及び担当者は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は以下のとおりである。
第1章を豊田秀治・四柳 隆、第2・4章を新田浩三・山岡磨由子、第3章第1節・第2節1・3・4を四柳、第3章第2節2を山岡が執筆した。編集は、新田が担当した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部及び柏市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第1図 柏市都市計画課発行	1/2,500都市地形図11・17 平成5年3月修正測量
第3図 国土地理院発行	1/25,000地形図「流山」
第5図 千葉県県土整備部発行	1/500地形図20・21・24・25 平成9年測量
- 8 本書で使用した図面の方針はすべて座標北であり、測量系は日本測地系による。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 調査の方法と概要	4
第2節 遺跡の位置と環境	6
1. 遺跡の位置と地理的環境	6
2. 周辺の遺跡	6
第2章 旧石器時代	8
第1節 概要	8
第2節 第1文化層	10
第3節 第2文化層	18
第4節 第3文化層	20
第5節 第4文化層	31
第6節 第5文化層	77
第7節 単独出土石器	80
第3章 繩文時代以降	97
第1節 遺構	97
1. 陥穴	97
2. 土坑	99
第2節 遺物	99
1. 繩文土器	99
2. 繩文時代石器	103
3. 中世銭貨	105
4. 近世陶磁器	105
第4章まとめ	106

挿図目次

第1図 柏北部中央地区遺跡位置図	3	第34図 第4文化層第8ブロック—B遺物分布	39
第2図 グリッドの呼称例	4	第35図 第4文化層第8ブロック—C遺物分布	42
第3図 柏市北部の旧石器時代遺跡	5	第36図 第4文化層第8ブロック—D遺物分布	44
第4図 基本土層図(49U-58グリッド)	8	第37図 第4文化層第8ブロック—E遺物分布	46
第5図 下層発掘区及び石器集中地点位置図	9	第38図 第4文化層第8ブロック—F器種別分布	47
第6図 第1文化層第1ブロック検出状況	10	第39図 第4文化層第8ブロック—F母岩別分布	48
第7図 第1文化層第1ブロック器種別分布	11	第40図 第4文化層第8ブロック出土石器(1)	51
第8図 第1文化層第1ブロック母岩別分布	12	第41図 第4文化層第8ブロック出土石器(2)	52
第9図 第1文化層第1ブロック出土石器(1)	14	第42図 第4文化層第8ブロック出土石器(3)	53
第10図 第1文化層第1ブロック出土石器(2)	15	第43図 第4文化層第8ブロック出土石器(4)	54
第11図 第1文化層第1ブロック出土石器(3)	16	第44図 第4文化層第8ブロック出土石器(5)	57
第12図 第1文化層第1ブロック出土石器(4)	17	第45図 第4文化層第8ブロック出土石器(6)	58
第13図 第2文化層第2ブロック遺物分布	18	第46図 第4文化層第8ブロック出土石器(7)	59
第14図 第2文化層第2ブロック出土石器	19	第47図 第4文化層第8ブロック出土石器(8)	60
第15図 第3文化層ブロック分布図	20	第48図 第4文化層第8ブロック出土石器(9)	61
第16図 第3文化層第3ブロック遺物分布	20	第49図 第4文化層第8ブロック出土石器(10)	62
第17図 第3文化層第3ブロック出土石器	21	第50図 第4文化層第8ブロック出土石器(11)	63
第18図 第3文化層第4ブロック遺物分布	22	第51図 第4文化層第8ブロック出土石器(12)	64
第19図 第3文化層第4ブロック出土石器	22	第52図 第4文化層第8ブロック出土石器(13)	65
第20図 第3文化層第5ブロック砾・礫片分布	23	第53図 第4文化層第8ブロック出土石器(14)	68
第21図 第3文化層第6ブロック検出状況	24	第54図 第4文化層第8ブロック出土石器(15)	69
第22図 第3文化層第6ブロック器種別分布	25	第55図 第4文化層第8ブロック出土石器(16)	70
第23図 第3文化層第6ブロック出土石器(1)	25	第56図 第4文化層第8ブロック出土石器(17)	71
第24図 第3文化層第6ブロック母岩別分布	26	第57図 第4文化層第8ブロック出土石器(18)	72
第25図 第3文化層第6ブロック出土石器(2)	26	第58図 第4文化層第8ブロック出土石器(19)	73
第26図 第3文化層第7ブロック遺物分布	28	第59図 第4文化層第8ブロック出土石器(20)	74
第27図 第3文化層第7ブロック出土石器	30	第60図 第4文化層第8ブロック出土石器(21)	75
第28図 第4文化層第8ブロック石器分布	31	第61図 第4文化層第8ブロック出土石器(22)	76
第29図 第4文化層第8ブロック出土石器接合状況	32	第62図 第5文化層第9ブロック出土石器	77
第30図 第4文化層第8ブロック砾・礫片接合状況	33	第63図 第5文化層第9ブロック器種別分布	78
第31図 第4文化層第8ブロック—A遺物分布	34	第64図 第5文化層第9ブロック母岩別分布	79
第32図 第4文化層第8ブロック—A剥片石器類分布 (西区集中域)	35	第65図 単独出土石器分布	80
第33図 第4文化層第8ブロック—A剥片石器類分布 (東区集中域)	36	第66図 単独出土石器	81
		第67図 折れによる遺存部位の表示	82
		第68図 繩文時代遺構	98

第69図 遺構外出土縄文土器（1）	101	第73図 遺構外出土中世銭貨	105
第70図 遺構外出土縄文土器（2）	102	第74図 接合資料（V層段階）参考例	106
第71図 縄文時代以降の遺構・遺物分布	104	第75図 III～V層出土ナイフ形石器	108
第72図 遺構外出土縄文時代石器	105	第76図 ナイフ形石器（IV層下部段階）参考例	108

表 目 次

第1表 第1文化層第1ブロック組成表	13	第10表 第4文化層第8ブロック－B組成表	40
第2表 第2文化層第2ブロック組成表	19	第11表 第4文化層第8ブロック－C組成表	41
第3表 第3文化層第3ブロック組成表	21	第12表 第4文化層第8ブロック－D組成表	43
第4表 第3文化層第4ブロック組成表	22	第13表 第4文化層第8ブロック－E組成表	45
第5表 第3文化層第5ブロック組成表	23	第14表 第4文化層第8ブロック－F組成表	48
第6表 第3文化層第6ブロック組成表	27	第15表 第5文化層第9ブロック組成表	79
第7表 第3文化層第7ブロック組成表	29	第16表 旧石器属性表	83～96
第8表 第4文化層第8ブロック－A組成表（1）	37	第17表 文化層別器種別組成表	110
第9表 第4文化層第8ブロック－A組成表（2）	38	第18表 文化層別石材別組成表	110

図版目次

巻頭図版 旧石器時代出土石器（1）	図版8 第4文化層第8ブロック（2）出土石器
旧石器時代出土石器（2）	図版9 第4文化層第8ブロック（3）出土石器
本文中図版 遺構外出土中世銭貨	図版10 第4文化層第8ブロック（4）出土石器
図版1 土層49Uグリッド北側	図版11 第4文化層第8ブロック（5）出土石器
第1・6ブロック南東から	図版12 第4文化層第8ブロック（6）出土石器
第2ブロック北から	図版13 第4文化層第8ブロック（7）出土石器
図版2 第1・6ブロック南西から	図版14 第4文化層第8ブロック（8）出土石器
第7ブロック南東から	図版15 第4文化層第8ブロック（9）出土石器
第8ブロック－A東から	図版16 第4文化層第8ブロック（10）出土石器
図版3 第8ブロック－C・D東から 第8ブロック－E	図版17 第4文化層第8ブロック（11）出土石器
北西から 第9ブロック南西から	図版18 第4文化層第8ブロック（12）出土石器
図版4 第1文化層第1ブロック（1）出土石器	図版19 第4文化層第8ブロック（13）、第5文化層第9
図版5 第1文化層第1ブロック（2）出土石器	ブロック出土石器
図版6 第2文化層第2ブロック、第3文化層第3・4・6	図版20 出土礫・礫片
ブロック出土石器	図版21 単独出土石器及び遺構外出土縄文時代石器
図版7 第3文化層第7ブロック、第4文化層第8ブロック（1）出土石器	図版22 遺構外出土縄文土器（1）
	図版23 遺構外出土縄文土器（2）

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経緯と経過

千葉県県土整備部（旧千葉県企業庁）は、つくばエクスプレス（旧常磐新線）の建設に関連して、柏北部中央地区土地整理事業を計画した。事業の実施に先立って、千葉県県土整備部より用地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会あてに提出され、その取り扱いについて慎重な協議が重ねられた結果、可能な限り緑地として現状保存をはかる一方で、現状保存が困難な地点についてはやむを得ず記録保存の措置を講じることで協議が整い、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

溜井台遺跡は総面積が51,000m²にのぼり、調査年次が数次にわたることから便宜的に北側を溜井台遺跡(1)、南側を溜井台遺跡(2)と呼称した（第1図）。溜井台遺跡(1)は平成13年度に調査を実施し、対象面積30,290m²に対して上層確認調査3,100m²、下層確認調査1,300m²を行った。上層では、少量の縄文土器や縄文時代の石器を出土したのみで、遺構は検出されなかったことから確認調査で終了した。下層では、8地点で旧石器時代の石器が出土したため拡張したところ、それ以上の広がりが認められなかったためこちらも確認調査で終了となった。

溜井台遺跡(2)の調査は平成15年度から平成17年度の3か年にわたりて断続的に実施した。平成15年度に対象面積20,710m²に対して上層確認調査1,940m²、下層確認調査832m²を行い、その結果上層360m²、下層1,910m²が本調査の対象となった。本調査は平成16年度から平成17年度にかけて、3次にわたりて実施し、上層では縄文時代の陥穴4基と土坑1基、下層では旧石器時代遺物集中地点14地点などを検出して平成17年11月30日にすべての調査を完了した。

発掘調査及び整理作業に関わる各年度の組織・担当職員及び作業内容は下記のとおりである。

(1) 発掘調査

平成13年度

溜井台遺跡(1)

調査期間：平成14年1月4日～平成14年3月29日

内 容：（上層）確認調査 30,290m²のうち3,100m²

（下層）確認調査 30,290m²のうち1,300m²

組 織：西部調査事務所長 田坂 浩

担 当 者：上席研究員 久高将勝

平成15年度

溜井台遺跡(2)

調査期間：平成15年12月9日～平成16年2月10日、平成16年3月1日～平成16年3月29日

内 容：（上層）確認調査 20,710m²のうち1,940m²

（下層）確認調査 20,710m²のうち 832m²

組 織：西部調査事務所長 田坂 浩

担当者：柏調査室長 川島利道

平成16年度

溜井台遺跡(2)

調査期間：平成16年8月2日～平成16年9月17日

内 容：（下層）本調査 648m²

溜井台遺跡(2)

調査期間：平成17年1月6日～平成17年1月14日

内 容：（下層）本調査 324m²

組 織：西部調査事務所長 田坂 浩

担当者：柏調査室長 川島利道

平成17年度

溜井台遺跡(2)

調査期間：平成17年9月1日～平成17年11月30日

内 容：（上層）本調査 360m²

（下層）本調査 938m²

組 織：西部調査事務所長 田坂 浩

担当者：柏調査室長 川島利道

（2）整理作業

平成17年度

溜井台遺跡(1)・(2)

内 容：水洗・注記

組 織：西部調査事務所長 田坂 浩

平成18年度

溜井台遺跡(1)・(2)

内 容：記録整理から原稿執筆の一部まで

組 織：副部長兼整理課長 郷田良一

担当者：上席研究員 新田浩三、四柳 隆、整理技術員 山岡磨由子

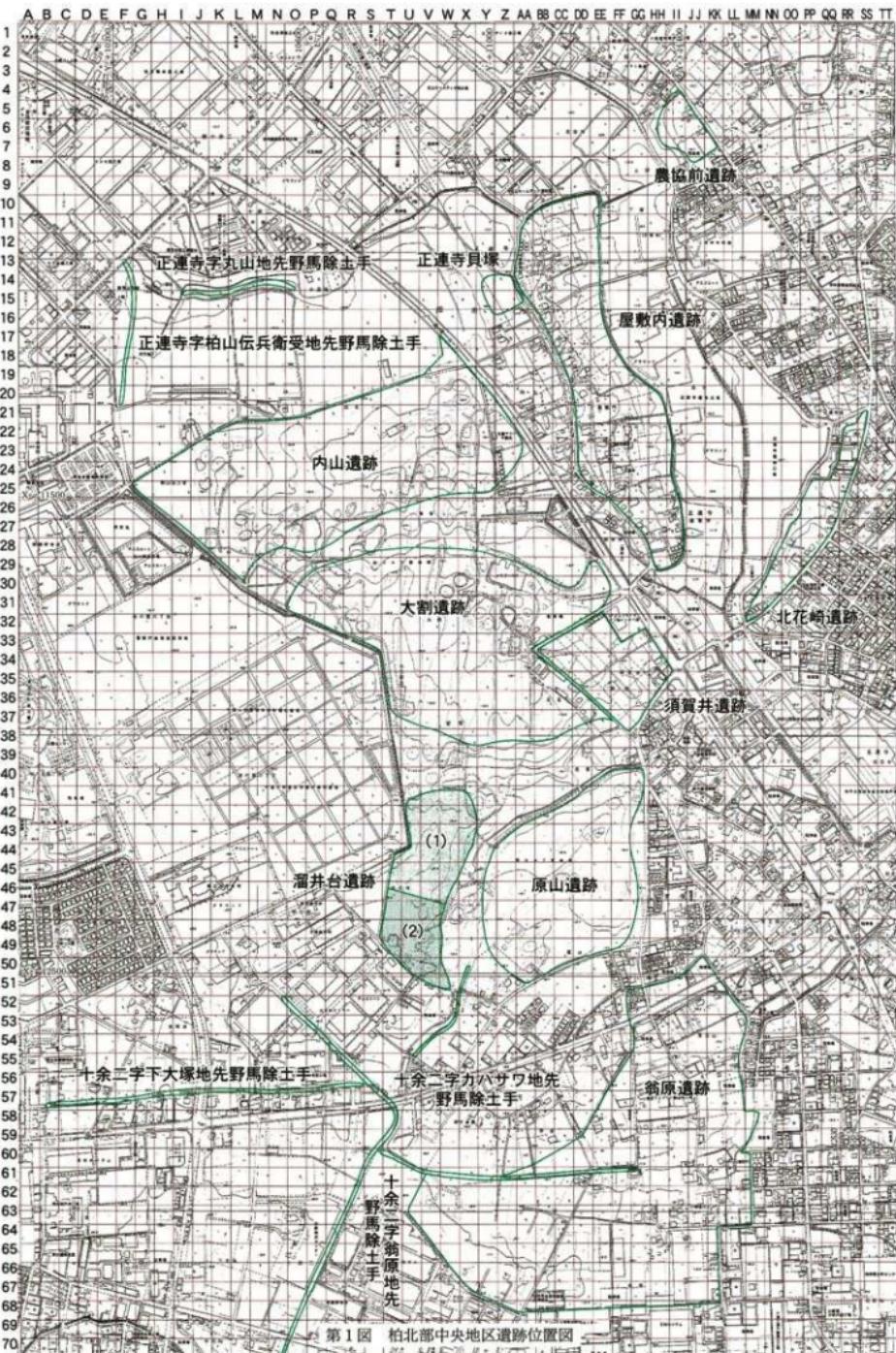
平成19年度

溜井台遺跡(1)・(2)

内 容：原稿執筆の一部から刊行まで

組 織：整理課長 高田 博

担当者：上席研究員 豊田秀治、四柳 隆、整理技術員 山岡磨由子



2. 調査の方法と概要

調査にあたっては、国土方眼座標（第IX座標系）に基づいてグリッドの設定を行った。柏北部中央地区土地区画整理事業地内に所在するすべての調査対象遺跡と重複するように40m×40mの方眼網を設定してこれを大グリッドとし、北西端を起点に南北方向を北から1、2、3……、東西方向を西からA、B、C…としてこれを組み合わせて呼称することとした（第1図）。溜井台遺跡は南北方向で41から51グリッド、東西方向でSからYグリッドにあたる。この大グリッドをさらに4m×4mの小グリッドに100分割し、やはり北西端を起点に北から南へ00、10、20……、西から東へ00、01、02……と呼称することにした。すなわち、大グリッド内の小グリッドは北西端が00、北東端が09、南西端が90、南東端が99ということになる。調査時には、この大グリッド名と小グリッド名を組み合わせて、46V-55のように呼称した（第2図）。

確認調査は、まず上層では調査対象面積の10%について遺構の種類や時期、広がり等の確認を目的にトレンチを設定した。地形等を考慮しながらトレンチの設定位置を決定し、遺構の検出と状況の把握に努めたが、溜井台遺跡(1)では近世以降の落ち込み以外にはなんら検出できず、下層確認調査に移行した。また溜井台遺跡(2)でも遺構密度は低く、わずかに縄文時代の陥穴2基と縄文時代前期の遺物集中地点を検出するにとどまった。陥穴2基については確認調査時に精査を完了したが、遺物集中地点については50V-20グリッド付近を中心にして15mほどの範囲に遺構等の存在が想定されたことから本調査対象範囲となった。本調査では縄文時代前期後半の土器片がやまとまって出土したのみで、整理作業の結果、分布密度はそれほど濃密ではない、掘り込みや落ち込みを伴わない、炭化物・焼土等を共伴しない、出土遺物のほとんどが小破片であること等の理由から、目立った遺物のみの報告にとどめることとした。

下層確認調査は、調査対象面積の4%について2m×2mのグリッドを設定して実施した。確認調査の結果、溜井台遺跡(1)では7か所のグリッドから石器の出土が確認され、グリッドを拡張して広がりの把握に努めた。その結果、4か所で複数の石器が出土したが、分布的な広がりは収束したものと判断されたため、確認調査で終了となった。溜井台遺跡(2)では9か所グリッドで石器が出土し、同様に拡張調査したところ、7か所でさらに分布の拡大が予想され、下層本調査に移行することとなった。

溜井台遺跡(2)の下層本調査は平成16年度から17年度にかけて、断続的に3次にわたって実施した。その結果、III層より下位に重複する新たな集中地点も発見され、最終的には立川ローム層III層～IX層にかけて10か所の石器集中地点を検出した。

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

第2図 グリッドの呼称例



第3図 柏市北部の旧石器時代遺跡

第2節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

溜井台遺跡の所在する柏市は、千葉県の北西部、東京から約30kmに位置するベッドタウンである。人口は約35万人で、その中心であるJR柏駅は1日の乗降客数が32万人余りと千葉県第1位を誇っている。溜井台遺跡をはじめとする柏北部中央地区は、そのJR柏駅から北北西に約4kmの柏市若柴地区、正連寺地区、十余二地区にまたがった地域である。

溜井台遺跡は柏北部中央地区的西端、柏市若柴字溜井台に所在する。40年以上の歴史を持っていた柏ゴルフ場の跡地にあたるため遺跡分布地図には遺跡として記載されていなかったが、土地区画整理事業開始に先立って行われた試掘調査で遺跡の所在が明らかになった。遺跡のすぐ西側には千葉大学園芸学部柏農場があり、そのさらに西側は柏の葉公園として整備されており、遺跡も一部は現状保存されている。

遺跡は標高約18mの台地上に立地し、遺跡の北東側を流れる「地金堀」と呼ばれる小河川に向かって徐々に標高を減じている。地金堀は、柏市正連寺地区にあるこんぶくろ池湧水を水源に利根川と併行して南東方向へ流れ、JR北柏駅付近で西方からきた大堀川と合流し、まもなく手賀沼へと流入する。柏北部中央地区的遺跡群（第1図）は、この地金堀と大堀川の開析谷にはさまれた、広い平坦面を持つ台地上に立地している。

2. 周辺の遺跡（第3図）

溜井台遺跡の周辺では数多くの遺跡の所在が知られるが、今回は本遺跡の主体をなす旧石器時代の遺跡に限って記載することとする。

既知の旧石器時代遺跡は、大半が常磐自動車道の建設に伴って昭和50年代に当財団が調査したものである。立川ローム層第IX層を主体に石器集中地点27か所以上を検出、石器2,500点以上を出土した中山新田（I）遺跡をはじめ、北から花前（III）遺跡、矢船（I）遺跡、館林（II）遺跡、館林（I）遺跡、水砂（II）遺跡、中山新田（II）遺跡、聖人塚遺跡、元割遺跡で旧石器時代の石器集中地点が調査、報告されている。聖人塚遺跡では、当時佐倉市木戸場遺跡について県内2例目となる荒屋型彫器が出土し、注目された。また水砂（II）遺跡のDブロックからは、東内野型尖頭器が4点出土している。

溜井台遺跡の東方約1.5kmに位置する鴻ノ巣（II）遺跡は、北柏地区土地区画整理事業に伴って当財団の前身である財団法人千葉県都市公社文化財調査事務所が調査した遺跡である。現在の地籍では柏市松葉町5丁目にあたる。昭和48年に実施した第2次調査で立川ローム層III層からIX層にわたって3文化層4ブロックが検出され、東葛飾地域における旧石器時代遺跡調査の嚆矢となっている。また、黒曜石の産地分析と年代測定が行われ、38点の試料のうち37点までが箱根系であることが判明している。

これらのほか、集中地点は検出されていないものの旧石器時代の石器が出土している遺跡としては、高砂遺跡、花前（I）遺跡、花前（II）遺跡、中山新田（III）遺跡、下原遺跡が周知されている。

溜井台遺跡をはじめとする柏北部中央地区的調査は、平成10年度より開始され現在も継続中である。整理作業は溜井台遺跡を除いては着手されたばかりなので詳細を示すことはできないが、これまでの調査で農協前遺跡、屋敷内遺跡、内山遺跡、原山遺跡、大割遺跡、須賀井遺跡の各遺跡から旧石器時代の石器集中地点が検出され、それぞれの本調査を実施している。

また、つくばエクスプレスで一駅北の柏たなか駅周辺では、独立行政法人都市再生機構による柏北部東

地区土地区画整理事業が行われており、それに伴う埋蔵文化財調査が平成10年度より当財団によって継続中である。こちらの調査でも駒形遺跡、大松遺跡、富士見遺跡、矢船（II）遺跡、原畠遺跡、小山台遺跡、寺下前遺跡の各遺跡と、常磐自動車道関連で調査した遺跡の続きである館林（II）遺跡、矢船（I）遺跡の各遺跡で旧石器時代の調査成果があがっている。特筆すべきは平成14年度に調査した大松遺跡（6）で、11か所に及ぶ石器集中地点が検出され、このうち立川ローム層VII層～IX層で検出された10か所は環状プロック群を形成している。石器は黒曜石を主体に総数2,000点以上が出土している。

こうしてみてくると、柏市北部の下総台地上は、旧石器時代遺跡の分布が極めて濃密な地域であるといつても過言ではなかろう。それは、柏北部中央地区と柏北部東地区の埋蔵文化財調査が終了し、各遺跡の報告書の刊行が完了した時点で明らかにされるであろう。

参考文献

- 柏市教育委員会 1983 「柏市高砂遺跡 林台遺跡」
千葉県教育委員会 1997 「千葉県埋蔵文化財分布地図(1) 一東葛飾・印旛地区 (改訂版)」
(財)千葉県都市公社 1974 「柏市鴻ノ巣遺跡」
(財)千葉県文化財センター 1982 「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書 I -水砂・館林・花前II-1-」
(財)千葉県文化財センター 1984 「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書 II -花前 I・中山新田II・中山新田III-」
(財)千葉県文化財センター 1985 「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書 III -矢船・花前II-1・花前II-2-」
(財)千葉県文化財センター 1986 「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書 IV -一型人塚・元割・中山新田 I-」
(財)千葉県文化財センター 2003 「千葉県文化財センター年報No28—平成14年度—柏市大松遺跡(6)」

第2章 旧石器時代

第1節 概要

溜井台遺跡は、大堀川と合流し手賀沼へと流れ込む地金堀上流右岸、標高16m～20mの台地上に位置し、遺跡面積は51,000m²である。平成13・15～17年度にわたる調査により、IX層からIII層かけては958点、単独出土10点、総数968点の旧石器時代の遺物が出土した。

基本層序（第4図）

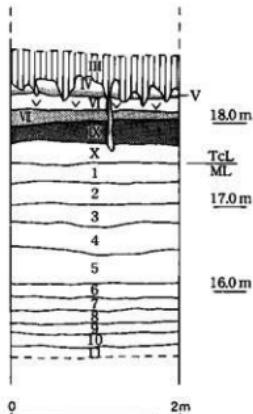
* III層より上部はゴルフ場建設・整地のため広範囲にわたり削平されている。

立川ローム（TcL）

- III層 褐色土。軟質なソフトローム。
IV層 褐色土。一部ソフト化したハードロームを含む。
V層 暗褐色土。硬質。細かな白色スコリアを含む。
VI層 褐色土。硬質。AT、ソフトロームを含む。
VII層 褐色土。硬質。直径1mmほどの赤茶スコリアを含む。
IX層 暗褐色土。硬質。直径5mm～10mmほどの赤茶スコリアを含む。
X層 褐色土。硬質だが、湿って粘りを帯びた軟質部分あり。

武藏野ローム（ML：黄褐色ローム）

- 1～3 やや軟質。
4・5 上下の層よりやや暗い。
6 やや軟質。
7 TP（東京軽石層：橙色の砂粒状）を少量含み、しまる。
8 TPを多量に含む。
9 TPを少量含む。粘質土層。
10 粘土混じりの粘質土層。
11 灰白色粘土層。

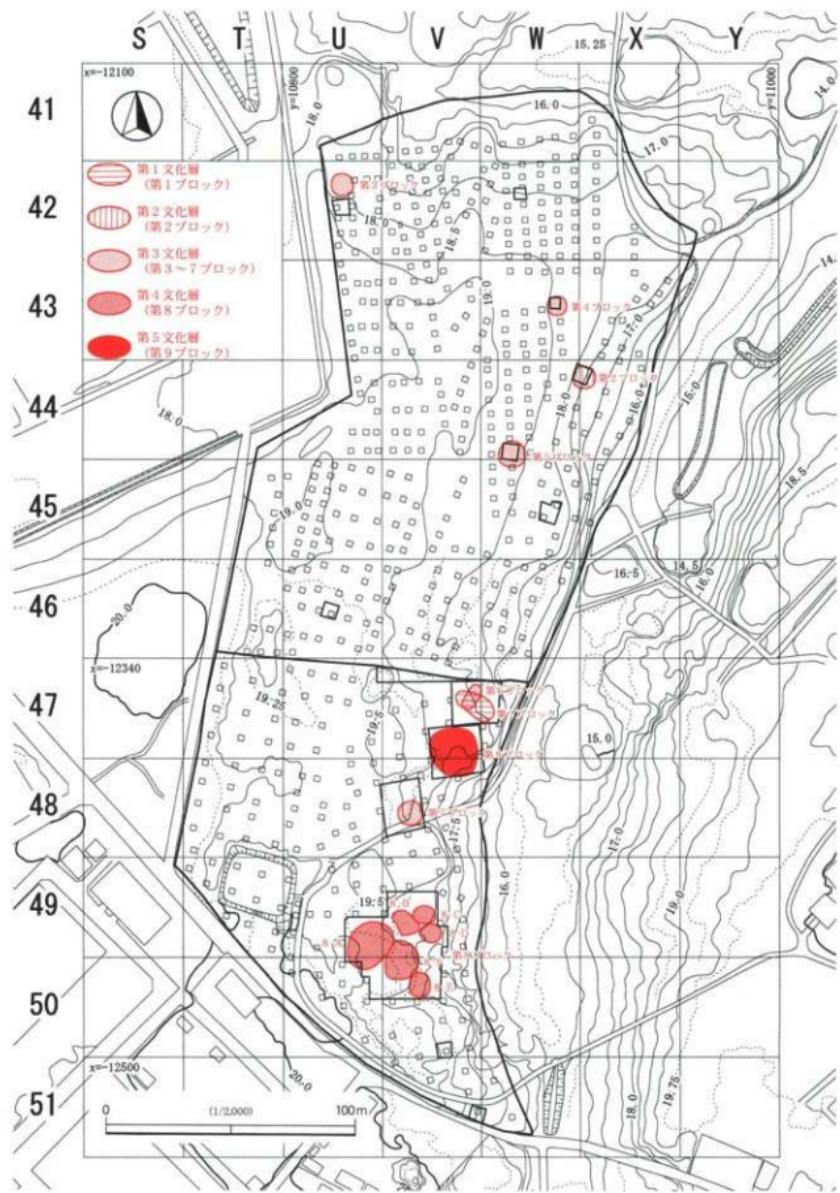


第4図 基本土層図
(49U-58グリッド)

本遺跡からは14か所の遺物集中地点が検出されたが、整理作業を通して、5文化層9ブロックにまとめられた（第5図）。

- 第1文化層 VII～IXa層 第1ブロック
第2文化層 V層 第2ブロック
第3文化層 III～V層 第3～第7ブロック
第4文化層 III～IV層下部 第8ブロック（A～F集中城）
第5文化層 III層 第9ブロック

第3文化層と第4文化層は器種・石材組成において近似し、同一時期に存在した可能性もある。第8ブロックは、A～Fとした小集中城6か所で構成される。



第5図 下層発掘区及び石器集中地点位置図

第2節 第1文化層

第1ブロック（第6～12図、第1表、図版1・2・4・5・20）

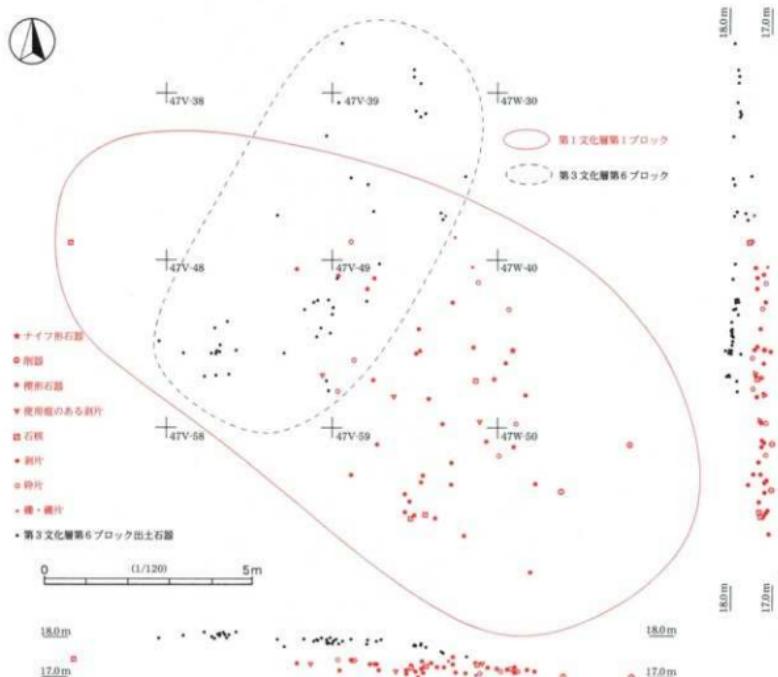
遺物分布状況

47Vグリッドから47Wグリッドにかけて出土した石器群は、明らかな層位差を持って二分される。下位は当遺跡最下層であるVII層～IX層、上位はIII層～V層に分布することが確認された。この下位のまとまりが第1文化層第1ブロックである。遺跡(2)の北東端に位置し、標高は18.250m～18.750m（標高差0.5m程）で、西から東に向かいながらかに下降している。

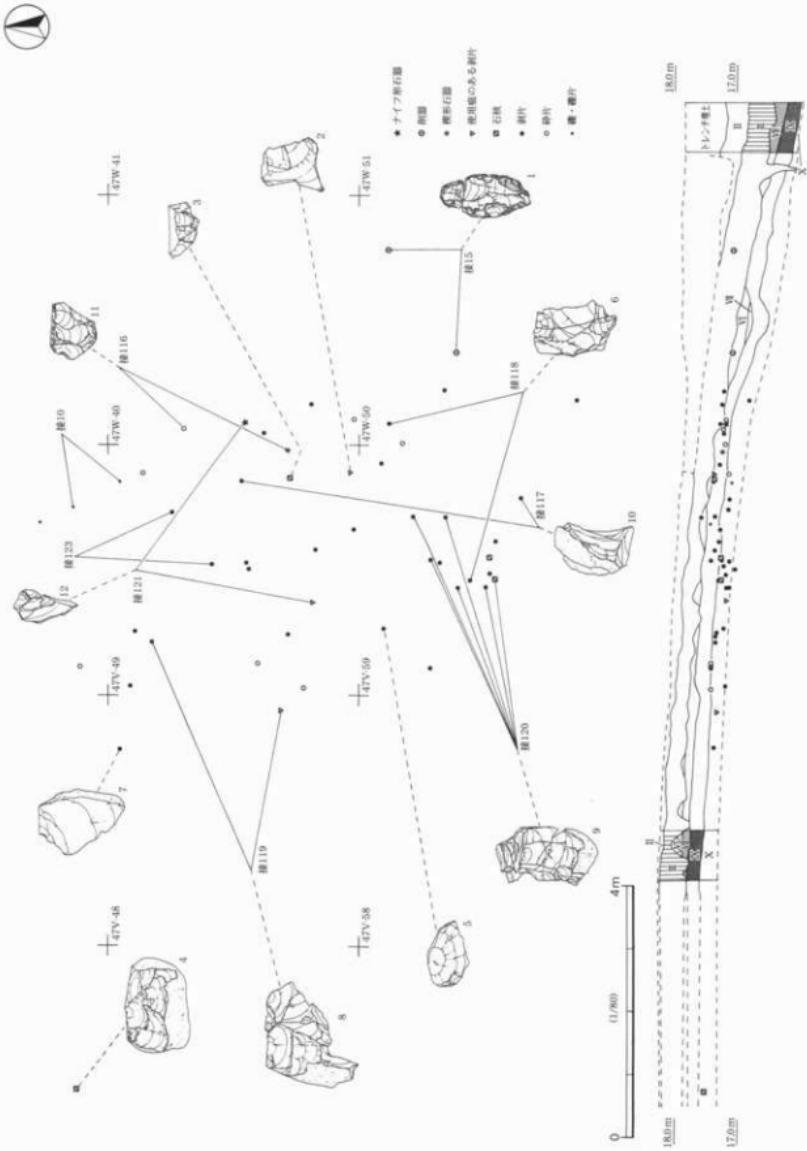
出土点数は49(51)点で、器種内訳はナイフ形石器1点、削器1(2)点、楔形石器1点、使用痕のある剥片3点、石核4点、剥片・碎片36(37)点、礫・礫片3点である。なお、ここでの数量は組成上の数であり、括弧内は出土した石片数を示した。第1表に示した通り、石材は多種にわたるが60%以上をガラス質黒色安山岩が占める。

出土石器

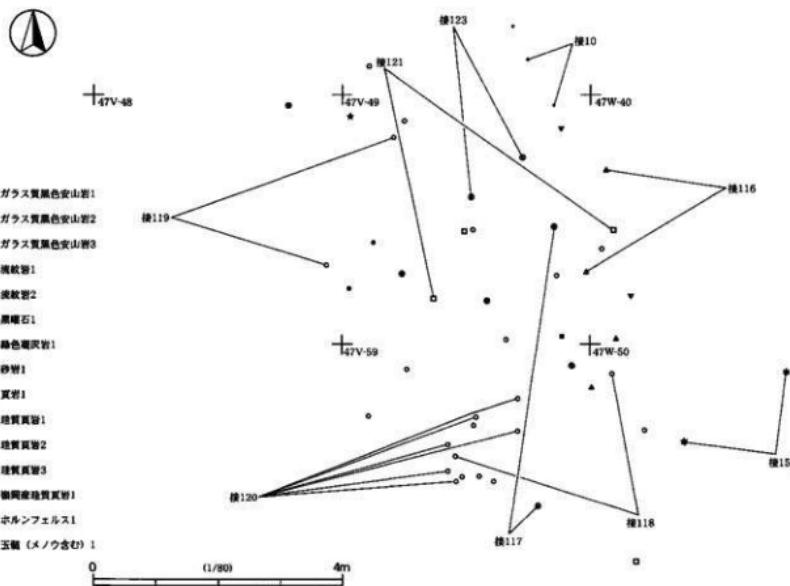
削器（1：器種名に続く括弧内の数字は挿図番号を示す） 半透明の薄墨色で、直径0.6mmほどの斑晶が多数混入する黒曜石1を母岩とする。頭部調整が行われ、打面を小口に設定された石刃が素材である。背面に残



第6図 第1文化層第1ブロック検出状況



第7図 第1文化層第1ブロック器種別分布



第8図 第1文化層第1ブロック母岩別分布

る石核時の作業面は、すべて主要剥離面と同一の方向から加撃される。剥片剥離時には、下端が固定、あるいは台石のようなものに接していたと思われ、下部末端は砕けて潰れる。加工は主要剥離面側から行われているため、背面周縁に二次加工痕が残り、器形に沿った木葉形に整形されている。外周は刃潰し状にグラインディングされており、器厚の薄い部分から折れが生じている。第1ブロックの東南に2mの距離を置き、上・下部が離れた状態で出土している。

使用痕のある剥片（2） 白色半透明で、所々水和層のある玉髓であり、下部は主要剥離面の末端部が背面にまで回り込み、面として認識される。背面左下部は直線的であり、微細剥離痕が肉眼で観察される。

石核（3・4） 3は厚みのある剥片素材で、自然面と風化面は黄味の強い黒褐色のガラス質黒色安山岩1である。右側面の古い剥離面を打面として2面以上の剥離作業が行われ、180°持ちかえて素材となった剥片が剥離されている。この後主要剥離面を打面として周縁から加工される。4の母岩は原礫面が淡黄灰色であり、剥離面は濃灰・淡黄色が線層状となる流紋岩1である。直径1mm～2mmの石英粒の斑晶が疎に混じり、乳児の頭ほどの大ささである。長軸方向の一端を打ち割って、打点対縁の広い台形様の剥片を作出しようとする意図が感じられる。加撃は棟上、または上面からのみ行われ、作出されたはずの剥片は遺跡内からは検出されていない。なお、約3km北方に位置する花前I遺跡において、同様の礫器（頁岩製）の報告がある。

剥片（5～7） 5は同一方向から連続して剥離された横打剥片のうちの1片である。6は下部を固定し

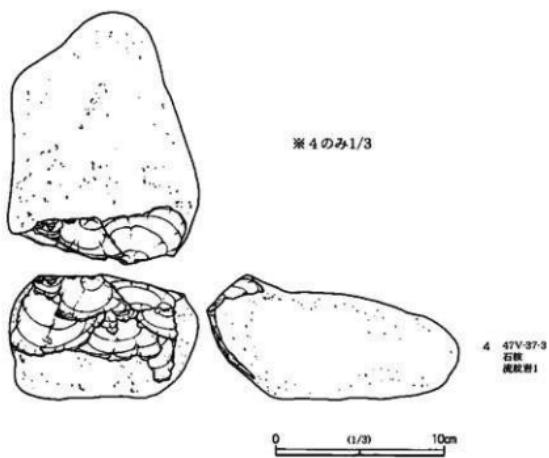
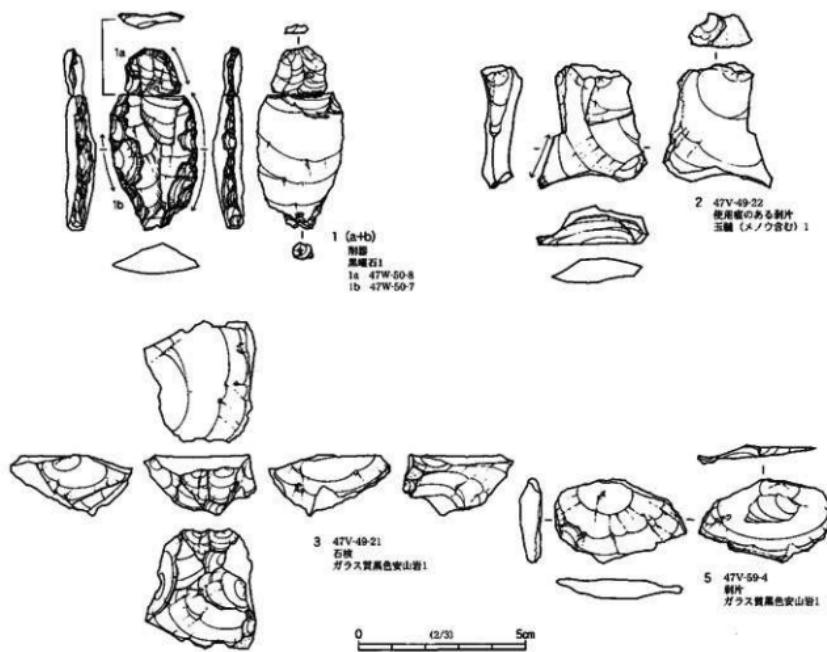
て剥離されており、打点直下で折れ、縁に二分される。7は右側面に帯状の自然面が残る薄い板状の剥片である。打面は調整痕のない平坦面であり、左側辺には刃こぼれ状の細かい凹凸がみられるが、器厚の薄さもあいまって人為的な所産かどうかは不明である。いずれもガラス質黒色安山岩を母岩とする。

接合資料（8～12） 8は薄い板状の2剥片からなる。同じ打面からは少なくとも4片以上の剥片が作出されている。8bは両側縁が末端で収束し、その尖端部には刃こぼれ痕が看取される。9は剥片5点と石核1点の接合資料である。9a→9eの順に剥離されるが、9aから9bに至る作業間には、剥片剥離、頭部調整など、9bの背面に見られるような剥離工程が観察される。9b剥離後、同一の打面からは9cを含む2片以上が剥離されるが、9c以外は検出されていない。次に90°持ちかえ、9d剥離後の作業面を打面にして9eを含む3片以上が剥離される。8・9はガラス質黒色安山岩1を母岩とする。10の剥離面は線状に縞をなし、自然面は針でひっかいたような縮み布状のガラス質黒色安山岩2である。10a、10bの順に同一打面から連続して加撃されている。10b背面上部に2面の剥離痕があるが、目的的剥片作出に伴うものであると思われる。11の母岩は自然面が淡黄褐色で、針でひっかいたような凹凸がある珪質頁岩1である。粗い分割後放置され、時を経て再加工された石器であり、風化剥離面にはリングが観察されるが、自然面との接は角が取れ丸みがある。上・下部に微細な敲打痕を伴った二次加工痕がある。11aは11bの稜を加工する際に調整剥離された碎片であり、2点間は1.6m離れている。12は縁がかった光沢のある懐岡産珪質頁岩1を母岩としたナイフ形石器とその調整剥片の接合資料である。刃部に使用による欠けがみられ、右側面から加撃してこの微細剥離痕部分を薄く削ぐように12aが剥離される。右半部も同様にして削がれた痕が残っていることから、刃こぼれをおこした刃部を繰り返し再生させて使用していたものと推定される。12bの基部は楔状となっており、刃部と基部とで厚さの逆転がみられる。替刃の折り取りのように刃部を再生しながら有効に使われてきたと思われるが、12bに使用痕は看取されない。なお、12a、12bは当ブロックの中心部に分布し、2点間の距離は約3mである。

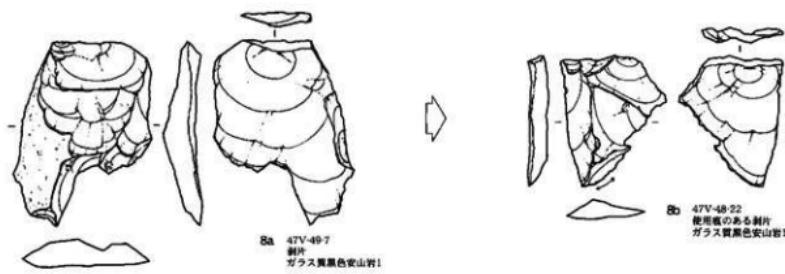
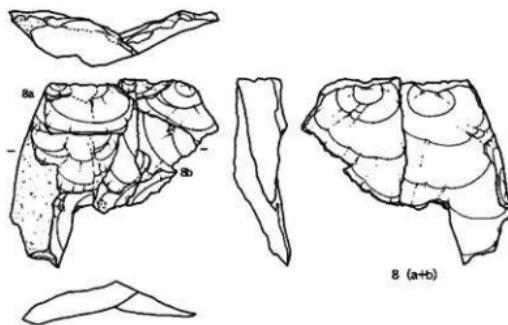
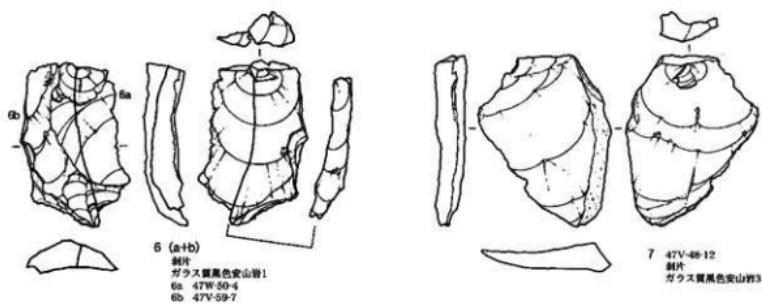
第1表 第1文化層第1ブロック組成表

名 称 / 器種	ナイフ形石器	剥離	複形石器	使用感のある 剥片	石核	剥片	砂片	縞	網片	高数	点数比	重数(g)	重数比
ガラス質黒色安山岩1	0	0	0	1	3	17(8)	1	0	0	22(23)	44.9%	198.65	9.97%
ガラス質黒色安山岩2	0	0	0	0	0	5	0	0	0	6	10.3%	37.39	1.87%
ガラス質黒色安山岩3	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	6.1%	45.75	2.35%
灰 級 縫 1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2.0%	1432.50	71.85%
灰 級 縫 2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2.0%	148.57	7.45%
黑 磁 石 1	0	102	0	0	0	0	0	0	0	1(2)	2.0%	9.62	0.48%
綠 色 磁 石 1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	4.0%	0.77	0.04%
赤 級 縫 1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	4.0%	79.21	3.97%
質 縫 1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.0%	2.11	0.11%
綠 質 黃 級 1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2	4.0%	13.48	0.68%
綠 質 黃 石 2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	4.0%	0.88	0.04%
綠 質 黃 石 3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2.0%	0.34	0.01%
懷 岡 產 硅 質 頁 岩 1	1	0	0	1	0	2	0	0	0	4	8.1%	10.28	0.52%
ホルンフェルス1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.0%	1.76	0.09%
玉 鏊 (メノウ食む) 1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2.0%	11.48	0.57%
合 计	1	102	1	3	4	29(40)	7	1	2	49(51)	100.0%	1992.78	100.0%

* () は出土点数

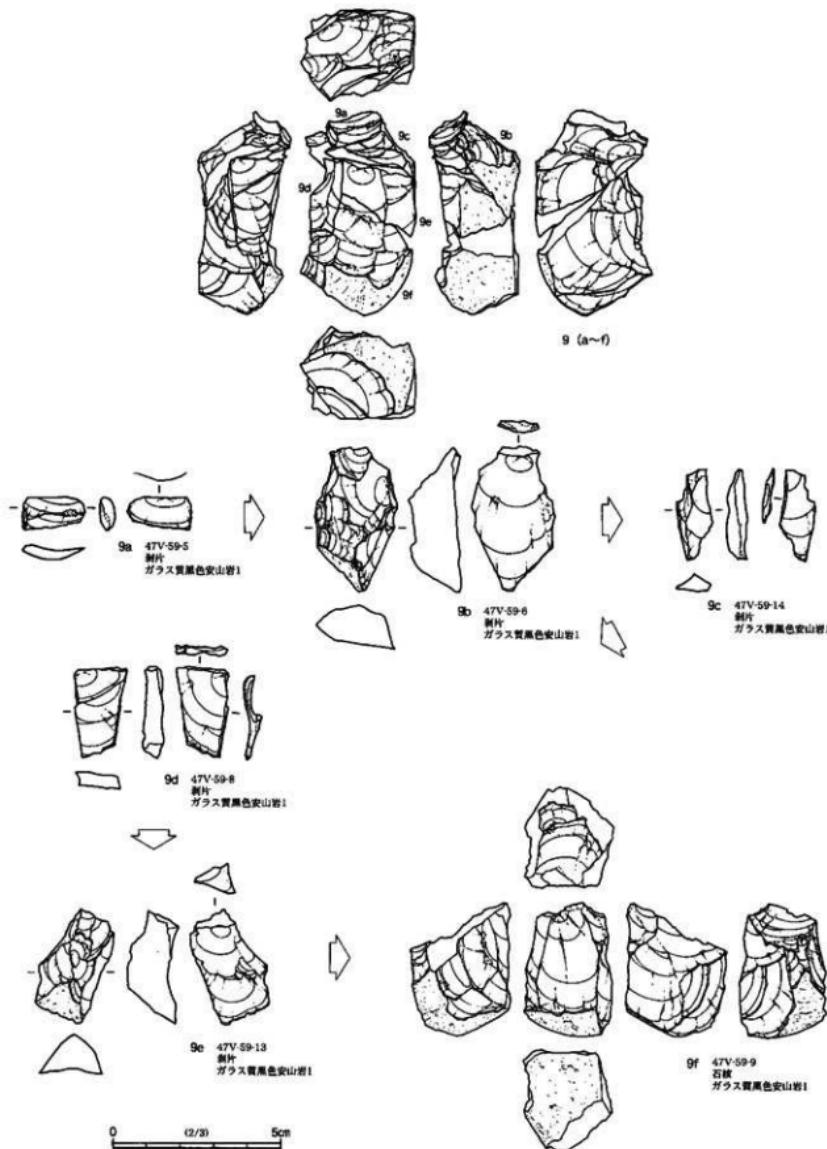


第9図 第1文化層第1ブロック出土石器 (1)

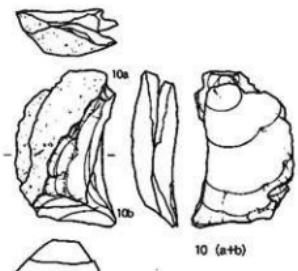


0 (2/3) 5mm

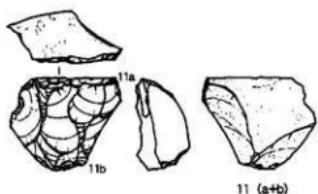
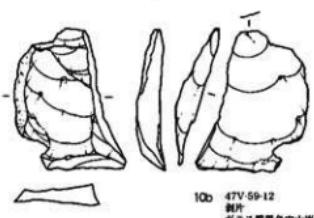
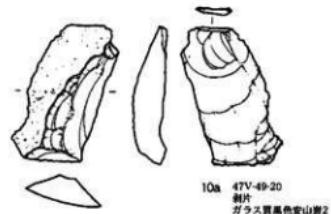
第10図 第1文化層第1ブロック出土石器 (2)



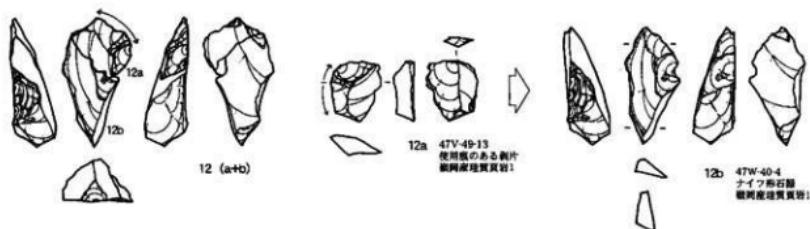
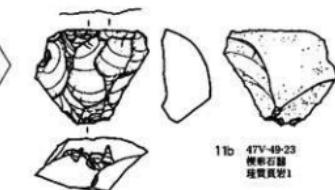
第11図 第1文化層第1ブロック出土石器（3）



0 2/3 5cm



47V-49-3
刮片
地質頁岩1



第12図 第1文化層第1ブロック出土石器 (4)

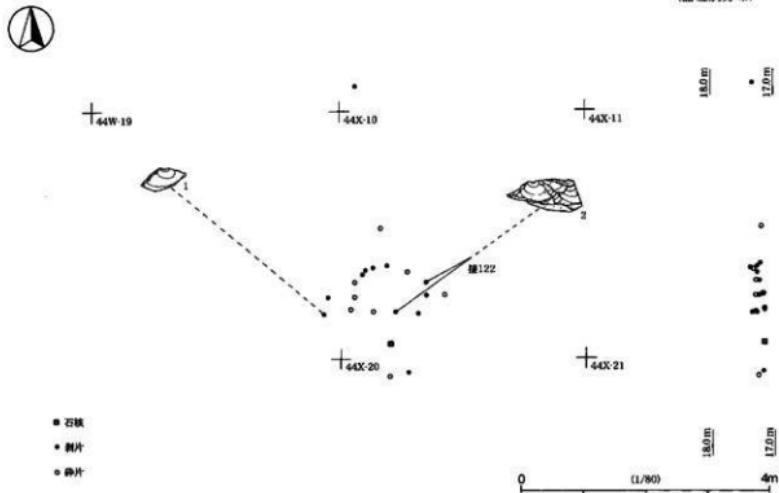
第3節 第2文化層

第2ブロック（第13・14図、第2表、図版1・6）

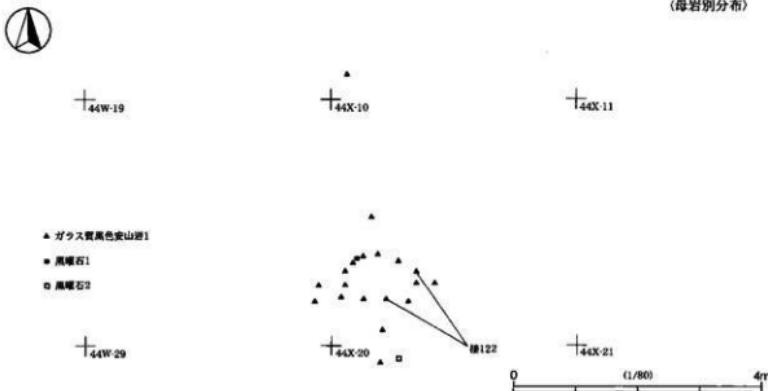
遺物分布状況

第2ブロックは遺跡(1)の東側に位置し、西から東に向かって下降する緩斜面から検出された。石器は44X-10グリッドを中心とした南北4.8m、東西2.1mの範囲に分布するが、最北の1点を除くと直径2.5mの

（器種別分布）



（母岩別分布）



第13図 第2文化層第2ブロック遺物分布

円内に包含され、標高17.162m～17.390m、約22cmの高低差を持って分布する。この付近の土層の調査は行われていないため、出土時の所見及び石器の情報から、立川ローム層第1黒色帶に相当するV層から出土したものと判断した。

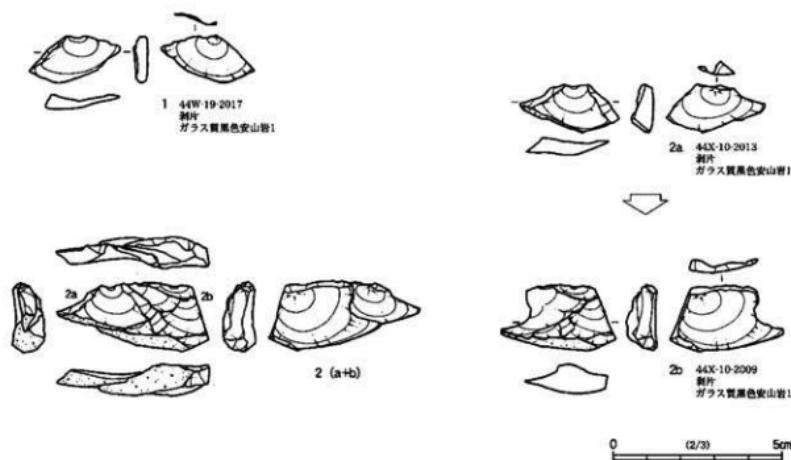
出土点数は21点であり、器種内訳は石核1点、剥片・碎片20点である。黒曜石が2点出土しているが、90%以上の19点がガラス質黒色安山岩である。

出土石器

剥片(1)、接合資料(2) 1、2a、2bは同一工程で作出された目的的剥片であり、2aと2bは接合する。厚みのある板状の素材を、かまほこを切るように端から順に剥離作業が行われたことを示す。底面には自然面が残る。ガラス質黒色安山岩1の19点のうち横長剥片は9点であり、実測した3点の剥片と同様の形状である。

第2表 第2文化層第2ブロック組成表

母岩名 / 器種	剥片	石核	砂片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	10	1	8	19	90.4%	14.99	81.87%
黒曜石 1	1	0	0	1	4.7%	2.95	16.11%
黒曜石 2	1	0	0	1	4.7%	0.37	2.02%
合計	12	1	8	21	100.0%	18.31	100.0%



第14図 第2文化層第2ブロック出土石器

第4節 第3文化層

第3文化層は、第3ブロックから第7ブロックまでの5地点が点在する。最も近接する第6・7ブロック間でも50m以上の距離があり、各々の関連性は薄いと思われる。また第3・4ブロックは土層断面が精査されていないため、層序区分を調査時の所見、石器組成・形状に拠り、大まかにⅢ層～V層ととらえたものである。本来ならば、挿図・母岩番号は文化層単位で通し番号を付すところであるが、各々の生活面が同一であった根拠が薄いため、第3文化層に関してはブロックごとにまとめ、それぞれに記述した。

第3ブロック（第16・17図、第3表、図版6）

遺物分布状況

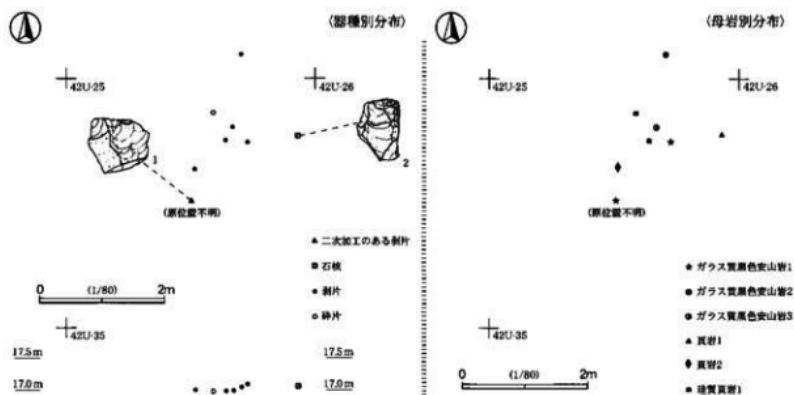
遺物は42U-25グリッドを中心とした長径2m、短径1.5mのほぼ平坦な場所に分布する。遺跡(1)の北西端に位置し、標高は17.5m～18.0mである。出土点数8点の器種内訳は二次加工のある剥片1点、石核1点、剥片5点、碎片1点のみで、礫・礫片は出土していない。ガラス質黒色安山岩、頁岩、珪質頁岩が高低差1cmをもって分布する。

出土石器

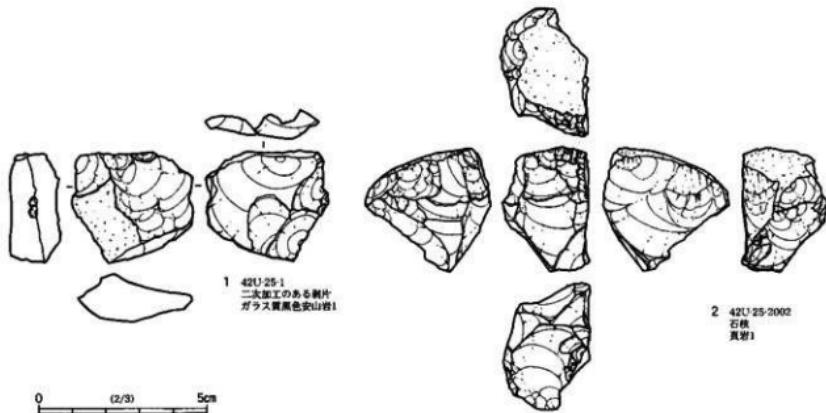
二次加工のある剥片（1） 自然面は黄褐色、剥離面は黒褐色のガラス質黒色安山岩1を母岩とする。厚みのある素材剥片の側縁から器厚を削ぐような剥離作業が行われ、稜上調整される。



第15図 第3文化層ブロック分布図



第16図 第3文化層第3ブロック遺物分布



第17図 第3文化層第3ブロック出土石器

第3表 第3文化層第3ブロック組成表

母岩名 / 器種	二次加工のある剥片	石核	剥片	脊片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黑色安山岩1	1	0	1	0	2	25.0%	22.50	37.06%
ガラス質黑色安山岩2	0	0	1	0	1	12.5%	2.19	3.61%
ガラス質黑色安山岩3	0	0	1	0	1	12.5%	1.61	2.65%
頁岩1	0	1	0	0	1	12.5%	33.08	54.49%
頁岩2	0	0	1	0	1	12.5%	0.86	1.42%
珪質頁岩1	0	0	1	1	2	25.0%	0.47	0.77%
合計	1	1	5	1	8	100.0%	60.71	100.0%

石核（2）頁岩という石材の特徴も一因であるが、右上端部の加工中に右側面が筋理により剥がれる。このうちに舟形になった後を漸すように調整加工される。

第4ブロック（第18・19図、第4表、図版6）

遺物分布状況

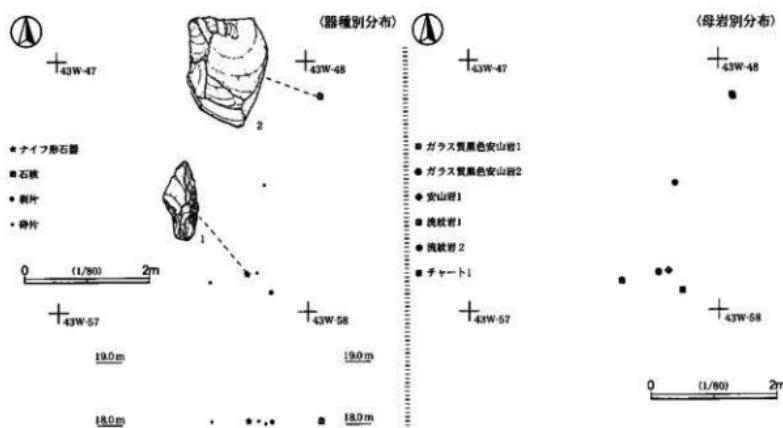
遺物は43W-47グリッドを中心とした南北3.4m、東西1mほどの楕円の中に分布する。遺跡（1）北東のほぼ平坦面（標高18.5m）に立地する。出土点数7点の器種内訳は、ナイフ形石器（ガラス質黑色安山岩2）1点、石核（チャート1）1点、剥片（ガラス質黑色安山岩1・チャート1）2点、砾片3点である。

レベル差はなく、標高18.040m付近にまとめて分布する。

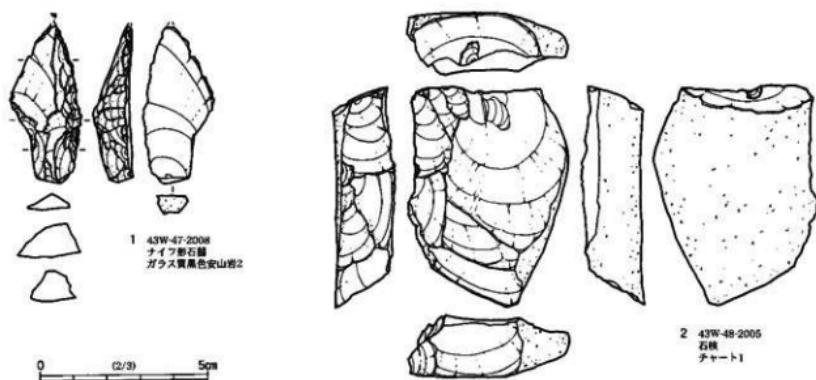
出土石器

ナイフ形石器（1）自然面打面の剥片を素材に、広縁辺を刃部にしつらえる。器長対刃部の割合は5対3であり、刃部の長さが目立つ。左基部はゆるく抉れる。

石核（2）偏平な板状砾の一端を落としたとの作業面を打面として縦に分割、あるいはスライスするように剥片剥離している。こうして厚みが均等になった石核を素材とし、左端から同一幅の剥片を剥離したものと推察されるが、目的的剥片は検出されなかった。



第18図 第3文化層第4ブロック遺物分布



第19図 第3文化層第4ブロック出土石器

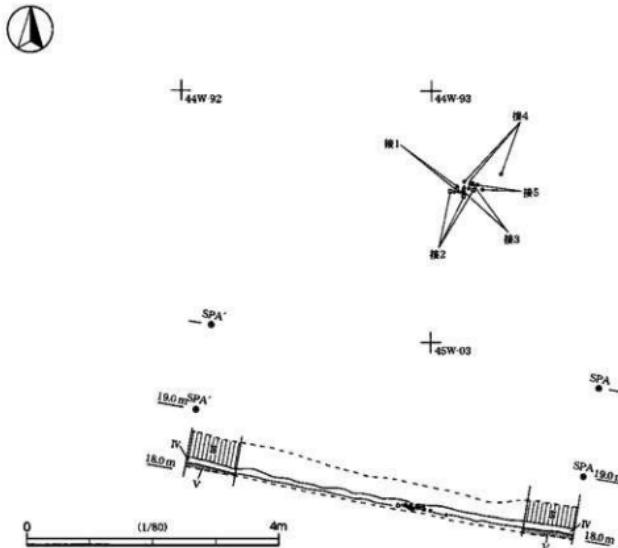
第4表 第3文化層第4ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石器	石核	剥片	機片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黑色安山岩1	0	0	1	0	1	14.29%	19.18	5.73%
ガラス質黑色安山岩2	1	0	0	0	1	14.29%	8.23	2.46%
安山岩1	0	0	0	1	1	14.29%	40.58	12.13%
流紋岩1	0	0	0	1	1	14.29%	104.46	31.23%
流紋岩2	0	0	0	1	1	14.29%	90.12	26.94%
チャート1	0	1	1	0	2	28.57%	71.90	21.50%
合計		1	1	2	3	100.00%	334.47	100.00%

第5ブロック（第20図、第5表、図版20）

遺物分布状況

遺物は44W-93グリッドの南北0.2m、東西0.8mとごく小さな範囲に集中して出土する。遺跡(1)のほぼ中央東寄りに位置し、標高は18.5m～19.0m（標高差は0.25m程）で西から東に向かいゆるく傾斜する。出土点数は14点であり、すべてIII～V層に分布する被熟した礫・礫片である。このため実測は行わず、写真掲載（写真図版20、3・4）に留めた。



第20図 第3文化層第5ブロック礫・礫片分布

第5表 第3文化層第5ブロック組成表

母岩名 / 器種	種	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
波紋岩 1	0	3	3	21.43%	190.69	5.28%
波紋岩 2	0	2	2	14.29%	800.93	22.10%
波紋岩 3	1	0	1	7.14%	208.35	5.75%
波紋岩 4	0	2	2	14.29%	422.90	11.67%
波紋岩 5	0	1	1	7.14%	619.49	17.10%
砂岩 1	0	2	2	14.29%	813.93	22.46%
砂岩 2	0	3	3	21.43%	567.02	15.65%
合 計		13	14	100.00%	3623.31	100.00%

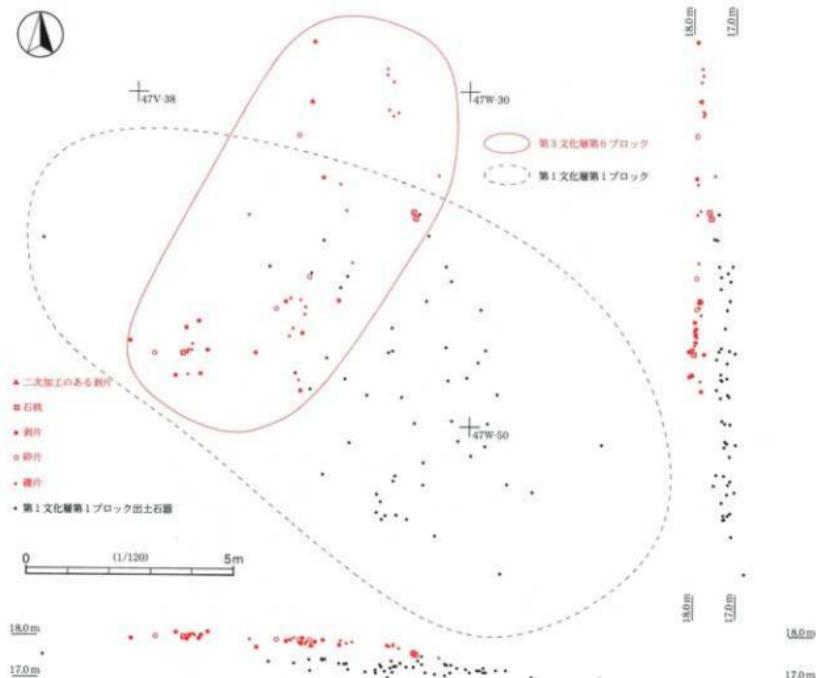
第6ブロック（第21～25図、第6表、図版1・2・6）

遺物分布状況

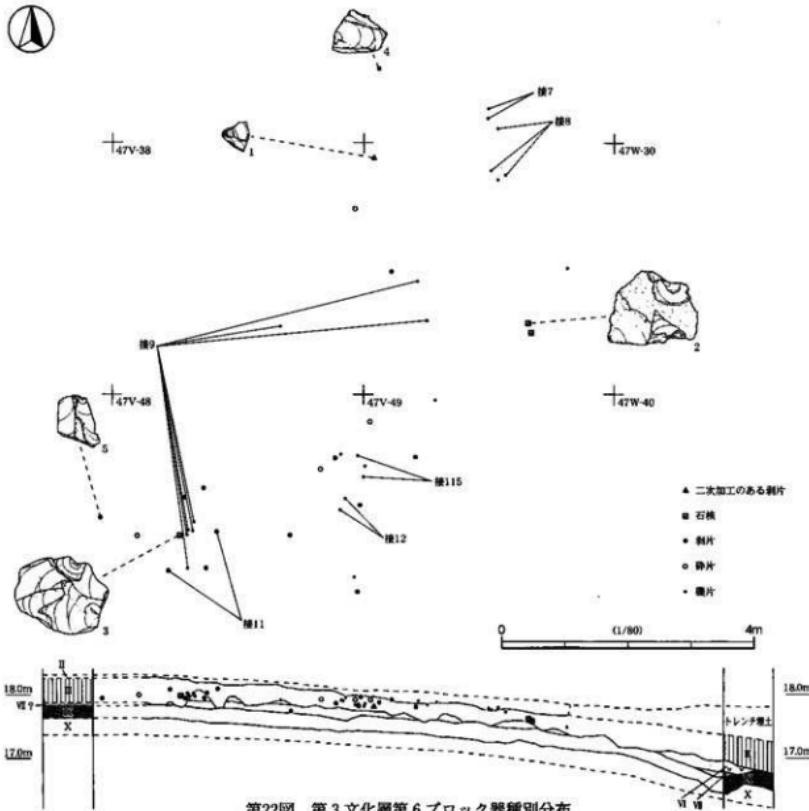
第1文化層第1ブロックの項でも述べたが、遺物のまとめりは層を二分した。その上部の層が第3文化層第6ブロックである。

遺物は47V-48・49グリッドを中心に出土し、北東～南西に8.6m、東西に4.4mの範囲に分布する。遺跡(2)の北東端に位置し、西から東に向かいゆるやかに傾斜する。III層以下、東側は谷に向かって傾斜を強めているが、後世の埋土によって表面はなだらかに保たれる。なお、IV、V、VI層はIII層に取り込まれて、分層が困難である。

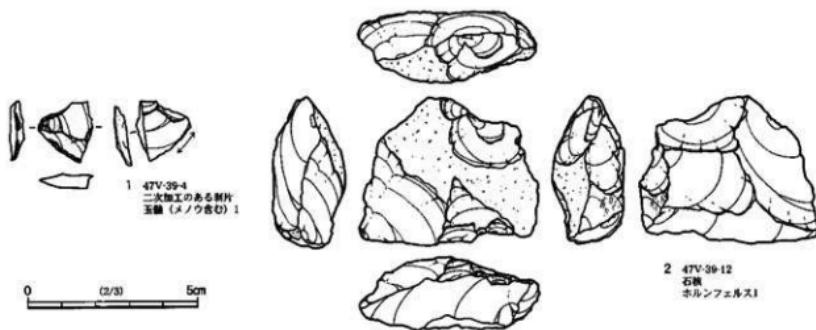
出土点数は44点、出土レベルは17.495m～18.112mであり、高低差は0.617m、平均レベルは17.884mである。石器類と礫・礫片は土層の傾斜に沿って、同一層から出土し、その器種組成は、二次加工のある剥片1点、石核3点、剥片12(13)点、碎片4点、礫片23点である。検出された石材は、ガラス質黒色安山岩、安山岩、流紋岩、黒曜石、砂岩、珪質頁岩、ホルンフェルス、玉髓（メノウ含む）と多様である。



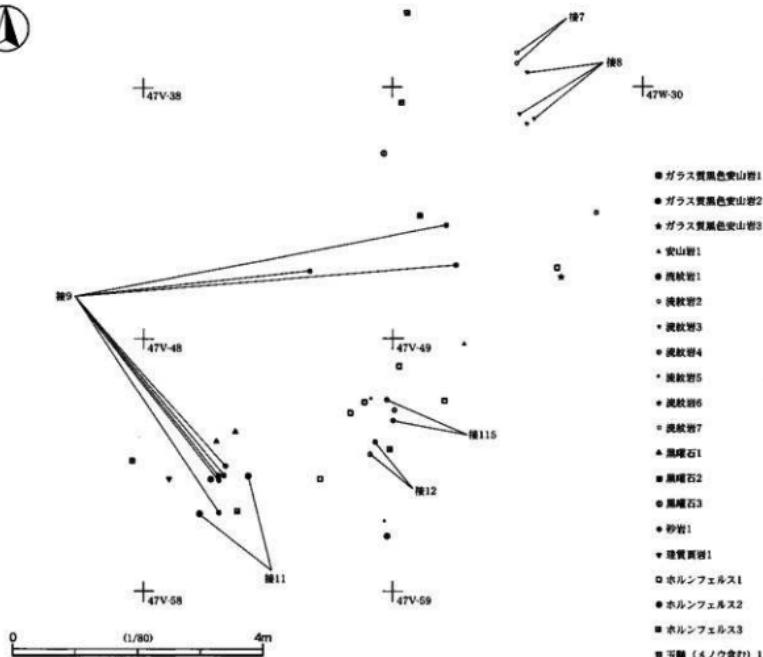
第21図 第3文化層第6ブロック検出状況



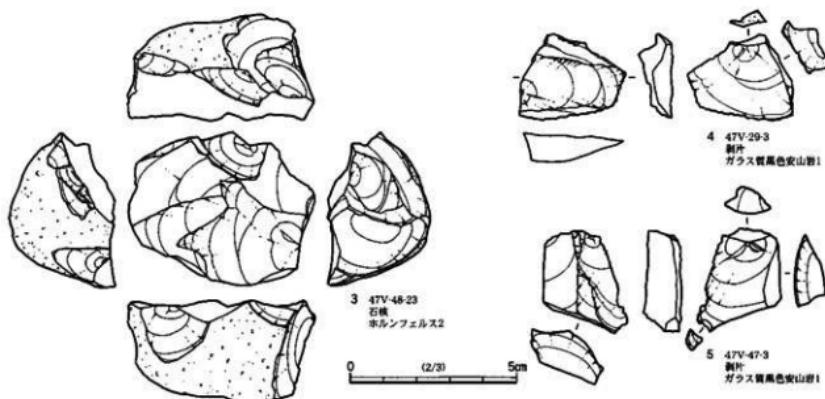
第22図 第3文化層第6ブロック器種別分布



第23図 第3文化層第6ブロック出土器（1）



第24図 第3文化層第6ブロック母岩別分布



第25図 第3文化層第6ブロック出土石器(2)

出土石器

二次加工のある剥片（1） 褐色がかった灰色の玉髓（メノウ含む）1を母岩とする。下縁辺の二次加工は折れ面に切られる。

石核（2・3） 2は灰白と濃灰部分が混在するホルンフェルス1を母岩とする。同一母岩は6点あるが、この石核以外は剥片・碎片である。交互剥離による求心的な剥離痕が看取される。3は頁岩から変成した、自然面・剥離面とも淡灰色を示すホルンフェルス2である。素材疊の一端を剥離して打面を作出したあと分割し、稜を挟んで交互剥離による剥片作出を行っているが、剥片の出土はない。

剥片（4・5） 4は自然面打面から剥離され、広い縁辺を持つ。5は調整された打面から剥離された複数の剥片のうちの1点である。ともにガラス質黑色安山岩1を母岩とする。

第6表 第3文化層第6ブロック組成表

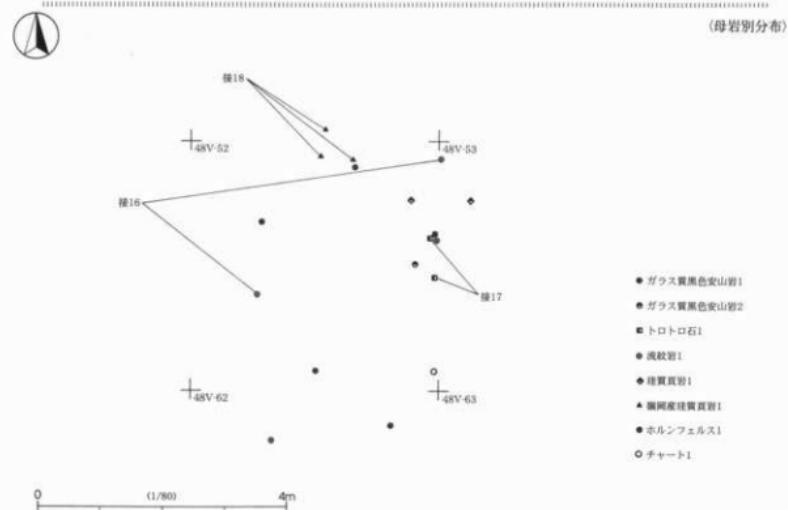
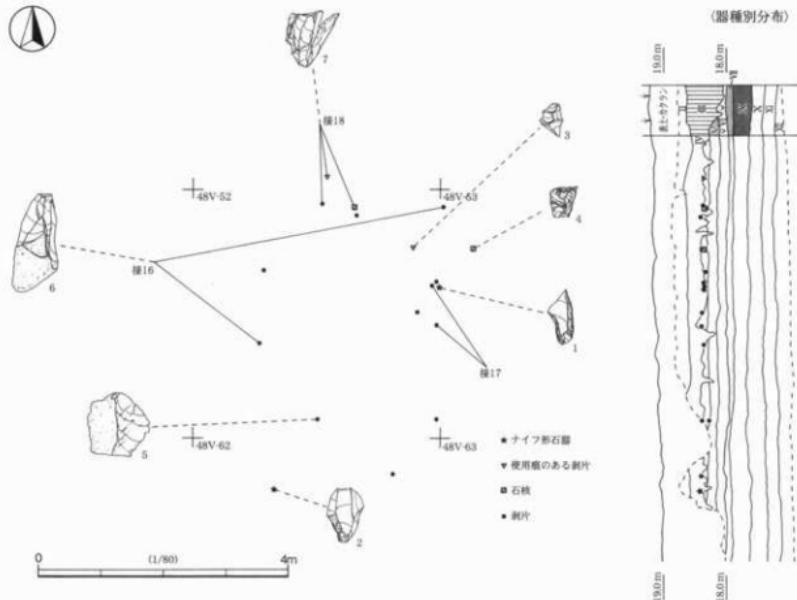
母岩名 / 器種	二次加工のある剥片	石核	剥片	碎片	繊片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黑色安山岩1	0	0	3	0	0	3	6.9%	27.62	1.85%
ガラス質黑色安山岩2	0	0	12(12)	0	0	12(2)	2.3%	9.52	0.64%
ガラス質黑色安山岩3	0	1	0	0	0	1	2.3%	37.10	2.48%
安山岩1	0	0	0	0	1	1	2.3%	33.76	2.26%
流紋岩1	0	0	1	0	0	1	2.3%	3.57	0.24%
流紋岩2	0	0	0	0	2	2	4.6%	176.46	11.82%
流紋岩3	0	0	0	0	3	3	6.9%	125.26	8.30%
流紋岩4	0	0	0	0	5	5	11.6%	185.87	12.45%
流紋岩5	0	0	0	0	2	2	4.6%	57.02	3.82%
流紋岩6	0	0	0	0	1	1	2.3%	108.82	7.29%
流紋岩7	0	0	0	0	1	1	2.3%	80.54	5.39%
黒曜石1	0	0	2	0	0	2	4.6%	3.87	0.26%
黒曜石2	0	0	1	0	0	1	2.3%	3.19	0.21%
黒曜石3	0	0	0	1	0	1	2.3%	0.14	0.01%
砂岩1	0	0	0	0	8	8	18.6%	484.31	32.44%
珪質頁岩1	0	0	0	1	0	1	2.3%	1.00	0.07%
ホルンフェルス1	0	1	3	2	0	6	13.9%	58.31	3.91%
ホルンフェルス2	0	1	0	0	0	1	2.3%	86.58	5.80%
ホルンフェルス3	0	0	1	0	0	1	2.3%	9.10	0.61%
玉髓(メノウ含む)1	1	0	0	0	0	1	2.3%	1.00	0.07%
合計	1	3	12(13)	4	23	43(44)	100.0%	1493.04	100.0%

※()は出土点数

第7ブロック (第26・27図、第7表、図版2・7)

遺物分布状況

遺物は48V-52グリッドを中心に出土し、南北に5.2m、東西に3m～3.5m程の円形に分布する。遺跡(2)の中央東寄りに位置し、西から東に向かいゆるく傾斜する。第26図に掲載した南北セクションの表土は北高南低の様相を呈し、埋土・擾乱埋土を含みII層との境は曖昧であるがIV層以下はほぼ水平に推移する。石器は表土擾乱の影響を受けず、III層下部からIV層に包含される。出土石器18点の出土レベルは18.282m～18.438mで、高低差は0.156mである。



第26図 第3文化層第7ブロック遺物分布

ナイフ形石器、使用痕のある剥片、石核は各々 2 点ずつ、剥片は 12 点を数えるが、礫・礫片は出土していない。

ガラス質黒色安山岩のみ 1 と 2 に母岩分けされたが、他石材は 1 石材 1 母岩である。流紋岩の 4 点のうち、接合する剥片 2 点間は約 4 m、ナイフ形石器 2 点間は約 3 m 離れる。嶺岡産珪質頁岩の使用痕のある剥片、剥片、石核の 3 点は北側にまとまって分布し、接合する。

出土石器

ナイフ形石器（1・2） 薄褐色と淡緑色が層状になった石基に直径 0.7 mm ほどの石英粒が入る流紋岩 1 が母岩である。1 の刃部角は 35° で、いわゆる切出形ナイフ形石器にあたる。両側縁をプランディングし、素材剥片の末端縁辺が刃部となる。対称軸と刃部によって作り出される傾きは 42° であり、器長に対する刃部の長さは 1/2 である。2 は剥片縁辺を刃部とし、素材の打面から中央、右側縁に向けた加擊痕によって基部が作出されている。

使用痕のある剥片（3） 自然面は淡黄白色、剥離面は淡褐色の珪質頁岩 1 を母岩とする。打面は小口の自然面であり、末端は底面をつけたまま収束する。使用痕は主要剥離面と底面によって作られた稜線上に認められる。

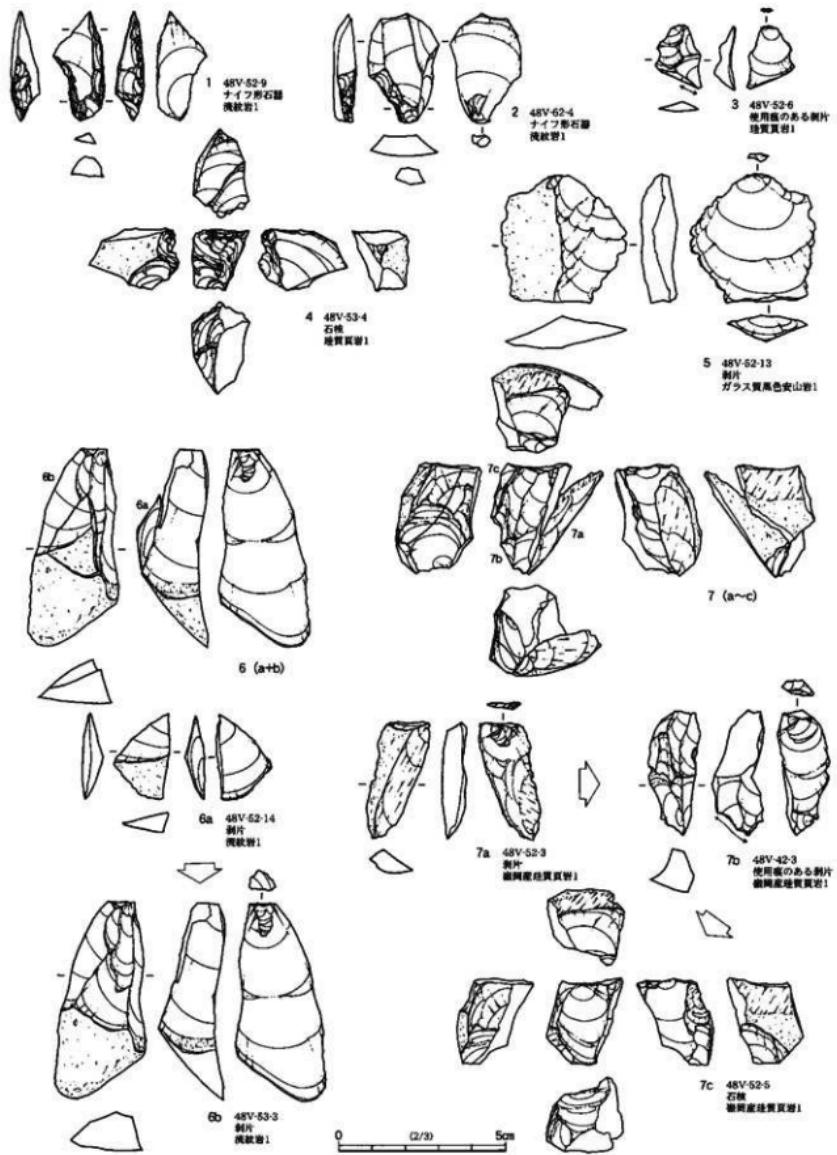
石核（4） 3 と同様に、珪質頁岩 1 を母岩とする。上面の剥離面を打面にして加擊された剥離面が最終的な作業面となっているが、ここに至るまでは右側面を打面にした剥離作業が行われている。

剥片（5） 自然面は黄色がかった暗褐色、剥離面は自然面よりもわずかに暗いガラス質黒色安山岩 1 である。小さくしつらえた打面から連続して剥離された剥片の 1 片である。

接合資料（6・7） 6 は剥片 2 点の接合資料であり、1・2 と同様、流紋岩 1 を母岩とする。まず左上部、次いで 6a を含む剥片剥離、その後に右側面と、縱軸に回転させ剥離作業を行ったあと、打面を再生させている。この打面からは頭部調整が行われた後に 6b が剥離されている。7 は剥片 2 点と石核が接合した。自然面は褐色、剥離面は縁がかった暗褐色で、珪化度の高い嶺岡産珪質頁岩 1 である。左側面左上部が最も古い剥離面である。打面再生と剥片剥離作業が繰り返される。7a、7b、7c における剥離工程では 7a を剥離したあとに上下を逆にして打面を作出し、石核右面、正面の順に作業面となり、7b が剥離される。7b の末端の連続した微細剥離痕は、石核時の調整痕・使用痕である可能性もある。

第 7 表 第 3 文化層第 7 ブロック組成表

母岩名 / 種類	ナイフ形石器	使用痕のある剥片	石核	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩 1	0	0	0	4	4	22.22%	59.94	35.17%
ガラス質黒色安山岩 2	0	0	0	1	1	5.56%	10.62	6.23%
トロトロ石 1	0	0	0	2	2	11.11%	26.33	15.45%
流紋岩 1	2	0	0	2	4	22.22%	30.15	17.69%
珪質頁岩 1	0	1	1	0	2	11.11%	7.70	4.52%
嶺岡産珪質頁岩 1	0	1	1	1	3	16.67%	20.05	11.70%
ホルンフェルス 1	0	0	0	1	1	5.56%	10.27	6.03%
チャート 1	0	0	0	1	1	5.56%	5.37	3.15%
合計	2	2	2	12	18	100.00%	170.43	100.00%



第27図 第3文化層第7ブロック出土石器

第5節 第4文化層

第4文化層総観（第28～61図、第8～14表、図版2・3、7～20）

第4文化層第8ブロックからは溜井台遺跡における旧石器時代の石器出土総数968点の約80%強にあたる776点が出土し、AからFまでの大小6か所の集中域を包蔵する。

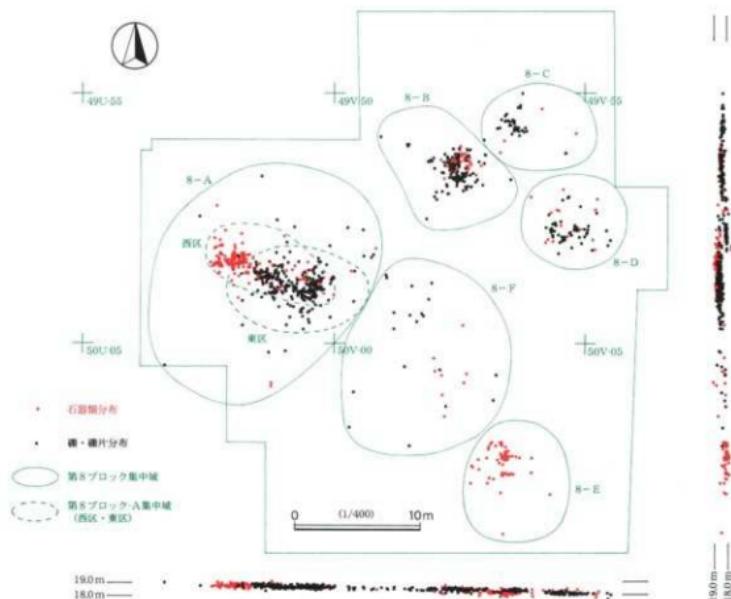
調査時の所見では、各々の集中域から出土した石器の層位は立川ロームのII層からV層と幅があったが、母岩分類や接合作業を行った結果、IV層下部に生活面を有する同一のブロック群であることが確認された。

第28図には石器類と礫・礫片の出土状況を2色で示した。

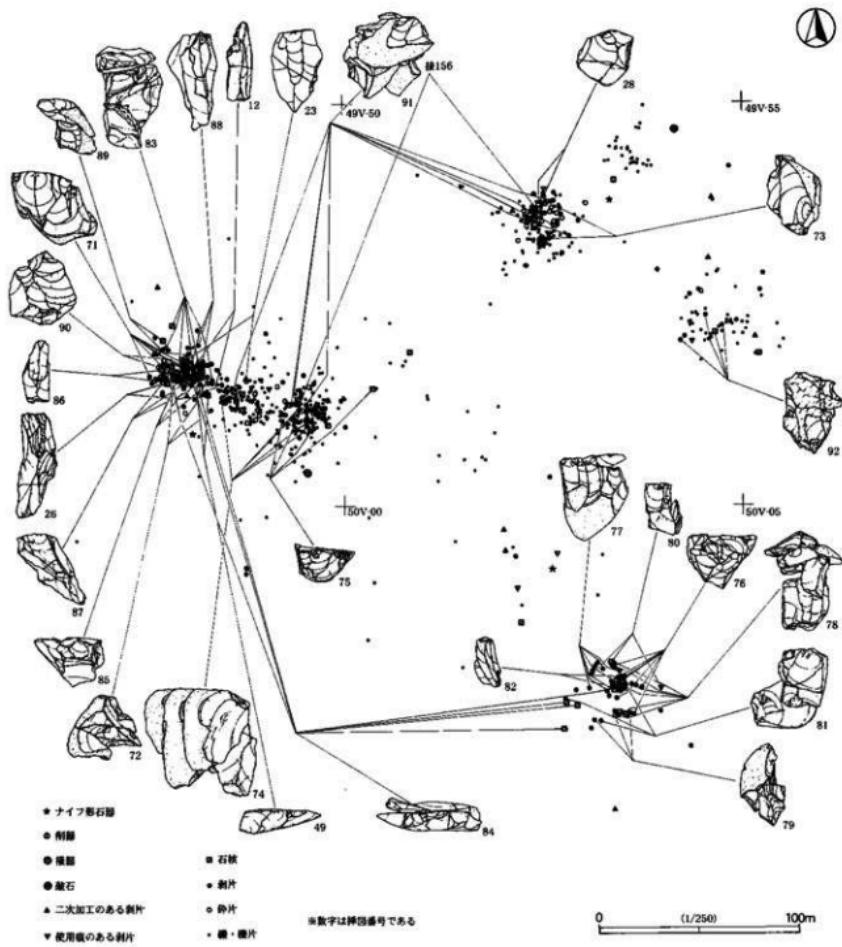
平面の分布状況はそれぞれの集中域によって特徴的な傾向を確認できたが、垂直分布図は石器類と礫・礫片はあざなえる繩のごとくほぼ直線状となって同一層上に分布する。

また第29図・第30図の接合状況図からは剥片類、礫・礫片とともに第8ブロックA集中域（8-Aと略す。以下同様）～8-Fの集中域間で接合関係がみられ、特に8-Aと8-B、8-Aと8-Eにおいては同じ母岩から作出された石片の接合が確認された。なお、このブロックの北東に位置する8-Cと8-Dは礫・礫片が大半を占める集中域であり、この2つの集中域においては砂岩礫片の接合関係が確認された。

第30図の礫・礫片接合状況図は、第29図の石器接合状況図から礫・礫片だけを抽出して、石材で素材区別し、接合線を加えたものである。



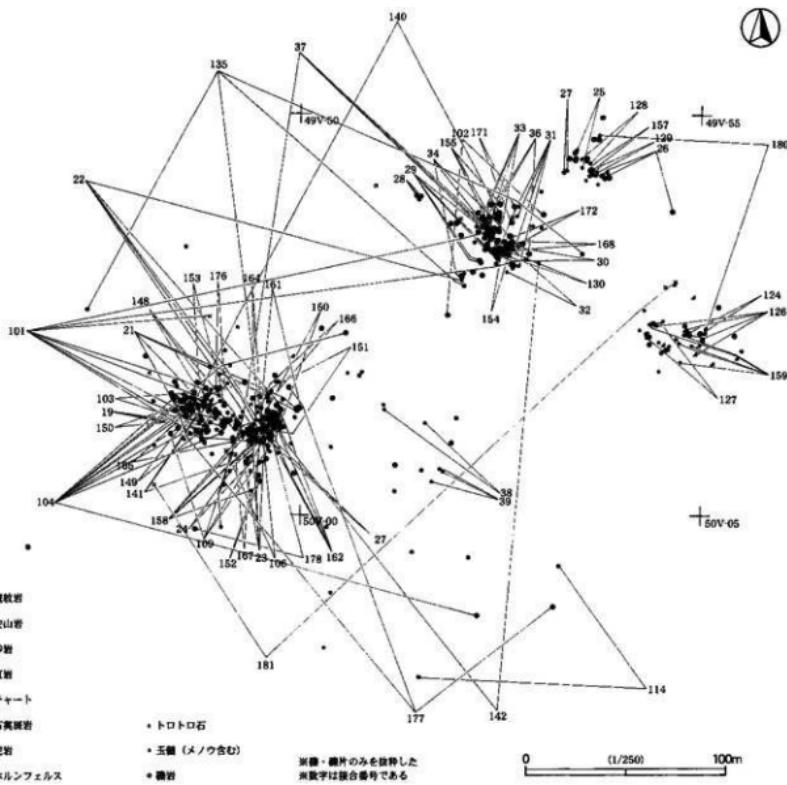
第28図 第4文化層第8ブロック石器分布



第29図 第4文化層第8ブロック出土石器接合状況

第4文化層第8ブロックの礫・礫片に関しては、母岩ごとに仕分けし、接合関係を探ったが、そのほとんどが被熱して弾けた破碎礫であること、および狩猟具・加工具といった利器ではないことから、母岩単位での記載は行わず、石材での図示にとどめた。

石器の接合線は主に母岩別分布図中に記入し、接合單体図は器種別分布図中に図示した。図の煩雑さを避けるために器種別分布図から接合線・接合状況図を省いた地点（8-A、8-B、8-D、8-E）も



第30図 第4文化層第8ブロック縫・縫片接合状況

あり、図の不統一感は否めない。

遺物は49U・49V・50U・50Vグリッドにかけて出土し、南北16.6m～35.5m、東西32.7mの大きな三角形の周縁上に分布する。遺跡(2)の南東に位置し、標高は18.0m～19.5m（標高差1.5m）で、南西から東に向かい傾斜する。出土点数は776点で、そのうち縫・縫片を除いた点数は326点である。出土レベルは17.636m～19.040mであり、高低差は1.404m、平均レベルは18.479mである。

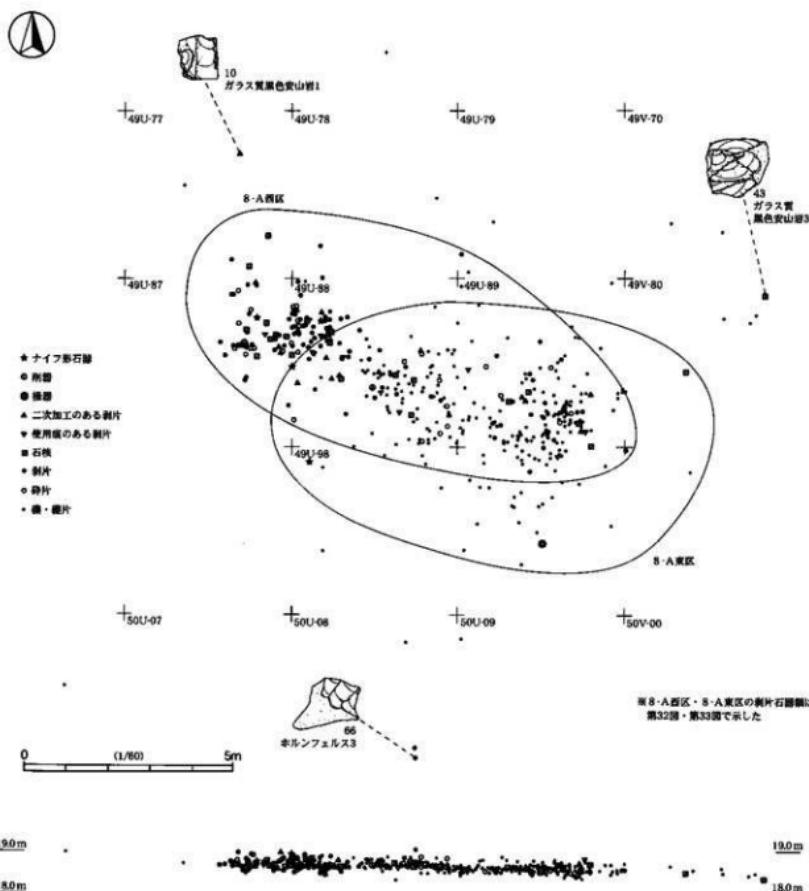
主要な器種としては、ナイフ形石器9点、削器・搔器・敲石各1点、石核38点出土し、縫・縫片（合わせて450点）が59%を占める。石器類・剥片類は同一レベルからの出土である。

以下、8-A～8-Fの6か所の集中域について分布状況を記し、第8ブロック全体の遺物実測図を器種別に掲載した。

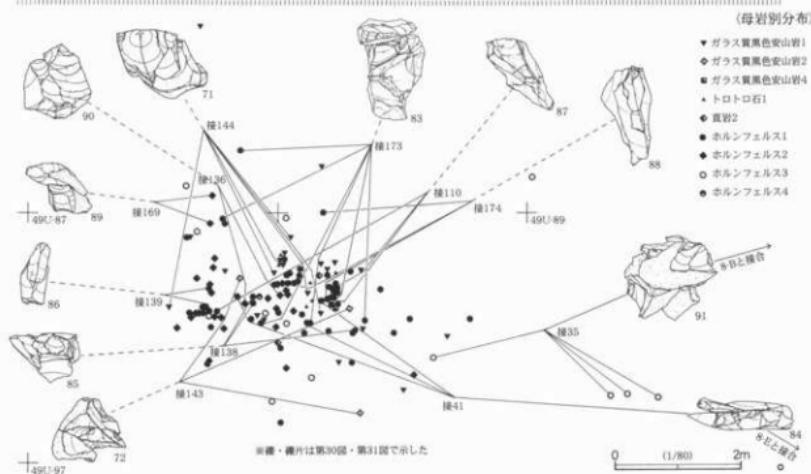
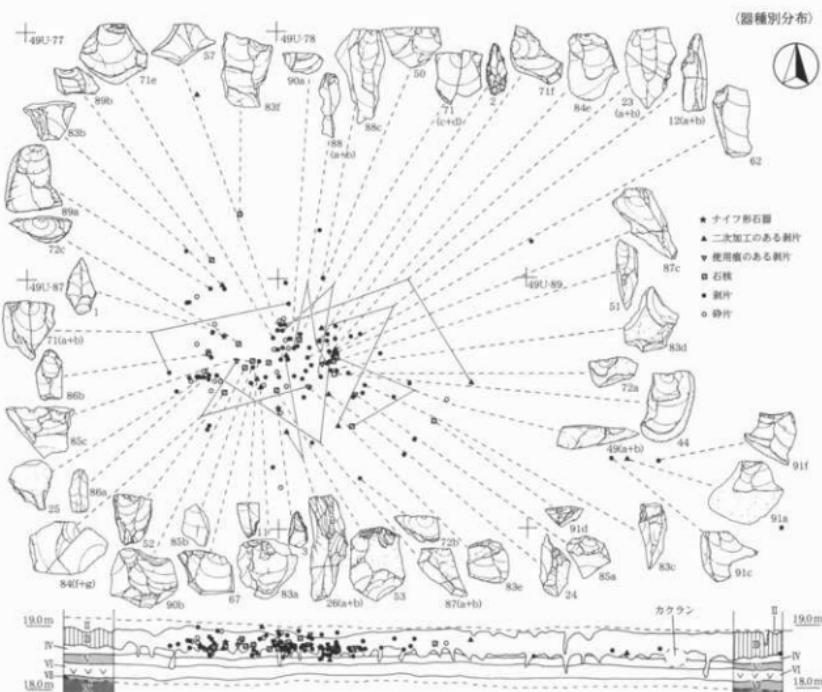
第8ブロック-A (第31~33図、第8・9表)

遺物は49U-87~89グリッドを中心に出土する。第8ブロック内においては、西側の比較的安定した高所に位置しているが、南西から北東に向かいゆるく傾斜する。出土点数436点のうち、礫・礫片を除いた191点の器種内訳はナイフ形石器4点、削器・搔器が各々1点ずつ、二次加工のある剥片19点、使用痕のある剥片10点、剥片・碎片133点、石核は23点である。石器の出土レベルは18.328m~19.040mで、高低差は0.712mである。

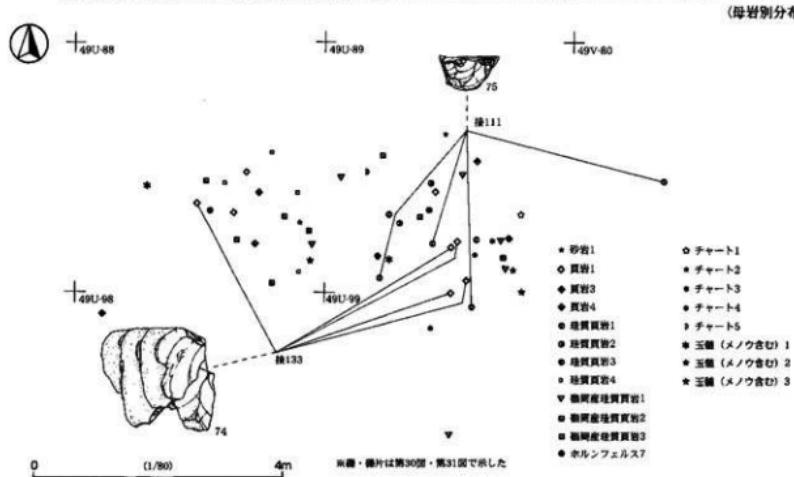
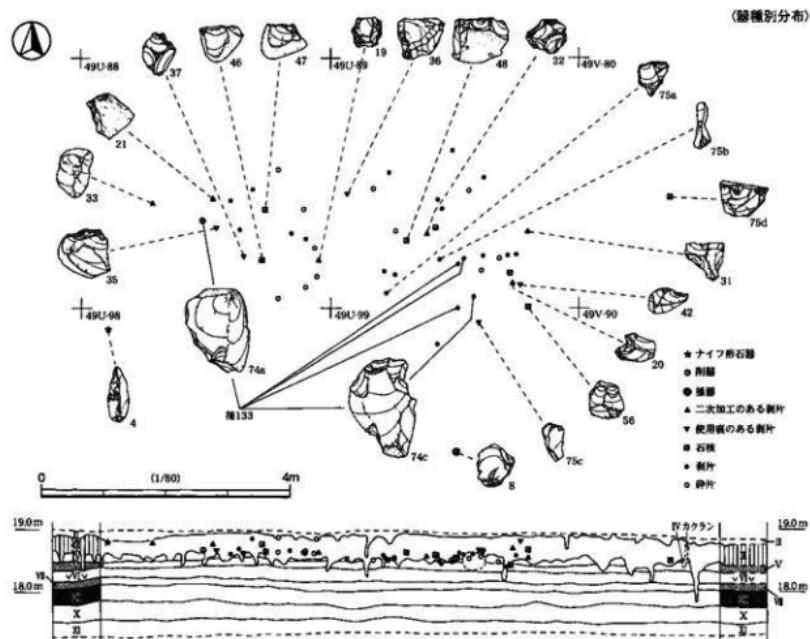
礫・礫片を除いた191点の石材別内訳はガラス質黒色安山岩28点、トロトロ石6点、砂岩1点、頁岩16



第31図 第4文化層第8ブロック-A遺物分布



第32図 第4文化層第8ブロック-A剥片石器類分布（西区集中域）



第33図 第4文化層第8ブロック—A剥片石器類分布（東区集中域）

第8表 第4文化層第8ブロック-A組成表(1)

地名 / 標識	チフ形率	無	無	二次加工の有る 無片	表面磨きの有 無片	石板	鉄片	骨	貝片	瓦	瓦板	瓦板比	瓦板%	瓦板比
ガラス質黑色安山岩1	1	0	0	31.0	0	0	1304	3	0	0	18222	4.48%	91.92	1.77%
ガラス質黑色安山岩2	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	4	0.98%	23.94	0.44%
ガラス質黑色安山岩3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.23%	41.61	0.82%
ガラス質黑色安山岩4	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.23%	27.25	0.53%
トロトロ石1	0	0	0	0	0	0	5	1	0	0	6	1.41%	16.94	0.31%
安山岩1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	34.76	0.67%
安山岩2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	13	3.08%	187.35	3.62%
安山岩3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.33%	31.35	0.61%
安山岩4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	38.84	0.75%
安山岩5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	41	41	9.82%	888.50	17.21%
安山岩6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	18.74	0.38%
安山岩7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.70%	87.86	1.31%
安山岩8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	71.92	1.39%
安山岩9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	1.64%	27.89	0.54%
安山岩10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	9	1.88%	144.56	2.79%
安山岩11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	50.35	0.97%
流紋岩1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	11	2.58%	87.87	1.31%
流紋岩2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	8	1.88%	62.87	1.22%
流紋岩3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.94%	125.27	2.42%
流紋岩4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	1.64%	65.43	0.89%
流紋岩5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	1.64%	65.43	0.89%
流紋岩6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.94%	18.14	0.39%
流紋岩7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.70%	47.28	0.91%
流紋岩8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.94%	67.92	1.39%
流紋岩9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.70%	32.85	0.64%
流紋岩10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.70%	36.14	0.58%
流紋岩11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	19.35	0.38%
流紋岩12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	35.29	0.68%
流紋岩13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.70%	36.46	0.71%
流紋岩14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	1.64%	18.33	0.38%
流紋岩15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	68.71	1.33%
流紋岩16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	45.47	0.88%
流紋岩17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	35.65	0.71%
流紋岩18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	46.29	0.89%
流紋岩19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	18.44	0.38%
流紋岩20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	21.93	0.42%
流紋岩21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	15.43	0.30%
流紋岩22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	15.17	0.29%
流紋岩23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	14.67	0.28%
石英安山岩1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	136.69	2.53%
石英安山岩2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	62.05	1.20%
石英安山岩3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	24.34	0.47%
砂岩1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.23%	36.53	0.71%
砂岩2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	54.21	1.06%
砂岩3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	32.65	0.64%
砂岩4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.70%	72.04	1.39%
砂岩5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	42.58	0.82%
砂岩6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	65.13	1.20%
砂岩7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	45.39	0.88%
砂岩8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	16.82	0.33%
砂岩9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.94%	85.55	1.77%
砂岩10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	59.79	1.08%
砂岩11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5	1.17%	62.18	1.01%
砂岩12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.94%	35.45	0.64%
砂岩13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	5.51	0.11%
砂岩14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	9	2.11%	196.91	2.11%
砂岩15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	12	2.82%	47.37	0.92%
砂岩16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.70%	6.25	0.12%
砂岩17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	9.18	0.18%
砂岩18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	2.89	0.06%
砂岩19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.94%	87.70	1.21%
砂岩20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	14.04	0.27%
砂岩21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0.00%	700	1.04%
砂岩22	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.47%	3.15	0.06%
砂岩23	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0.94%	14.63	0.28%

第9表 第4文化層第8ブロック-A組成表(2)

品名	番号	タイプ別剥片	剥片	礫	二次工事のため剥片	使用痕のある剥片	不規	角片	砂片	縞	礫片	点数	点数比	直角(c)	直角(d)	直角比	
瓦	4	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0.47%	47.65	0.92%	
瓦	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.21%	93.34	1.79%	
瓦	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.94%	74.43	1.44%	
瓦	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.94%	15.17	0.29%	
瓦	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	32.81	0.63%	
瓦	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	28.76	0.56%	
瓦	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	11.18	0.21%	
珪質瓦	1	0	0	0	0	0	1	1	3	1	0	0	0	0	1.41%	17.59	0.30%
珪質瓦	2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	3	0.47%	28.95	0.32%	
珪質瓦	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0.32%	5.44	0.11%	
珪質瓦	4	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	4	0.94%	1.67	0.02%	
嶺岡産珪質瓦	1	0	0	1	2	1	0	1	1	0	0	6	1	1.41%	15.84	0.33%	
嶺岡産珪質瓦	2	0	0	0	1	1	1	0	2	0	0	0	7	1.64%	28.93	0.49%	
嶺岡産珪質瓦	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	4.42	0.09%	
ホルンフェルス1	0	0	0	0	403	405	607	3002	8	0	0	62037	1	12.21%	373.13	7.27%	
ホルンフェルス2	0	0	0	0	303	0	6	15	7	0	0	27205	0	0.34%	203.81	3.94%	
ホルンフェルス3	0	0	0	1	0	1	11	2	0	0	15	2.12%	74.09	1.44%			
ホルンフェルス4	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0.23%	10.06	0.21%	
ホルンフェルス5	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0.23%	51.81	1.00%
ホルンフェルス6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.47%	23.81	0.56%	
チャート1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0.23%	4.43	0.09%
チャート2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0.23%	0.64	0.01%
チャート3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0.47%	0.47	0.01%	
チャート4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0.23%	0.05	0.00%
チャート5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0.23%	0.18	0.00%
チャート11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0.23%	59.95	1.74%
チャート12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0.23%	5.56	0.12%
チャート13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0.23%	11.38	0.22%
チャート14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.70%	129.28	2.50%	
チャート15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0.23%	0.18	0.00%
玉髓(メノウ含む)	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0.47%	10.97	0.21%	
玉髓(メノウ含む)2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0.23%	3.12	0.04%	
玉髓(メノウ含む)3	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	0	0.47%	10.08	0.21%	
玉髓(メノウ含む)4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.23%	0.59	0.12%	
合計	4	1	1	1	18519	9116	22220	94613	32	6	250	428450	100.00%	5160.59	100.00%		

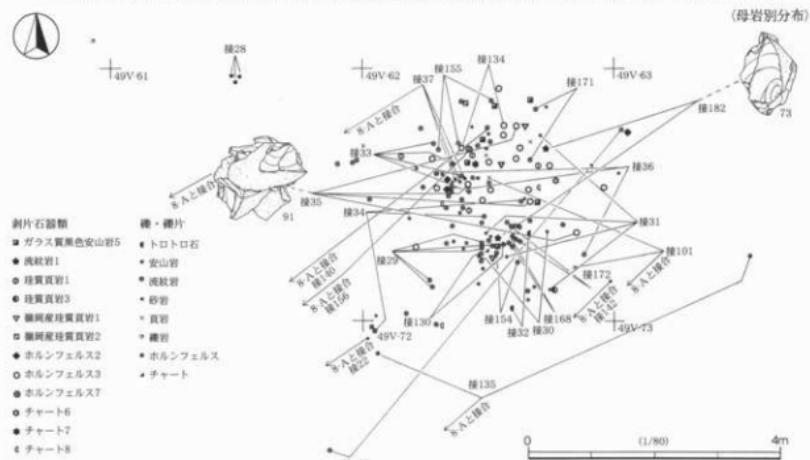
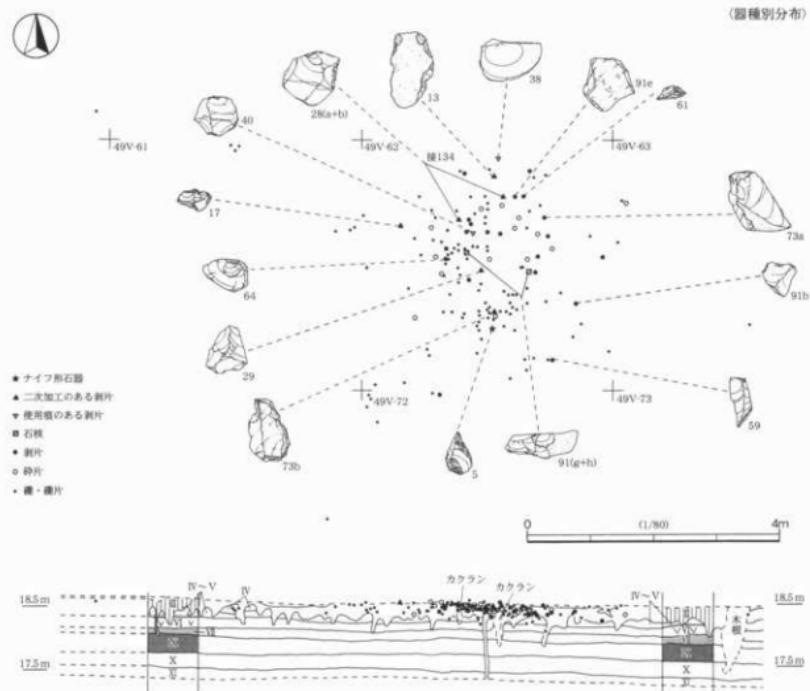
表(1)付土壤表

点、珪質岩13点、嶺岡産珪質岩14点、ホルンフェルス102点、チャート6点、玉髓(メノウ含む)5点である。

この8-Aを中心とした集中域間の接合関係を見していくと、礫・礫片を除く接合資料は18個体を数え、ホルンフェルス1と3においては、8-A内にとどまらず、他集中域にも接合関係が認められた。8-A、8-Eの2集中域から出土し、接合したホルンフェルス1の7点は2塊に分かれ、8-Aを目的的剥片作出の場、8-Eが素材剥片を加工した場ととらえられた一方、ホルンフェルス3には、8-A、8-B間で接合してはいるが、場としての特徴は認められなかった。礫・礫片類では8-B、8-D、8-Eとの間に接合関係が確認された。

また、第8ブロック全体を俯瞰したところ、西側の8-A集中域に石器類が密集しており、石材の消費傾向に明らかな特徴がみられたため、この8-Aをさらに東西に二分して図示することとした。

8-A西では、ガラス質黒色安山岩、ホルンフェルス、トロトロ石といった灰色～黒色で艶がない、内包物(夾雑物や節理)の少ない、比較的扱いやすい石材が用いられている。中でもガラス質黒色安山岩1は22点で91.52g、ホルンフェルス1は57点で373.13g(総点数63点、総重量427.88g)、ホルンフェルス2は28点、203.81g(総点数35点、総重量272.79g)であり、8-A西で消費された素材礫は大ぶりの



第34図 第4文化層第8ブロック—B遺物分布

第10表 第4文化層第8ブロック-B組成表

名前 / 種類	ナイフ形石器	二次加工のある 剝片	使用痕のある 剝片	石核	剥片	鉈片	器	標片	点数	点数比	重量(g)	重量比	
ダラス質黑色安山岩5	0	1	0	0	3	2	0	0	6	3.9%	18.45	0.80%	
トロトロ石3	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1.3%	14.08	0.51%	
安山岩1	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1.8%	206.47	9.00%	
安山岩2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	56.82	2.44%	
安山岩5	0	0	0	0	0	0	0	12	12	7.8%	196.83	8.40%	
安山岩10	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	6.39	0.30%	
浅紋岩1	0	1	0	0	1	0	0	0	2	1.3%	22.04	0.98%	
浅紋岩2	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1.3%	39.84	1.68%	
浅紋岩21	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	12.58	0.54%	
浅紋岩23	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	26.97	1.16%	
浅紋岩24	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.6%	52.95	2.29%
浅紋岩25	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	70.07	3.03%	
浅紋岩26	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.6%	40.82	1.76%
浅紋岩28	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1.8%	111.35	4.80%	
浅紋岩29	0	0	0	0	0	0	0	4	4	2.6%	183.58	7.92%	
浅紋岩30	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1.3%	30.49	1.32%	
浅紋岩31	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1.8%	44.48	1.90%	
浅紋岩32	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1.8%	14.25	0.62%	
浅紋岩33	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	27.13	1.17%	
浅紋岩34	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	29.34	1.26%	
浅紋岩35	0	0	0	0	0	0	0	4	4	2.6%	58.84	2.42%	
浅紋岩36	0	0	0	0	0	0	0	5	5	3.2%	29.18	1.20%	
浅紋岩37	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1.8%	13.18	0.57%	
浅紋岩38	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	28.95	1.25%	
浅紋岩39	0	0	0	0	0	0	0	6	6	3.2%	26.40	1.14%	
浅紋岩40	0	0	0	0	0	0	0	14	14	9.1%	35.85	1.56%	
浅紋岩42	0	0	0	0	0	0	0	5	5	3.2%	77.44	3.34%	
砂岩1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	4.11	0.18%	
砂岩5	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	26.38	1.16%	
砂岩9	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	41.98	1.81%	
砂岩15	0	0	0	0	0	0	0	4	4	2.6%	148.42	6.41%	
砂岩19	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1.3%	57.56	2.49%	
砂岩20	0	0	0	0	0	0	0	4	4	2.6%	23.54	1.02%	
砂岩21	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1.8%	56.68	2.46%	
砂岩22	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	14.03	0.61%	
砂岩23	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	15.40	0.66%	
質岩6	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1.3%	33.00	1.42%	
質岩12	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1.8%	50.56	2.15%	
理質質岩1	0	1	0	0	2	1	0	0	4	2.6%	2.76	0.12%	
理質質岩3	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.6%	1.69	0.08%	
櫛洞理質質岩1	1	0	0	0	3	0	0	0	3	1.8%	2.06	0.09%	
櫛洞理質質岩2	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.6%	1.86	0.08%	
ホルンフェルス2	0	0	0	0	2	1	0	0	3	1.8%	5.39	0.23%	
ホルンフェルス3	0	203	1	103	5	8	0	0	170(10)	11.1%	67.63	2.92%	
ホルンフェルス7	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.6%	2.19	0.09%	
ホルンフェルス9	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1.3%	63.70	2.76%	
ホルンフェルス10	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1.8%	193.20	8.34%	
チャート6	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.6%	4.84	0.21%	
チャート7	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.6%	2.22	0.09%	
チャート8	0	0	0	0	2	1	0	0	3	1.8%	22.92	0.99%	
チャート16	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6%	2.94	0.13%	
合計	1	560	2	103	20	14	3	107	153(155)	100.0%	3315.93	100.0%	

※()は出土点数

ティーカップほどの大きさであったと推量できる。

8—A 東から出土した石材の特徴としては、珪化度が高く硬質で緻密な石材が多用されていることが挙げられる。特に珪質頁岩・嶺岡産珪質頁岩・玉髓（メノウ含む）は1母岩の重量が30g以下であり、多様な形状に加工された小型の資料が出土する傾向が認められた。また8—A西とは対照的に、礫・礫片以外の接合資料は2個体のみであった。

第8ブロック—B（第34図、第10表）

遺物は49V-62グリッドを中心に出土する。第8ブロック内では北東に位置し、標高は18.5m～18.75mで西から東に向かいゆるく傾斜する。出土点数は155点、うち礫・礫片を除いたもの43(45)点を器種別でみると、ナイフ形石器1点、二次加工のある剥片5(6)点、使用痕のある剥片2点、石核1(2)点、剥片・碎片34点で、石核に比して剥片類の出土が圧倒的に多い。

礫・礫片を除いた45点の石材内訳はガラス質黒色安山岩6点、流紋岩2点、珪質頁岩5点、嶺岡産珪質頁岩4点、ホルンフェルス23点、チャート5点であり、接合関係は半径1.8m内ののみに限られる。8—B出土の剥片石器類が接合する集中域は8—Aのみであり、ホルンフェルス3・7が該当する。

第8ブロック—C（第35図、第11表）

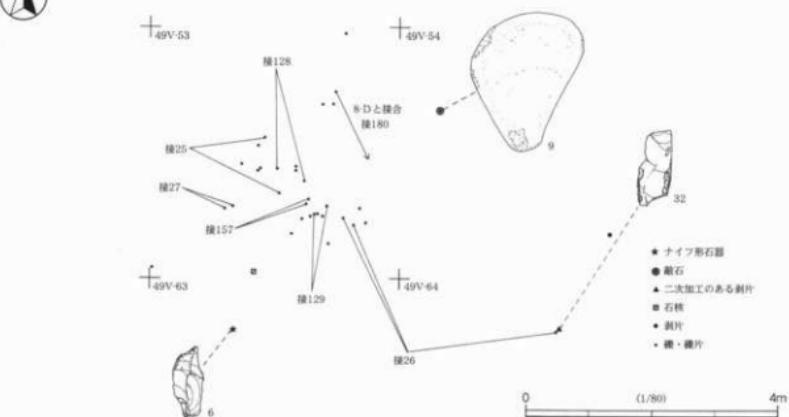
遺物は49V-53グリッドを中心とした直径6mほどの範囲内に分布する。第8ブロック内では北東に位置し、標高は18.5m～18.75mで、西から東に向かいゆるく傾斜する。

出土遺物は37点で、礫・礫片を除いた5点の器種内訳は、ナイフ形石器（嶺岡産珪質頁岩1）・敲石（砂岩2）・二次加工のある剥片（チャート9）・石核（黒曜石1）・剥片（チャート5）がそれぞれ1点ずつ出土しており、礫・礫片のまとまり32点の外側に点在する。

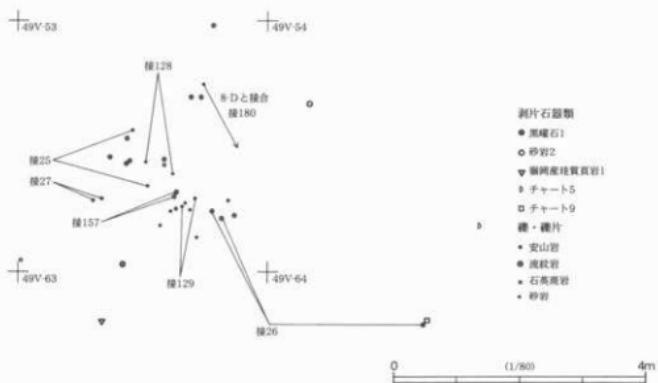
第11表 第4文化層第8ブロック—C組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石器	鐵石	二次加工のある剥片	石核	剥片	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
安山岩 12	0	0	0	0	0	0	2	2	5.4%	195.38	4.4%
安山岩 13	0	0	0	0	0	0	2	2	5.4%	580.52	13.3%
流紋岩 2	0	0	0	0	0	0	4	4	10.8%	104.92	2.4%
流紋岩 6	0	0	0	0	0	0	1	1	2.7%	140.30	3.2%
流紋岩 7	0	0	0	0	0	0	3	3	8.1%	176.13	4.0%
流紋岩 21	0	0	0	0	0	0	2	2	5.4%	16.21	0.37%
流紋岩 27	0	0	0	0	0	0	1	1	2.7%	31.48	0.72%
流紋岩 41	0	0	0	0	0	0	2	2	5.4%	92.42	2.1%
流紋岩 42	0	0	0	0	0	0	1	1	2.7%	20.52	0.4%
石英斑岩 4	0	0	0	0	0	0	0	1	2.7%	2286.50	52.5%
石英斑岩 5	0	0	0	0	0	0	1	1	2.7%	90.06	2.07%
黑曜石 1	0	0	0	1	0	0	0	1	2.7%	6.44	0.1%
砂岩 2	0	1	0	0	0	0	0	1	2.7%	236.72	5.4%
砂岩 19	0	0	0	0	0	0	1	1	2.7%	113.90	2.6%
砂岩 24	0	0	0	0	0	0	7	7	18.9%	77.88	1.7%
砂岩 25	0	0	0	0	0	0	2	2	5.4%	65.36	1.5%
砂岩 26	0	0	0	0	0	0	2	2	5.4%	79.50	1.8%
嶺岡産珪質頁岩1	1	0	0	0	0	0	0	1	2.7%	4.40	0.1%
チャート5	0	0	0	0	1	0	0	1	2.7%	25.24	0.5%
チャート9	0	0	1	0	0	0	0	1	2.7%	7.51	0.17%
合計	1	1	1	1	1	1	31	37	100.0%	4351.39	100.0%

(器種別分布)



(母岩別分布)



第35図 第4文化層第8ブロック-C遺物分布

第8ブロック—D (第36図、第12表)

遺物は49V-74グリッドを中心とし北西～南東に7.2m、北東～南西に5.5mほどの橢円形状に分布する。第8ブロック内では東に位置し、標高は18.0m～18.5mで、西から東に向かい緩やかに下向する。

出土点数は59点で、礫・礫片を除いた16点の内訳は、二次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片1点、石核2点、剥片・碎片10(11)点である。

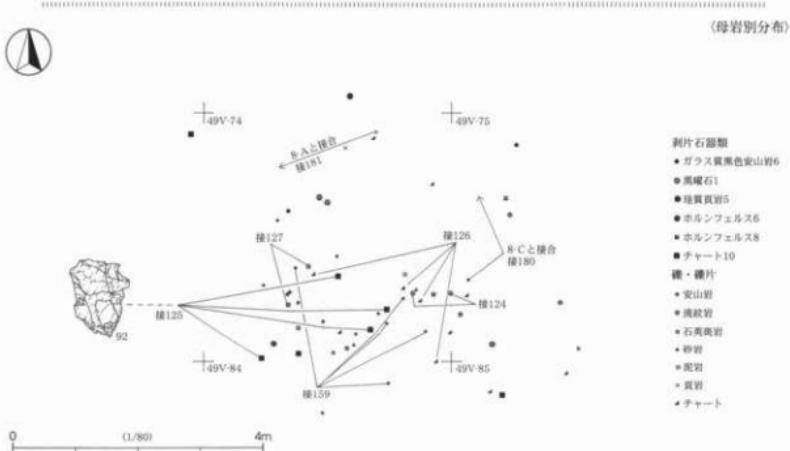
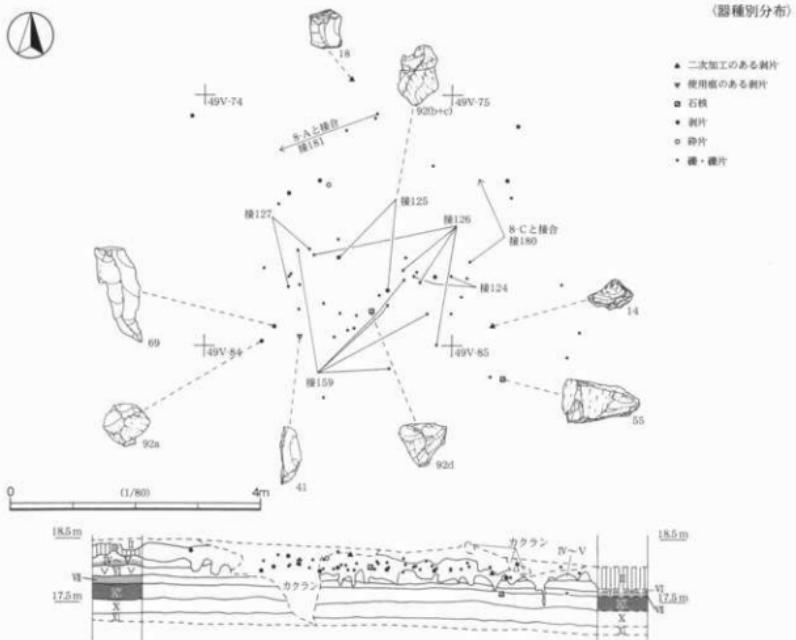
礫・礫片の石材内訳は安山岩2点、流紋岩9点、石英斑岩2点、砂岩16点、泥岩1点、頁岩2点、チャート11点であり、8-A、8-Cに接合関係を持つ。

剥片・石器類16点の母岩内訳、および分布状況であるが、ガラス質黒色安山岩6の2剥片はやや北側に東西4m離れて出土し、チャート10(使用痕のある剥片1点、剥片3(4)点、石核2点)は6(7)点が検出され、4点が接合する。珪質頁岩5(二次加工のある剥片1点)は北側に、ホルンフェルス6(剥片1点)は南西に、ホルンフェルス8(剥片2点)は東側に分布する。なお、集中域間で共有する母岩は黒曜石1のみであり、8-Cに1点(石核)、8-Dに3点(二次加工のある剥片・剥片・碎片)が出土している。

第12表 第4文化層第8ブロック—D組成表

母岩名 / 種類	二次加工のある 剥片	使用痕のある 剥片	石核	剥片	碎片	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩6	0	0	0	2	0	0	0	2	3.45%	6.75	0.16%
安山岩14	0	0	0	0	0	1	0	1	1.72%	115.39	2.71%
安山岩15	0	0	0	0	0	1	0	1	1.72%	79.46	1.86%
流紋岩27	0	0	0	0	0	0	1	1	1.72%	15.75	0.37%
流紋岩43	0	0	0	0	0	1	0	1	1.72%	106.98	2.49%
流紋岩44	0	0	0	0	0	1	0	1	1.72%	81.83	1.92%
流紋岩45	0	0	0	0	0	0	1	1	1.72%	16.24	0.38%
流紋岩46	0	0	0	0	0	0	2	2	3.45%	147.05	3.49%
流紋岩47	0	0	0	0	0	0	2	2	3.45%	68.43	1.61%
流紋岩48	0	0	0	0	0	1	0	1	1.72%	1564.30	36.71%
石英斑岩6	0	0	0	0	0	0	1	1	1.72%	205.35	4.82%
石英斑岩7	0	0	0	0	0	0	1	1	1.72%	231.77	5.44%
黒曜石1	1	0	0	1	1	0	0	3	5.17%	3.48	0.08%
砂岩17	0	0	0	0	0	0	5	5	8.62%	102.01	2.39%
砂岩19	0	0	0	0	0	0	1	1	1.72%	41.65	0.98%
砂岩26	0	0	0	0	0	0	5	5	8.62%	34.18	0.80%
砂岩27	0	0	0	0	0	1	0	1	1.72%	81.39	1.91%
砂岩28	0	0	0	0	0	0	1	1	1.72%	786.70	18.46%
砂岩29	0	0	0	0	0	1	0	1	1.72%	62.44	1.47%
砂岩30	0	0	0	0	0	0	1	1	1.72%	6.71	0.16%
砂岩31	0	0	0	0	0	0	1	1	1.72%	101.01	2.37%
泥岩3	0	0	0	0	0	0	1	1	1.72%	98.96	2.32%
頁岩7	0	0	0	0	0	0	2	2	3.45%	19.08	0.45%
珪質頁岩5	1	0	0	0	0	0	0	1	1.72%	2.87	0.07%
ホルンフェルス6	0	0	0	1	0	0	0	1	1.72%	12.82	0.30%
ホルンフェルス8	0	0	0	2	0	0	0	2	3.45%	9.27	0.22%
チャート10	0	1	2	3(4)	0	0	0	6(7)	10.34%	94.09	2.21%
チャート15	0	0	0	0	0	0	4	4	6.90%	53.77	1.28%
チャート16	0	0	0	0	0	0	7	7	12.07%	112.71	2.64%
合計	2	1	2	9(10)	1	7	36	58(59)	100.00%	4261.54	100.00%

※()は出土点数



第36図 第4文化層第8ブロック—D遺物分布

第8ブロック-E (第37図、第13表)

遺物は50V-23グリッドを中心に出土する。第8ブロック内では南東に位置し、標高は18.5m~19m、西から東に向かい下降する傾斜地であるが、比較的狭い範囲に遺物が集中する。遺物の垂直分布は17.770m~18.486mの間に、高低差0.716mを持って包藏される。

西側の一部ではわずかにIV層が確認されるが、大部分がIII層に取り込まれるためIII層~V層の層分けは困難である。

8-Eにおいては出土点数の2/3以上、70%弱を実測した。出土点数61点のうち接合関係が認められた34点に主要な器種8点を加え、42点を図化したものである。第37図の上段には単体図、下段の母岩別分布図には接合状況図を配置した。

器種別では石核7(9)点、ナイフ形石器が2点あるほか、ほとんどが剥片類(二次加工のある剥片3点、使用痕のある剥片2点、剥片・碎片45点)で、礫・礫片は出土しない。接合した個体の多くは石核を有し、複数枚の石片が規則的に剥離されたことを示している。

石材は灰色~黒色のガラス質黒色安山岩・トロトロ石・ホルンフェルスと、明黄色(10YR6/8~7/8)で滑らかな光沢を持つ珪質頁岩である。

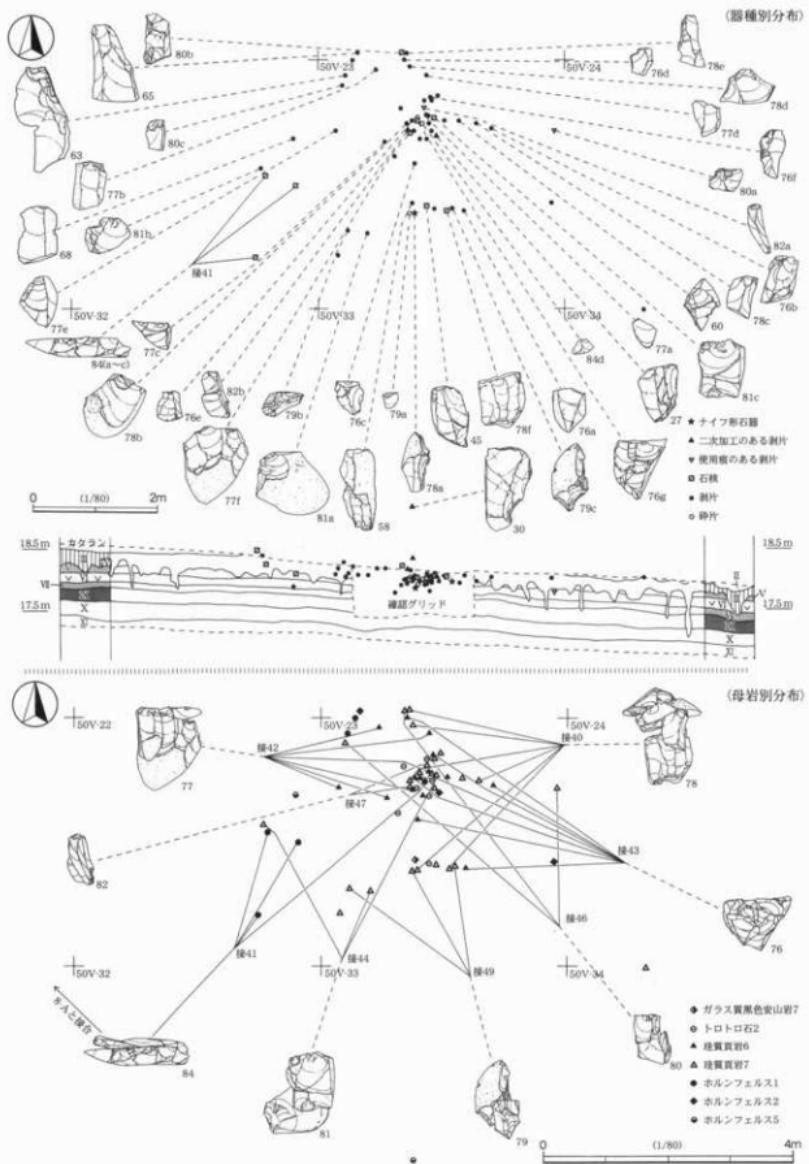
この第4文化層第8ブロックにおける珪質頁岩は7母岩全60点であり、68%にあたる41点が8-Eに分布する珪質頁岩6・7で占められる。珪質頁岩6は13点が2個体(第51・52図 76・77)、珪質頁岩7は17点が5個体(第53・54図 78~82)に接合し、78、79はナイフ形石器を包藏する。79cのナイフ形石器には使用痕が看取され、石器製作と使用の場が同一であったことを示す資料である。両珪質頁岩とも8-E集中域にのみ分布する。

これに対し、ホルンフェルスは客体的である。接合したホルンフェルス1・2(第55~59図 83~90)の主分布域は8-Aであり、石核を有する個体が大半を占めている。84は7点の接合資料であるがもとは3点の剥片であり、2点は8-Aに、1点は8-Eへと分けられている。8-Eに持ち込まれた剥片(84a~84d)は素材石核となり、小型の剥片が生産される。8-E集中域と8-A集中域間では最長28m離れて接合する。

第13表 第4文化層第8ブロック-E組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石器	二次加工のある 剥片	使用痕のある 剥片	石核	剥片	砂片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩7	0	0	0	0	1	0	1	1.6%	13.09	3.38%
トロトロ石2	0	0	0	1	7	0	8	13.56%	19.42	5.01%
珪質頁岩6	0	0	0	2	13	0	15	25.42%	112.35	28.99%
珪質頁岩7	2	1	2	3	16	2	26	44.07%	143.49	37.02%
ホルンフェルス1	0	0	0	103	2	1	4(6)	6.78%	54.75	14.13%
ホルンフェルス2	0	1	0	0	2	0	3	5.08%	23.80	6.14%
ホルンフェルス5	0	1	0	0	1	0	2	3.39%	20.69	5.34%
合計	2	3	2	709	42	3	59(61)	100.00%	387.59	100.00%

※()は出土点数



第37図 第4文化層第8ブロック-E遺物分布

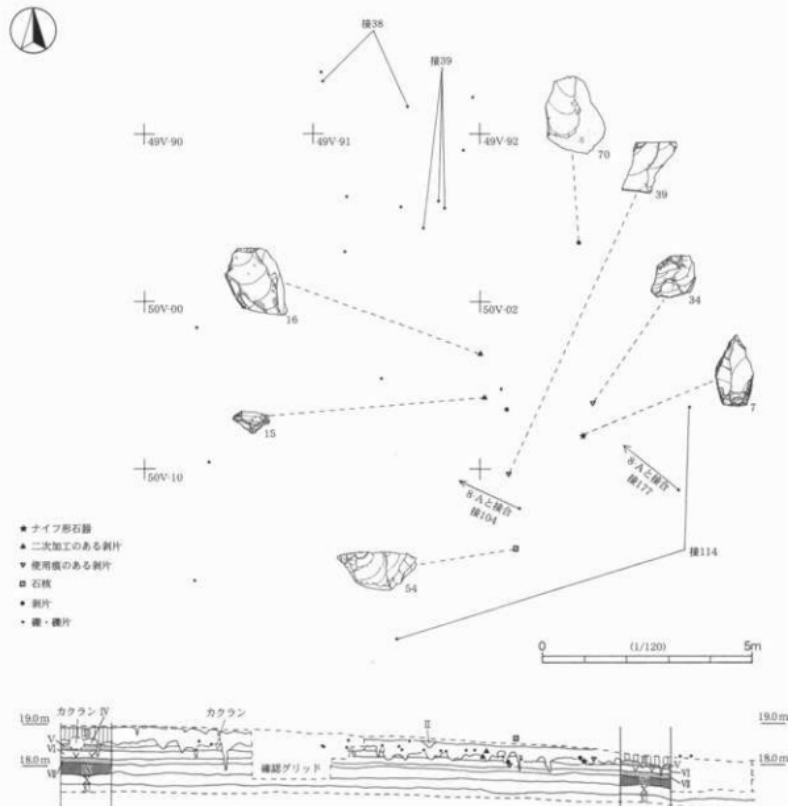
第8ブロック—F（第38・39図、第14表）

遺物は49V-91、50V-02グリッドを中心として散漫に分布する。第8ブロック内ではほぼ中央に位置し、標高は18.5m～19.5m弱で、西から東に向かい下降する。

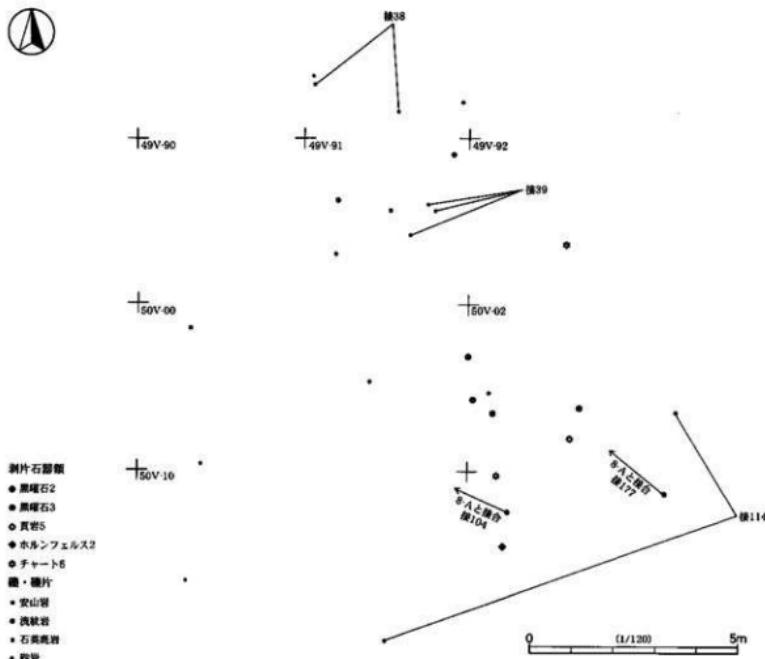
出土遺物28点のうち、礫・礫片を除いた点数は8点である。ナイフ形石器・石核が1点、二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片は2点ずつ出土している。

出土石材の内訳は、礫・礫片では安山岩7点、流紋岩4点、石英斑岩1点、砂岩8点であり、剥片・石器類では黒曜石4点、頁岩1点、ホルンフェルス1点、チャート2点である。それらは8—F全体にわたり散漫に分布する。

なお、黒曜石は夾雜物の過多で母岩分けを行ったが、黒曜石2と3の色調・夾雜物の大きさは酷似しており、同一母岩の可能性が否めない。



第38図 第4文化層第8ブロック—F器種別分布



第39図 第4文化層第8ブロックーF母岩別分布

第14表 第4文化層第8ブロックーF組成表

母岩名 / 岩種	ナイフ形石器	二次加工のある 剥片	使用痕のある 剥片	石核	剥片	鱗	磷片	点数	点数比	重量(g)	重量比	
安山岩 5	0	0	0	0	0	0	0	3	10.7%	100.65	13.67%	
安山岩 16	0	0	0	0	0	0	0	2	7.14%	40.58	5.51%	
安山岩 17	0	0	0	0	0	1	0	1	3.57%	80.12	10.88%	
安山岩 18	0	0	0	0	0	0	1	1	3.57%	123.77	16.81%	
流紋岩 3	0	0	0	0	0	0	0	1	3.57%	10.35	1.41%	
流紋岩 16	0	0	0	0	0	0	0	1	3.57%	10.27	1.40%	
流紋岩 27	0	0	0	0	0	0	0	2	7.14%	87.57	11.90%	
石英斑岩 8	0	0	0	0	0	0	0	1	3.57%	39.61	5.38%	
黒曜石 2	0	1	1	0	0	0	0	0	2	7.14%	4.82	0.65%
黒曜石 3	0	1	0	0	1	0	0	0	2	7.14%	13.54	1.84%
砂岩 30	0	0	0	0	0	0	0	4	14.29%	21.84	2.97%	
砂岩 32	0	0	0	0	0	0	0	3	10.71%	72.43	9.84%	
砂岩 33	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3.57%	62.06	8.43%
貝岩 5	1	0	0	0	0	0	0	0	1	3.57%	7.29	1.00%
ホルンフェルス2	0	0	0	1	0	0	0	0	1	3.57%	39.79	5.41%
チャート6	0	0	1	0	1	0	0	0	2	7.14%	21.32	2.90%
合計	1	2	2	1	2	2	18	28	100.00%	736.10	100.00%	

出土石器（第40～61図、図版7～19）

接合状況を鑑みて、第8ブロック全体の遺物実測図を器種別に作成し、図中に母岩名を付記した。

ナイフ形石器（1～7） 1の刃部としての側縁は左右両側縁とも未加工で、素材がそのまま活かされており、基部の加工は粗い。2は縦長剥片を素材にしており、小型ながら整美な形状を示す。左側縁及び右下縁には丁寧な刃溝し加工が施され、二側縁加工のナイフ形石器の様相であるが、右上部の加工痕は尖端を意識したもので、刺突具としての機能を有する。素材剥片の打面部はそのまま残され、剥片剥離時の頭部調整痕は両側縁部からの刃溝し痕に切られる。3は横長剥片の末端縁辺を刃部にし、対縁に刃溝し加工を施している。4は2と同様、縦長剥片の打面付近を基部に据えている。主要剥離面上部には、腹面を切る剥離が入る。これもまた、刺突を意識したものか。5の素材剥片の打面部は基部調整され、残存しない。加工は主要剥離面側から行われるが、尖端部の断面形はほぼ正三角形に整えられ、刃部としての様相よりはむしろ刺突具として有効な形状を示す。6は縦長剥片を素材としている。右側縁はほぼ直線状であるが、左側縁は弧を描く。基部は刃溝し加工ではなく、下端に据えた打面から加擊し、面的な調整が行われる。7は縦に長い五角形状である。素材剥片の打面部を基部に据えている。基部は左右縁のみならず、下方からも調整が加えられ、厚みや稜などが除去される。先端部は背腹両面から加工される。

1はガラス質黒色安山岩1、2・3は頁岩2、4は頁岩3、5・6は嶺岡産珪質頁岩1、7は頁岩5を母岩とする。

擂器（8） 素材時の剥片の背面および側面には連続した同一方向の剥離が残る。石核器面を調整するために剥離された剥片を再利用したものか。打面付近の厚みを利用して急角度の調整を施し、端部が作出される。また対縁には使用痕が廻る。5・6と同じく嶺岡産珪質頁岩1を母岩とする。

敲石（9） 母岩は砂岩2であり、両側面と下端に敲打痕が看取される。特に下端の敲打痕が顕著である。二次加工のある剥片（10～33） 10の石刃の下半部は折れのため遺存しない。打面は背面から加擊された剥離により切られ、打点が失われている。右側縁の二次加工は平坦で連続した3mm～4mmほどの剥離痕が並ぶが、左側縁の剥離は打角74°～83°を測り、剥片生産を目的とした可能性がある。11は縦長剥片（石刃）の下部である。末端部分に主要剥離面側から70°～83°で加工される。左側縁に微細剥離が看取されるが、使用によるものかどうかは不明である。12は調整された打面から剥離された石刃を素材に用い、末端部に加工を施すことにより尖端を意識した形状となっている。断面は中高の三角形状である。10～12はガラス質黒色安山岩1が母岩である。13はガラス質黒色安山岩5の6点のうちの1点である。右側縁及び左側縁の打面付近に加工が施されているが、定形的な石器にまでは至らない。打点対縁が弧状に広がる14の剥片は、右側縁に細かなつぶれのような加工痕が看取される。大根を輪切りにするように素材石核の打点を一方向に移動させながら連続剥離を行って作出された、小打面・幅広縁辺を持つ三角形状の剥片である。15は14と同様、広い打点対縁が加工された剥片であり、左端は尖端を意識したものと思われる。16は左縁辺の二次加工のあとグラインディングされている。14、15、16はそれぞれ黒曜石1、2、3を母岩とする。

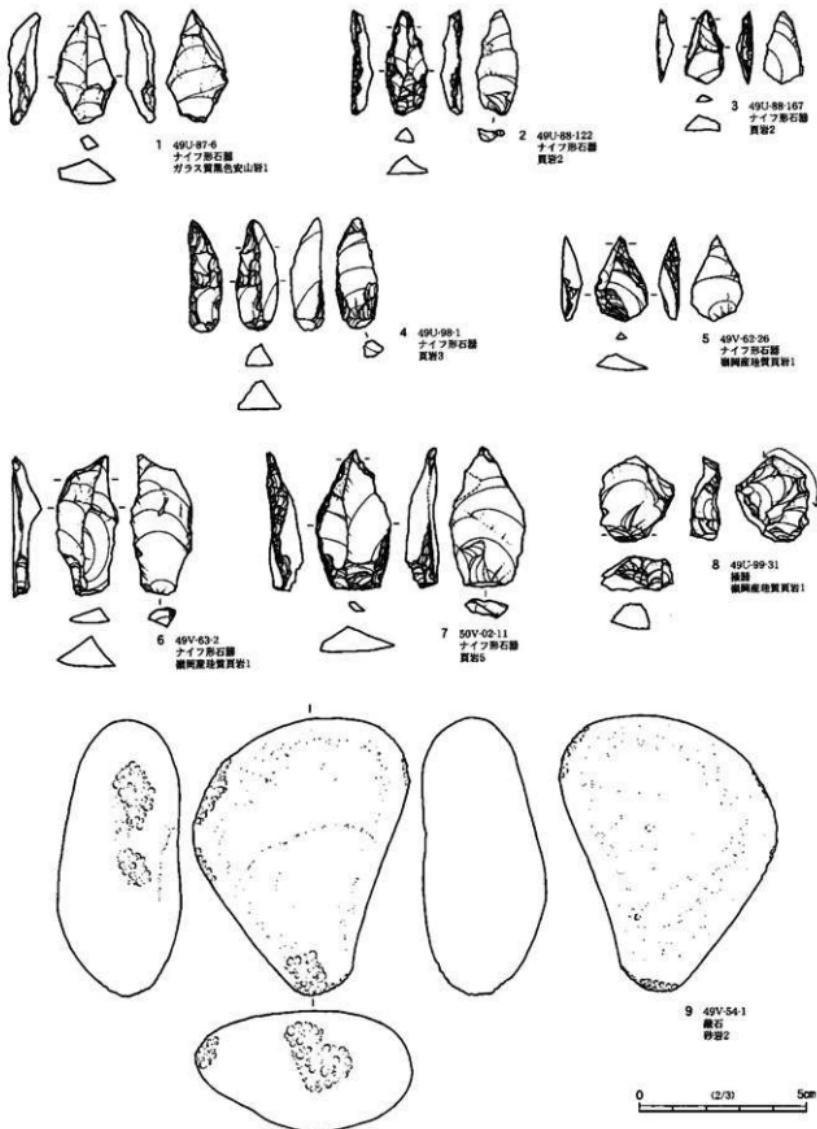
17は珪化度の強い玻璃質の珪質頁岩1である。頭部には調整痕が看取される。主要剥離面を切って下部に加工が入る。横打・頭部調整など42と似る。72の剥離工程と同様に素材剥片の主要剥離面を打面に据えて加擊された剥片か。18は珪質頁岩5であり、打面付近の細かな二次加工が背腹両面に及ぶ。末端は背面にまで回り込む。左右側縁に刃こぼれ状の微細剥離痕が看取される。19は下縁辺を除く三方に二次加工痕が看取される。20の左端には主要剥離面側から加工が施され、尖端が意識された形状となっている。右縁

辺に連続した微細剥離痕あり。19・20は嶺岡産珪質頁岩1が母岩である。21は節理部分が明茶色、剥離面が黄土色の嶺岡産珪質頁岩2である。打面・頭部調整が看取される。末端は階段状である。左縁辺に42°～56°の二次加工痕が看取される。右側面に自然面が残り、細かく削ぐような小剥離痕がみられるが、主要剥離面を切るものではない。22は珪化度の高い、緑色を帯びた光沢のある嶺岡産珪質頁岩3で、他に同一母岩は出土していない。貝殻状剥片の外周を加工痕が廻る。特に左縁辺部の加工は大まかな成形のあとさらに調整されて、尖端が作出されている。この尖端は調整後、あるいは調整中に欠損する。

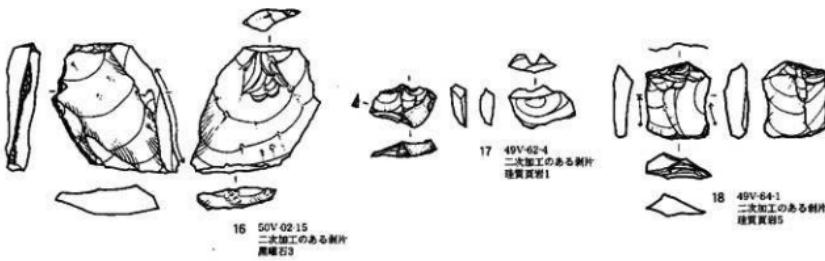
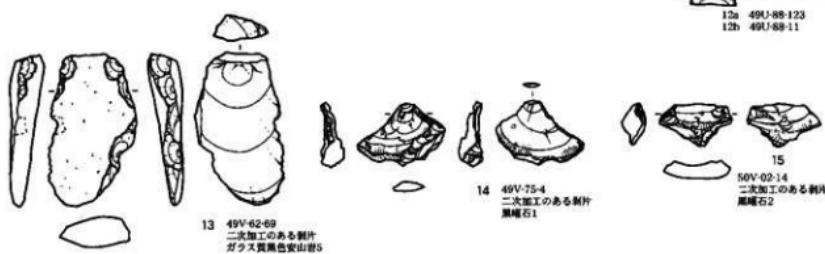
23は主要剥離面と同一方向の剥離面が3面残る背面を持つが、中央部は打面再生後に剥離される。両側縁は収束し、右側縁下部には微細剥離痕が看取される。24は厚みのある素材剥片の側縁を活かし、加工を加えて尖端が作出されている。「錐」ととらえるには尖端部の加工はあまく、偶発的な要素によるものと思われる。25の尖端部は折れているが、錐として使用されていた可能性もある。26は中高で断面三角形状の石刃である。右側面は主要剥離面側から加工される。27の上部は折れにより欠損している。28の右側縁上半部には59°～64°の平坦剥離が看取される。腹面から折れが生じ、上・下部に分割される。29は末端縁辺をゆるく抉るような50°～55°の二次加工痕がある。背面には多方向からの剥離痕が看取される。30は上縁及び右側縁に二次加工が施された板状の石器である。特に、右側縁下部は連続した小剥離痕によりゆるやかに抉られている。23・24はホルンフェルス1、25～27はホルンフェルス2、28・29はホルンフェルス3、30はホルンフェルス5を母岩とする。

31は珪化度の強いチャート1を使用して、ドリル状の突出部を作ろうとした意図が感じられるが、上部は折れて遺存しない。32はチャート9が母岩である。打点直下の折れにより縦方向に分割される。左側縁中ほどには器形に沿って細かな調整が施されたノッチが看取される。33は灰白色の玉髓（メノウ含む）1で、厚みがあり断面は三角形状を呈する。自然面は打面部にのみ残る。

使用痕のある剥片（34～42） 34は黒曜石2で、打面及び下縁の新欠部分以外は全周に使用痕が廻る。右下縁辺に自然面がわずかに残る。35の背面に残る情報からは素材である石核を同一方向から頭部調整を行ながら、連続して剥離された剥片であることがわかる。自然面と主要剥離面とが作出する左～下縁辺は37°を測り、刃こぼれ痕が看取される。下端の折れは使用の際のものか。母岩である珪質頁岩3はこの35と、59の剥片の2点のみ出土する。35は8-A、59は8-Bから検出されている。36は8同様、荒れた石核表面を整えるために厚めに剥離された嶺岡産珪質頁岩1の剥片である。打対面辺の広縁には使用痕である刃こぼれが、左下端部には尖端を意識したような張り出しが看取される。37は嶺岡産珪質頁岩2を母岩とする。張り出した右肩部に使用痕が残る。38はホルンフェルス3の幅広の剥片である。半円弧を描く縁辺には使用による微細剥離痕が看取される。39の母岩は自然面が緑色を帯びた白灰色で、剥離面が淡い黄土色～緑白灰色のチャート6である。腹面左縁辺に刃こぼれ痕が並ぶ。40は、赤茶色のチャート7で円形である。所々緑灰色のガラス状に珪化している。41は8-Dのみに分布するチャート10が母岩である。下縁辺の微細剥離痕を表現するため、変則的な設置を行った。展開図右側面下縁辺に使用痕範囲を表した。42は左側縁に緑灰褐色の自然面を持つ玉髓（メノウ含む）2である。背面上縁辺に打面から規則的に加撃された痕が残るが、主要剥離面を切っていないことから頭部調整痕ととらえた。打角は133°と鈍角であり、打面と主要剥離面とがなだらかな稜をなす。横打されてできた広い末端縁辺には肉眼でようやく観察されるほどの刃こぼれ痕が両面に残る。18と同様、横打剥片で頭部調整が見られる。また72にみられるような厚手の剥片を素材とした剥離工程を経ているものと思われる。

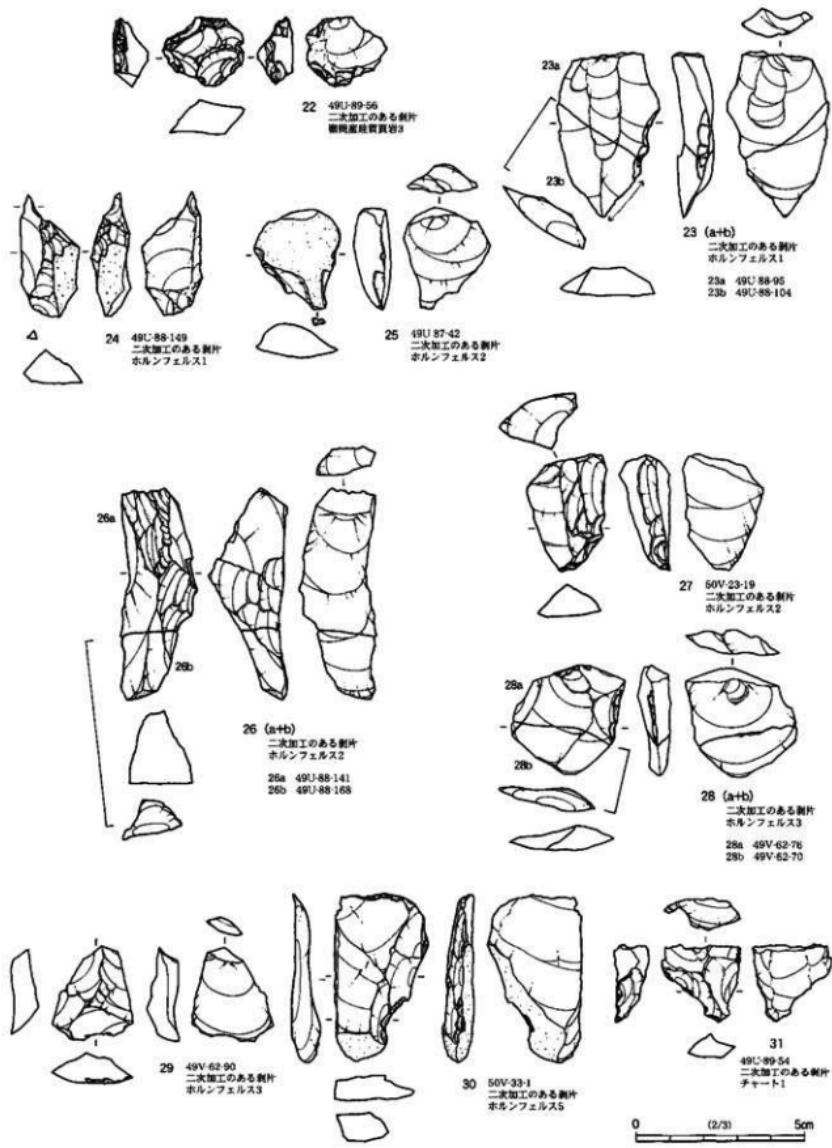


第40図 第4文化層第8ブロック出土石器（1）

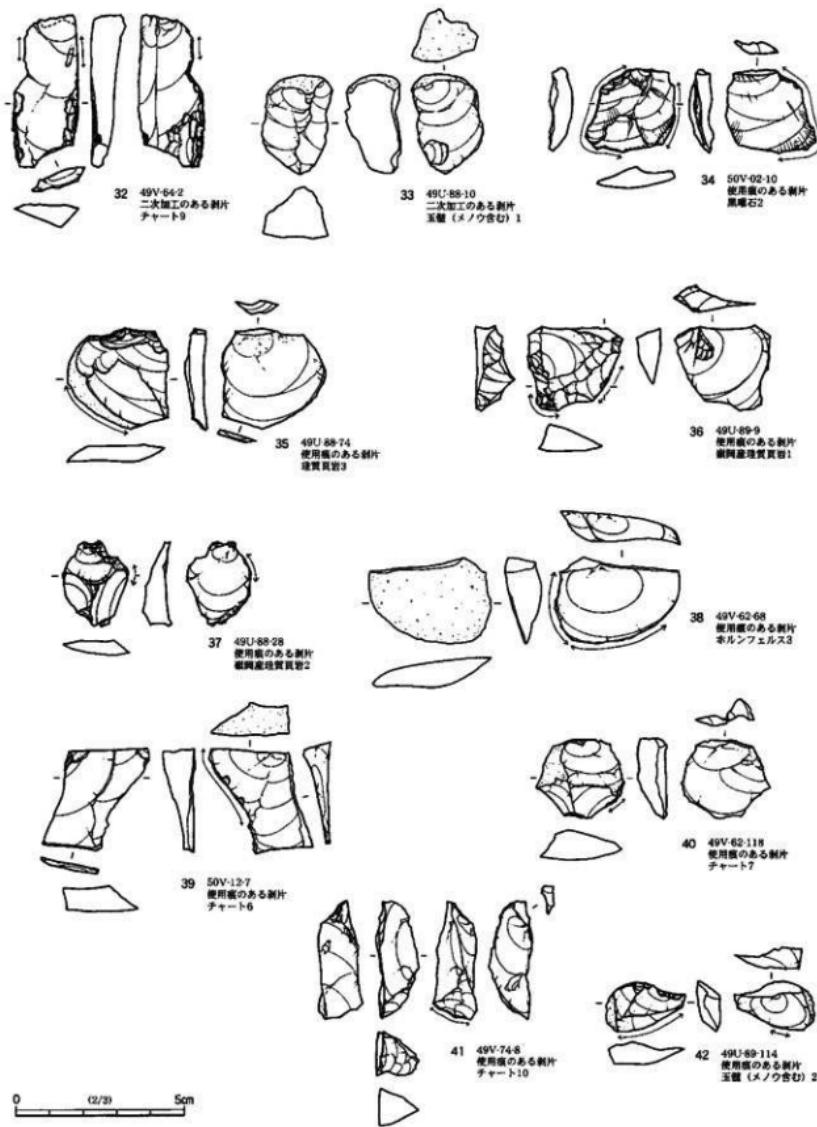


0 (2/3) 5cm

第41図 第4文化層第8ブロック出土石器(2)



第42図 第4文化層第8ブロック出土石器（3）



第43図 第4文化層第8ブロック出土石器 (4)

石核 (43~56) 43は一面一剥離の様相を呈し、ガラス質黒色安山岩3を母岩とする。左側面のボジ面と、正面に据えた面との新旧関係は不明である。幅のある有効な剥片（目的的剥片）を複数作出したあとの残核である。44は自然面を多く残すガラス質黒色安山岩4である。剥離面打面から3面以上の剥片が作り出されている。45の母岩はトロトロ石2で、剥離面は灰白色であるが、所々風化により、黄土色となっている。調整打面から同一方向に複数枚剥離される。石材の特徴である風化の早さがこの石核の情報を曖昧にしている。46・47は頁岩4の分割礫の剥離面を打面とした石核である。48は自然面が明黄褐色、剥離面は明るい黄土色の珪質頁岩2である。素材を回転させながら、剥片剥離作業が行われる。有効な剥片の剥離が終わると、素材を90°持ちかえて再度回転させながら剥離作業が行われる。上面の打面からは正面・左側面に同一方向に加撃され、少なくとも6面の剥離痕が看取られる。43・44・46・47は8-Aから出土した單一母岩であり、剥片類は検出されていない。49~51はホルンフェルス1を母岩とする。49は2片で1点の石核で、厚みのある板状の剥片の右側面を作業面としている。背・腹面両方向から加撃される。正面に見える剥離作業の際に、49bが折れたものと推定される。50は左右側面に工程初期の作業面を残し、裏面を大きく剥離したのち、打面が設定される。その打点から末端へ向かうように剥片剥離が行われている。作業面（正面）上部に見られる小剥離痕は稜上調整のためであり、目的的剥片としては幅広の末端縁辺を持つものが有効であると推定される。51は49と同様、板状の剥片を素材とし、側面を作業面としている。縁辺には使用痕が看取される。52~54はホルンフェルス2を母岩とする。52は多方向から剥片剥離したのち、打面を定めて左→右→裏→正面の順に縦軸を回転させるように作業面を移しながら作業が行われ、遺棄に至る。53は打面・作業面置換型の分割礫素材である。おもに長軸方向の両極面で稜上を調整しながら、剥離作業が行われる。54は厚みのある剥片を素材としている。素材剥片の主要剥離面を打面とし、下・右側面を作業面とする。この結果、素材背面には外周から内核へ向けて加撃された剥離痕が半円形をなす。55は多方向から剥離作業が行われている。節理が発達しているため、定型的な剥片が得られたとは考えにくい。この母岩であるチャート10の7点はすべて8-Dから出土する。56は自然面が橙色を帯びた黄褐色、剥離面が白色から黄色が水和層をなす玉髓（メノウ含む）3である。上面の節理面が打面となつて正、裏、左、右面が剥離される。下面の自然面からは加撃されていない。剥離の順は上面の節理面打面から裏面が剥離され、その剥離面を打面として左側面を2面以上加撃して剥離痕を残している。再度打面を上面の節理面に換え、剥離作業が行われる。この際、左側面、正面、右側面へと縦を軸として回転される。玉髓（メノウ含む）3は8-Aに分布し、碎片と石核の2点で構成され、2点間は約3.5m(3.45)である。接合関係はない。

剥片 (57~70) 57の下部は折れととらえたが、右下部に関しては古い剥離の可能性がある。ガラス質黒色安山岩1を母岩とし、73の接合資料の剥片と形状・打角が近似する。58はガラス質黒色安山岩7の自然面を削ぐように小さな石刃状の剥片を剥離したのち、上下を持ちかえて剥離されたものである。59の母岩は明黄土色の珪質頁岩3であり、石刃状に薄く剥離されている。打面・頭部調整が看取される。60は明るい黄土色をした光沢のある珪質頁岩7である。珪質頁岩3と比べると、細粒で滑らかである。左上面を打面にして3面以上が剥離された後、小口打面から加撃される。61には頭部調整が看取される。器形を調整するための剥片かと思われる。母岩である嶺岡産珪質頁岩1は8-Aに6点、8-Bに3点、8-Cに1点が分布している。62・63はホルンフェルス1である。62は背面に主要剥離面と同一方向の剥離痕が3面あり、縦長で定形的な石刃状の剥片を連続して作出したうちの1片であると考えられる。下部は折れて遺

存しない。63は頭部調整された打面から剥離される。背面右上半部には右側面を打面にした粗い剥離痕がみられるが、素材石核の稜上調整痕である。左縁辺に丸みがあるが、使用によって摩耗した可能性もある。末端は2か所で折れが見られる。64・65はホルンフェルス2を母岩とする。64は素材を輪切りにするように連続して作り出された剥片のうちの1片である。調整された打面を持ち、縁辺は左右下縁の区別なく広縁となる。65は下部折れの石刃であり、同一方向からの連続剥離による所産である。66はホルンフェルス3であり、背面に同じ方向から3片以上剥離された痕が残る。打角は127°を測る。67・68は板状剥片で、下端部は折れて欠損している。母岩は各々ホルンフェルス4、5である。69はホルンフェルス6であり、背稜は石刃のほぼ中央を曲がりながら通り、左右側縁は末端で収束する。70はチャート6を母岩とする。厚みがあり、小さく作出された打面から剥離され、末端は緩やかに内核に向かう。

接合資料(71~92) 71は剥片6点の接合資料である。71fを除く71a~71eは打面を共有する。この打面からは少なくとも6片以上の剥片が作出されている。71a+71b→71c+71d剥離後、頭部調整された厚みのある71eが剥離される。71aと71b、71cと71dはおそらく硬質の敲打具による直接打撃のために打点直下の縦折れをおこしたものと考えられる。71a~71eの剥離後、打面を換えて71fの剥離に至る。

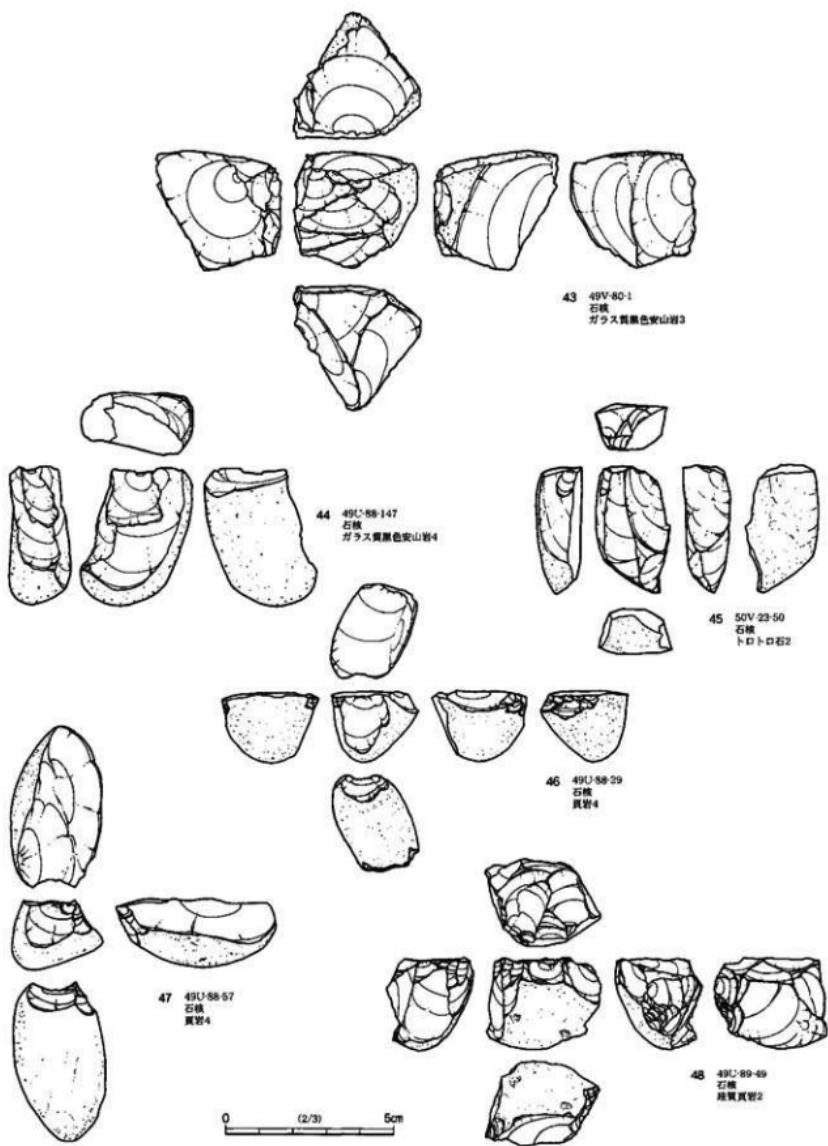
72は厚さ16mmのガラス質黒色安山岩2の剥片を素材として作出された、剥片2点と石核の接合資料である。素材に用いられた剥片は両側縁及び打面対縁の長さがほぼ等しいと推測される正三角形状で、72a・72bとも主要剥離面末端部分から打面に向かって順に加撃される。剥片→72a→剥片→72b+剥片と、72a・72bを含む6点以上で構成されていたものと思われる。

73は淡い緑灰色と橙色を帯びた肌色のツートーンの剥離面と、黄土色の自然面を持つ流紋岩1の接合資料である。原礫は35mm~40mm程の厚みを持つ円盤状の偏平礫であり、この素材の厚さが73a(36.20mm)・73b(37.34mm)の器長となっている。73aは打面調整のあと剥離され、続いて同様に73bも打面調整されるが、剥片剥離には至らず、素材を上下に180°持ちかえて加撃される。2点間の距離は2mである。

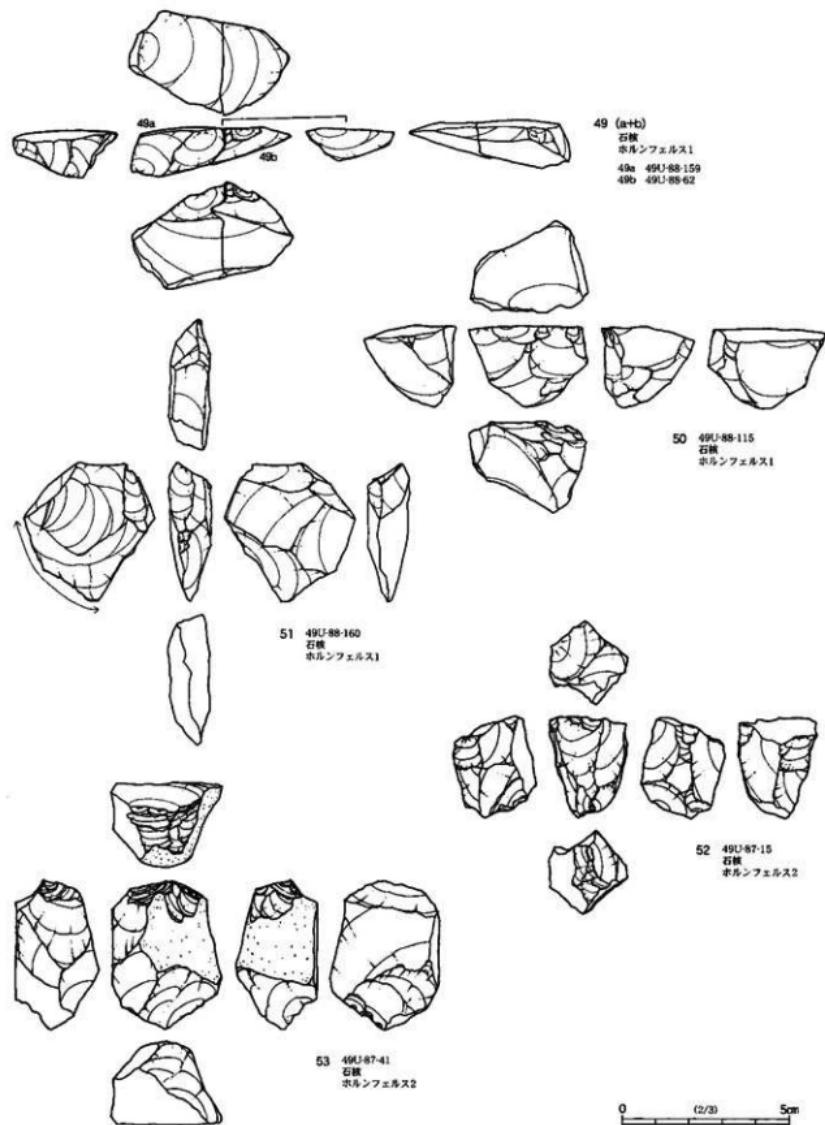
74は削器と剥片4点からなる接合資料である。母岩は灰白色でザラつきのある風化面を持つ頁岩1である。74a+74b剥離後、74c+74d+74eが剥離される。その間、同一打面(自然面)から少なくとも3片以上剥離される。自然面の形状から、原石は大人のこぶし大ほどであろうと思われる。打点直下で同時に削れをおこした74a、74bのうち、74aは鋭角の右側縁辺にスクレーピングエッジ(63°~83°)が作出される。接合した5点は、74b~74dの4点が49U-89グリッドの1m²内にまとめて出土するが、74aの削器は49U-88グリッドから検出され、その距離は4mほどを測る。

75は石核1点と剥片3点の接合資料である。母岩は自然面が明るい茶色、剥離面は緑がかった黒褐色で、油脂状光沢を持つ珪質頁岩1であり、8-Aに6点、8-Bに4点が分布する。75(a~d)は8-Aから出土している。打面を作出した後に、打点を順次移動させながら剥離を進行させていく工程により、素材石核から75a、75b、75cが剥がされる。稜上は細かく敲打され、庇を潰すように調整されてから剥片剥離作業へと移っていく。75aは目的的剥片であると同時に石核の打面を再生した剥片である。この後、現れた作業面を打面にして、自然面を削ぐように剥離する。この際、対面からも加撃されており、下部を台石などに設置した可能性も考えられる。75cの使用痕は下部の折れに寸断される。

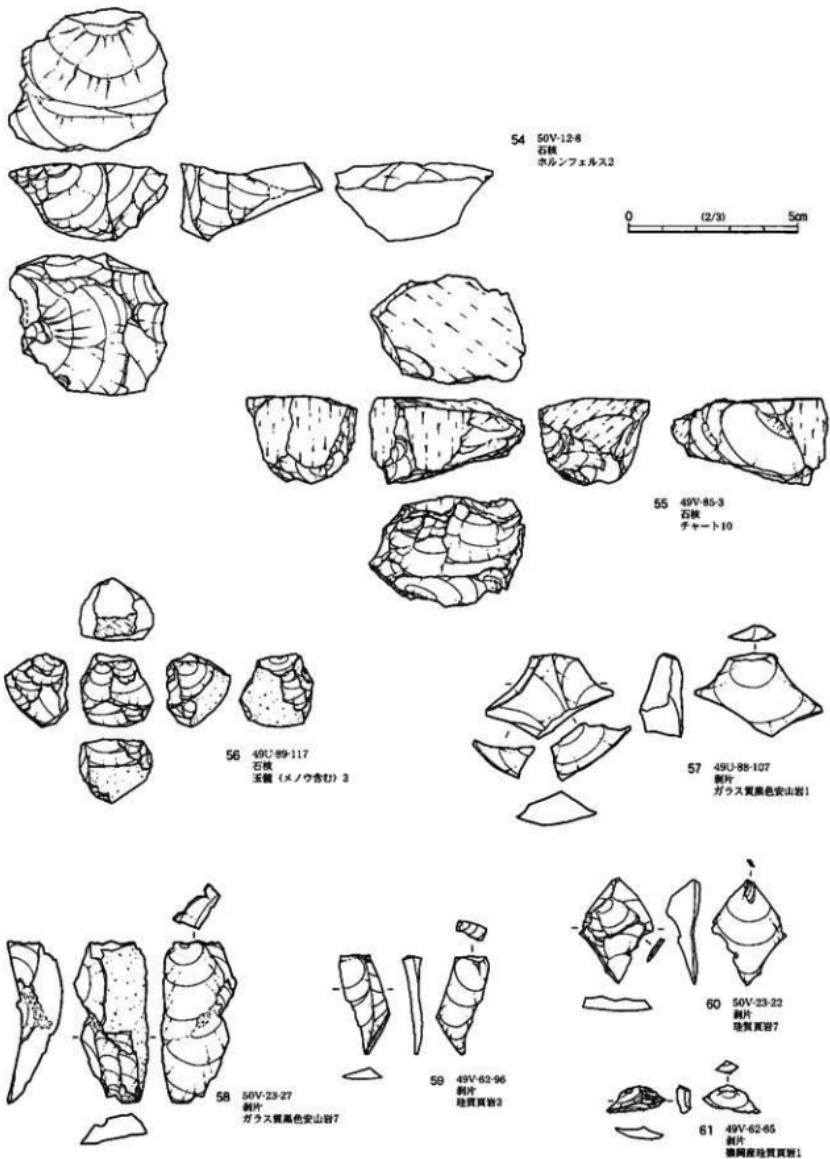
76・77は、8-Eにのみ分布する明黄褐色の珪質頁岩6を母岩とし、素材礫分割後の剥離面を打面にして、目的的剥片を作出する過程を示す。荒れた打面を除去することにより、新たな剥離面を作出し、打面に換えては作業が続けられる。77aは下部のみ残存する剥片であるが、背面はすべて自然面であり、極め



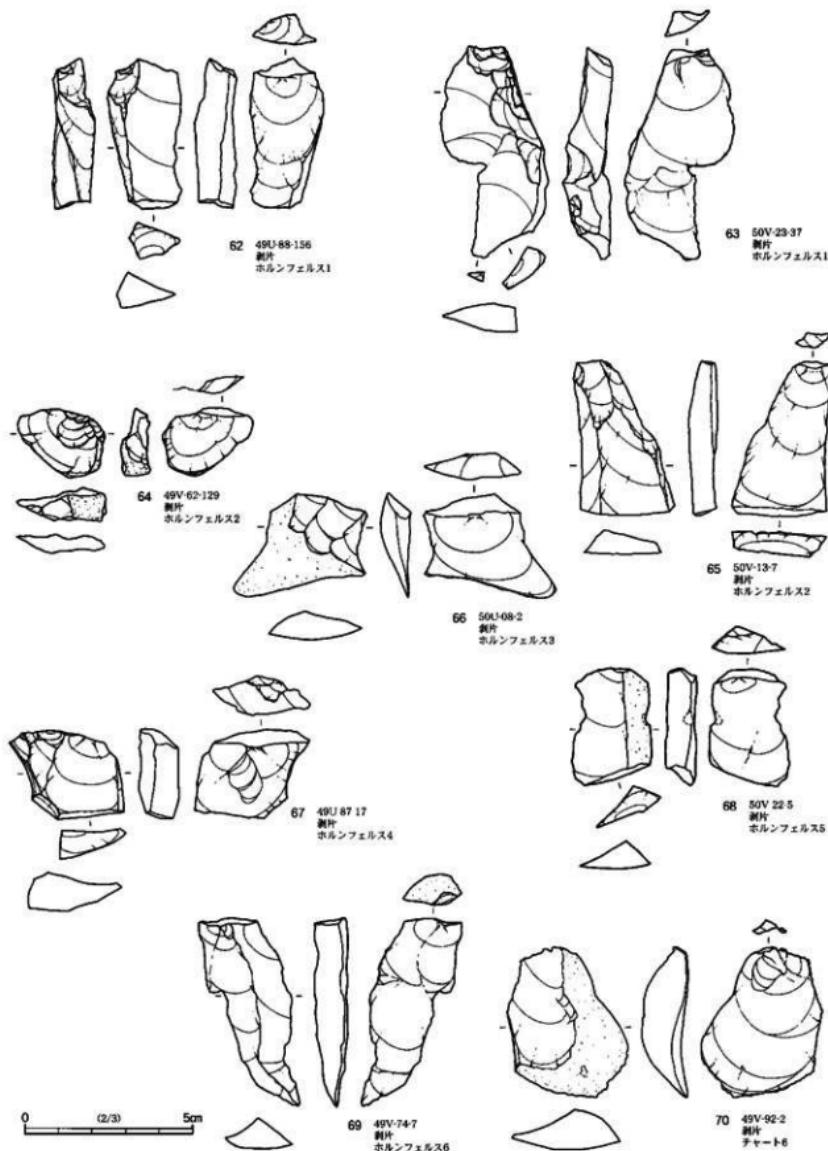
第44図 第4文化層第8ブロック出土石器（5）



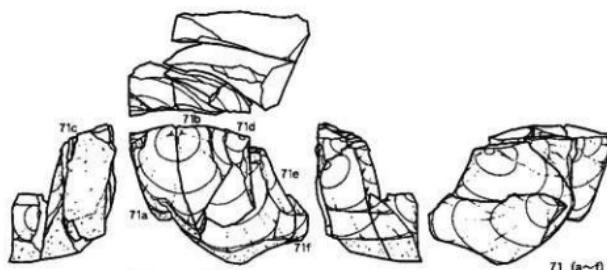
第45図 第4文化層第8ブロック出土石器（6）



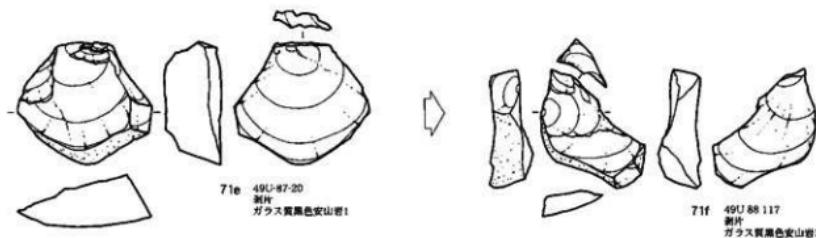
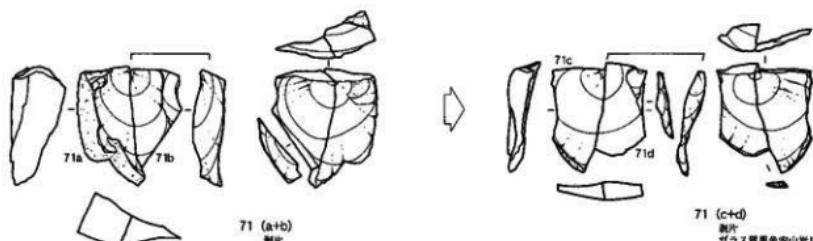
第46図 第4文化層第8ブロック出土石器（7）



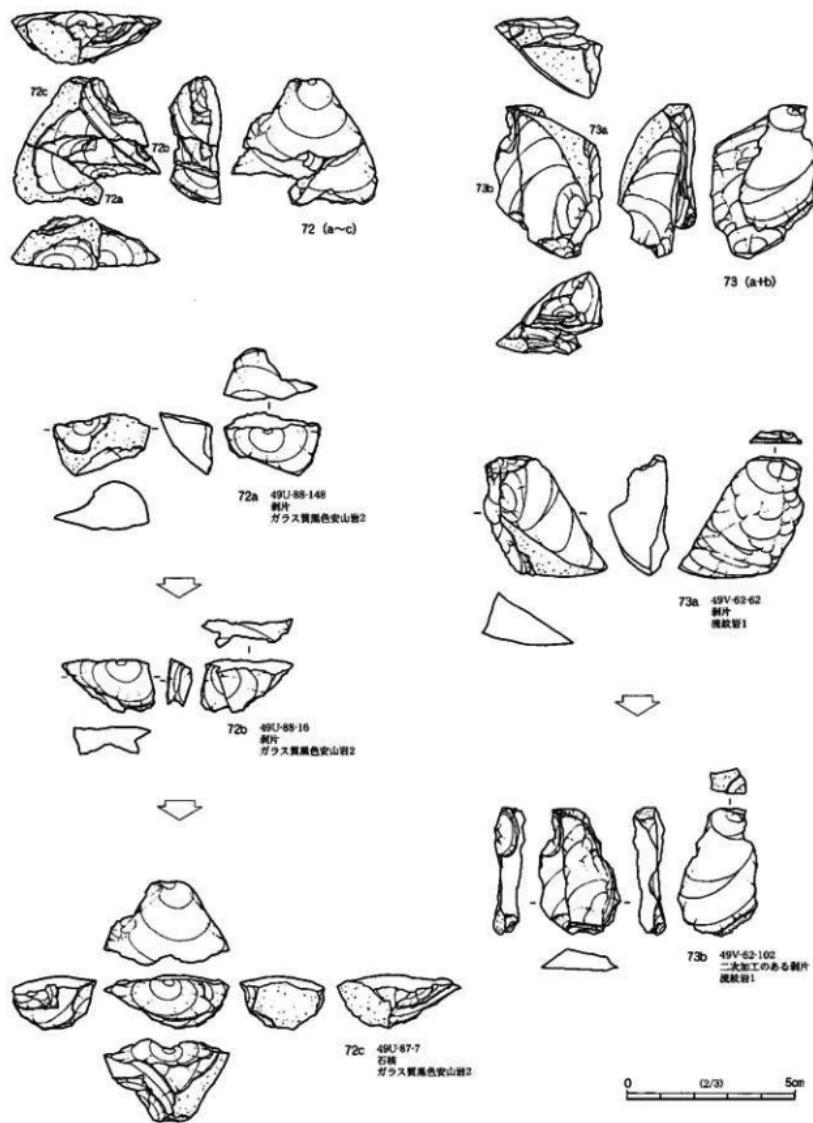
第47図 第4文化層第8ブロック出土石器（8）



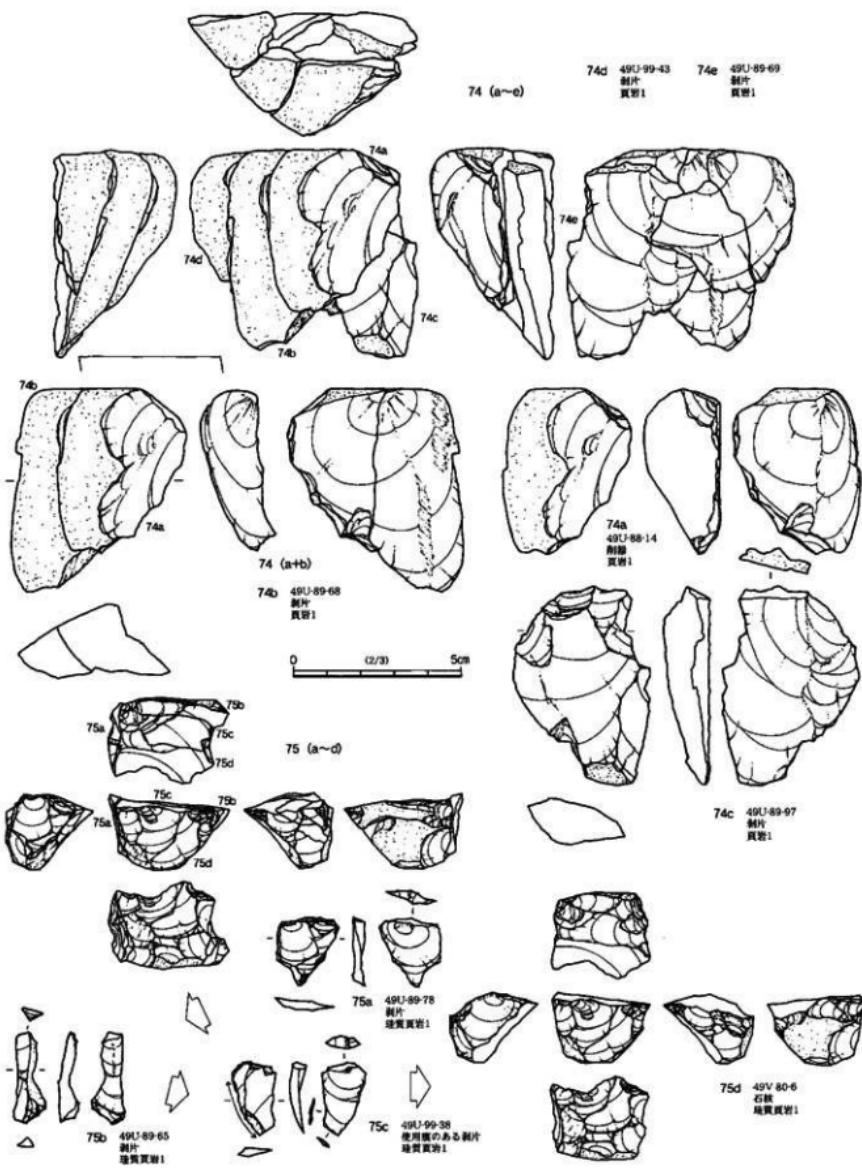
0 (2/3) 5cm



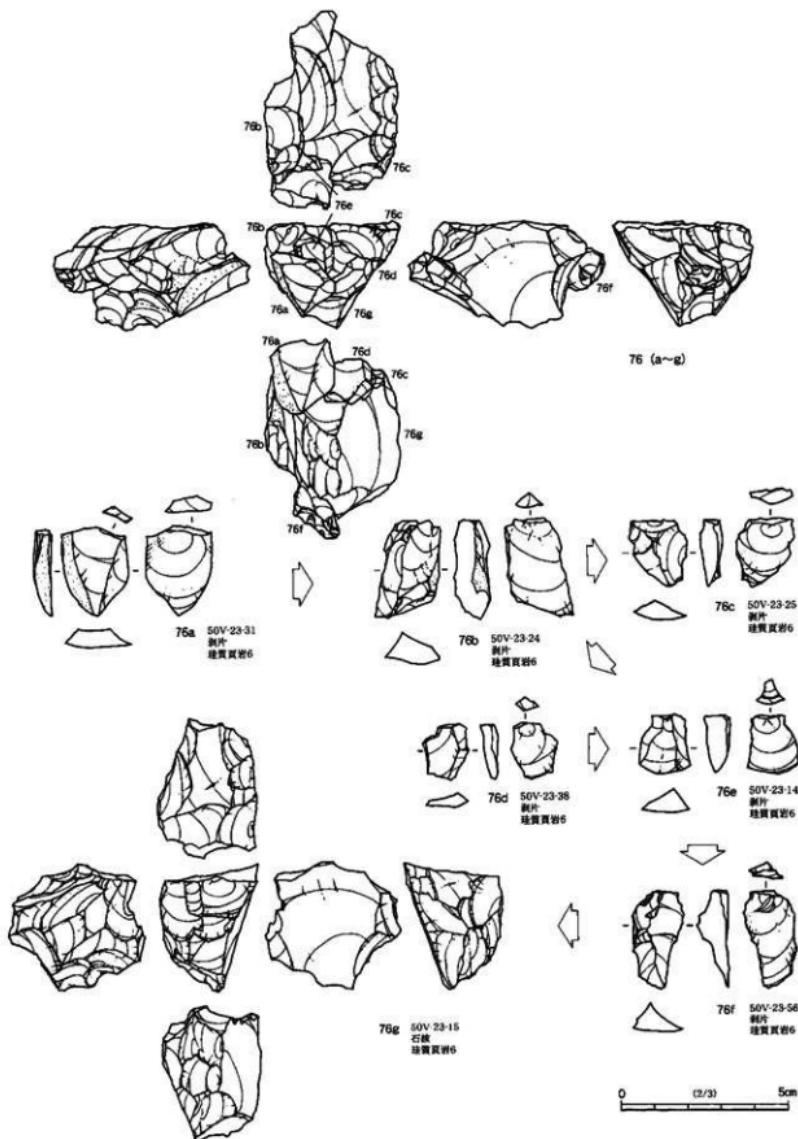
第48図 第4文化層第8ブロック出土石器（9）



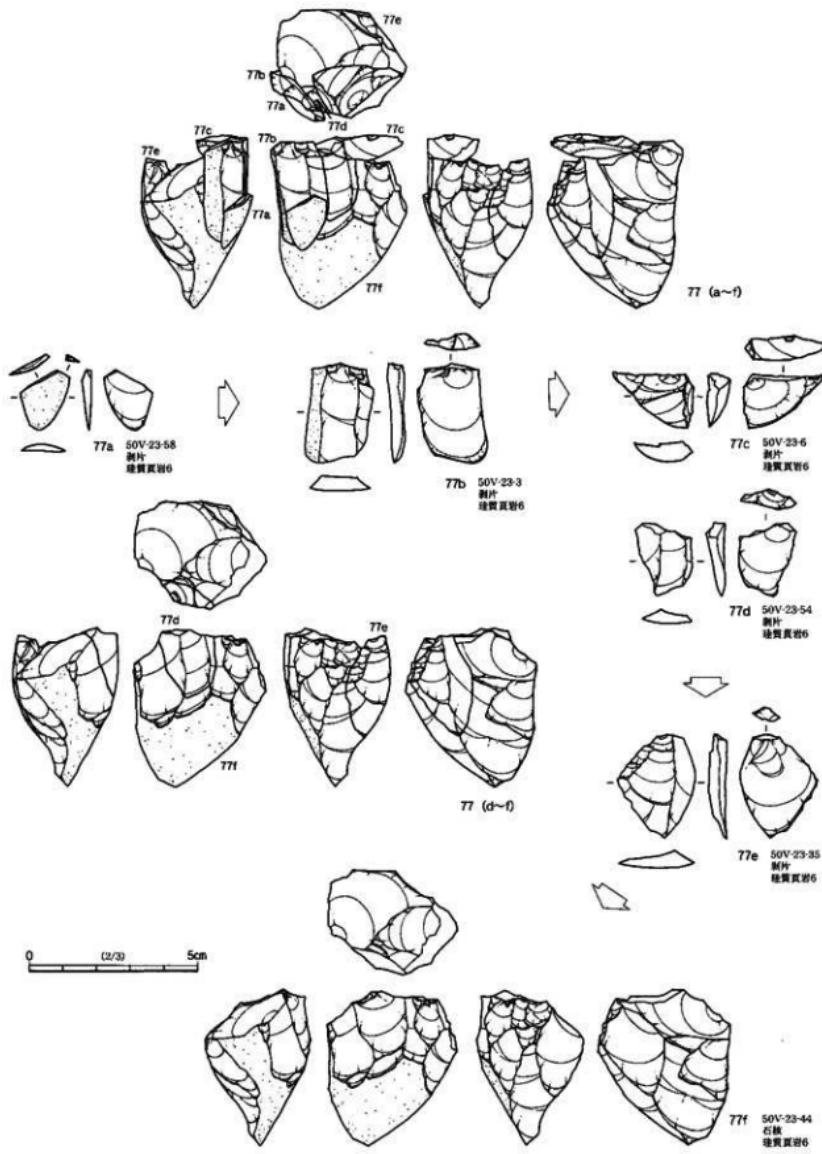
第49図 第4文化層第8ブロック出土石器 (10)



第50図 第4文化層第8ブロック出土石器（11）



第51図 第4文化層第8ブロック出土石器 (12)



第52図 第4文化層第8ブロック出土石器 (13)

て初期の段階で剥離されている。77cにより打面は再生され、77dが剥離される。76の塊とは同一母岩であるが、接合はしない。77cのような打面再生剥片により、分断されたものと推測される。

78~82の母岩は自然面・剥離面ともに光沢のある明黄土色の珪質頁岩7であり、26点が出土しているが、すべて8-Eに分布する。接合関係が確認できたのは、5個体17点である。

78はナイフ形石器1点、石核1点、剥片4点の計6点が接合している。この6点における作業手順を示す。78aの剥離後、78b背面からの加擊により、78b・78d共通の面が作成されるが、剥片剥離の際の打面は78a・78b・78dに共通する平坦面である。ここから78bが剥離され、その作業面を打面として78cが剥離される。再び元の打面から78dが剥離される。この後、打面再生が行われ、78e+78fに見られるような、上下二方向からの加擊により、小型の石刃状剥片が作出される。78aは厚みのある剥片を素材に用い、主要剥離面を打面として右側縁に急角度の加工を施したナイフ形石器である。自然面と主要剥離面によって作り出された刃部は、左側縁の1/2以上を占める。尖端部の加工は特に入念に行われており、欠損の修復を意図したものと思われる。78a・78b・78dは打面が共通であり、広い打点対縁を持つ剥片である。

79はナイフ形石器、剥片、碎片からなる接合資料である。79aはナイフ形石器のプランティング部分を整えるための調整剥片であり、79bはその際の破片と思われる。一回り小型になった素材はその後も加工・調整され、基部には緩やかな抉りが入る。78a同様、打点対縁の広い剥片がナイフ形石器の素材に用いられている。

80は使用痕のある剥片、石核、剥片の3点接合資料である。早い段階で80aを含む塊が剥離されたあとに、81b・81cが頭部調整を伴いながら連続して剥離されている。80aは右側縁に使用による微細剥離痕が看取されるが、裏面からはより顕著であり、縁辺が潰れて厚み（丸み）を持っている。80bは素材時の剥片の情報を重視して設置、実測を行った。

81は剥片2点と石核1点の接合資料である。外皮を削ぐような工程の後、素材疊をいくつかの塊に分割し、上・下面を打面と設定して剥離作業が行われている。81cの上・下面の稜上には連続した小剥離痕が看取される。

82は使用痕のある剥片と二次加工のある剥片の2点接合資料である。同じ打面から頭部調整を介在して同一方向に剥離された2点であり、この工程間には少なくとも1点以上の剥片が作出されている。

83~88の母岩はホルンフェルス1である。総出土点数63点中57点は8-Aに分布するが、残り6点は8-Eに分布し、84は両ブロック間に接合関係が認められた。

83は二次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片1点、剥片2点、石核1点からなる接合資料である。打面・作業面置換型ではあるが、石核内部へ向かう並列剥離もみられる。83aは素材の打面調整剥片であり、石核表面を整えるために剥離されているが、83a自体にも左側縁に56°~62°の小剥離痕が看取される。83aが剥離されてできた作業面は83cの打面となる。おそらく、この加撃の際の衝撃により、83dの発達した節理面が地滑り状に剥がされ、偶然得られた打面は器長に対して約50°の斜面となるが、鋭い稜が調整された後、83eが剥離される。83e末端と83fの間隙は、使用による摩耗が一因か。

84は使用痕のある剥片3点、石核3点、碎片1点の7点からなる接合資料である。8-Aと8-Eの2地点間で接合関係が認められた。石器間は最長で28mの距離を測る。8-Eでは3点に折れた（84a・84b・84c）剥片素材の石核と84dの碎片、8-Aでは剥片3点が出土している。84に関しては8-Eが

廃棄の場、8-Aが石器活用の場かと思われる。84a～84d塊と84e～84g塊とは別工程の所産である。84a～84dを含む塊は8-Eに持ち込まれ、平坦な剥離面を打面に据えて横長の剥片を作出するために用いられる。一方の84e～84gは広い打点対縁を持つ剥片を作出するための用途を持つ塊であると認識される。84a・84dは調整の用途を持った小片である。84f+84g、84eは縁辺に使用痕が看取される。

85は石核85cに剥片85a、85bが接合する資料である。自然面は残存せず、各々の面は平らな広がりを示し素材塊の大きさを想像させる。85aと85bの新旧関係は不明である。正面図には85aを剥離したのち、打面調整痕と思われる数回の打撃痕が見受けられる。打面・作業面を頻繁に置換しながら、剥片剥離作業が行われている。裏面右上方の剥離痕は同一方向からの連続した加撃による剥離面であり、作業当初は規格性の高い剥片が生産されていたことがうかがわれる。85aは右下部に1cmほどの長さにわたり、微細剥離痕が看取される。接合面には使用による摩耗のため1mmほどの間隙がある。

86は剥片と石核の接合資料である。石刃状の縦長剥片が86aを含めて少なくとも3片以上剥離される。背稜がほぼ中心を通る石刃であるが、加えられた力は末端にたまり背面に回る。この後石核は數片の石刃状剥片を作出したのち、剥片生産の役割を終え、尖頭を意識した器形へと加工される。

87と88は同様の工程を示す。同一の打面から順に切り出された剥片であり、相似形を呈する。

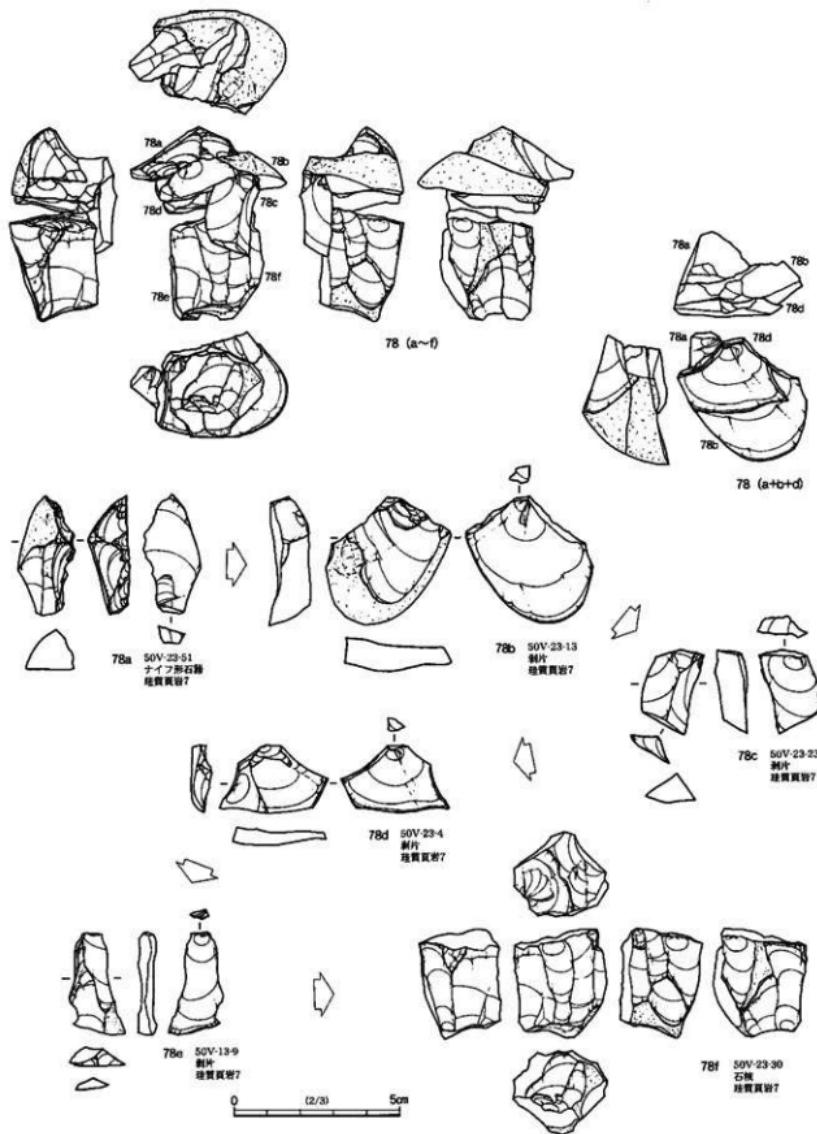
89・90は剥片1点、石核1点の接合資料である。90は厚みのある剥片が素材となる。右側面の稜上に並ぶ連続した小剥離痕は素材石核から剥離される前の打面調整痕であり、加撃の際一部剥落し、主要剥離面を切る。89・90の母岩であるホルンフェルス2は35点出土しており、8-Aの西側、南北2.8m、東西3.8mの区間から28点、8-B・E・Fからはそれぞれ3点・3点・1点検出されている。

91はホルンフェルス3の8点からなり、91a～91cを第1工程、91d～91hを第2工程ととらえたが、8点の資料は約16mを隔てて8-A・Bに二分される。8-Aには91a・91c・91d・91fの4点が4mに散在し、8-Bには91b・91e・91g・91hが分布する。

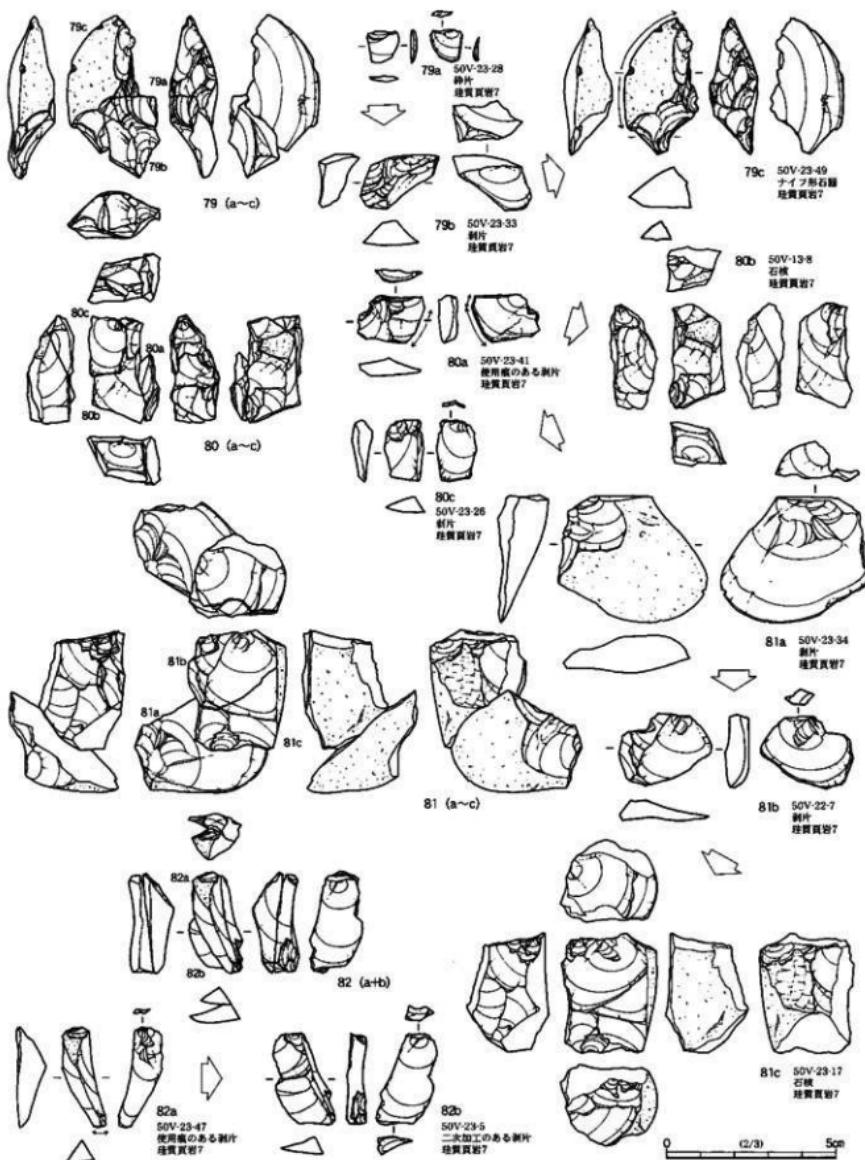
第1工程：91aは主要剥離面左上縁辺を二次加工がゆく抉り、弧を描く末端広縁辺には刃こぼれ状の欠落部分が所々看取される。38と同じく、縁辺を刃器として利用するために意図的に作出された剥片であろう。91aを剥離してから91bを作出するまでに、少なくとも2回、加撃する角度を変えている。91bの打面にあたる部分を剥がし、91bの前にも1片以上91bと同様の剥片が剥離されている。このうち、91aによって作出された作業面を打面にして91cを含む数片が剥離される。

第2工程：91d・91e・91f・91g+91hは頭部調整を介在させながら連続して剥離され、広い打点対縁を有している。8倍ルーペで観察したところいずれの縁辺にも微かな凹凸が認められたが、使用痕であるとの確証は得られなかった。91dは素材剥片の遠縁辺が主要剥離面側から加撃された石核である。加撃方法が小刻みで器形に沿って打点が移動していることから、剥片作出が目的ではなく、何らかの石器作成が意図されていたものと推測される。91の資料からは、約16mという2地点の距離が示す場としての差異・特徴は明確には感じられなかった。

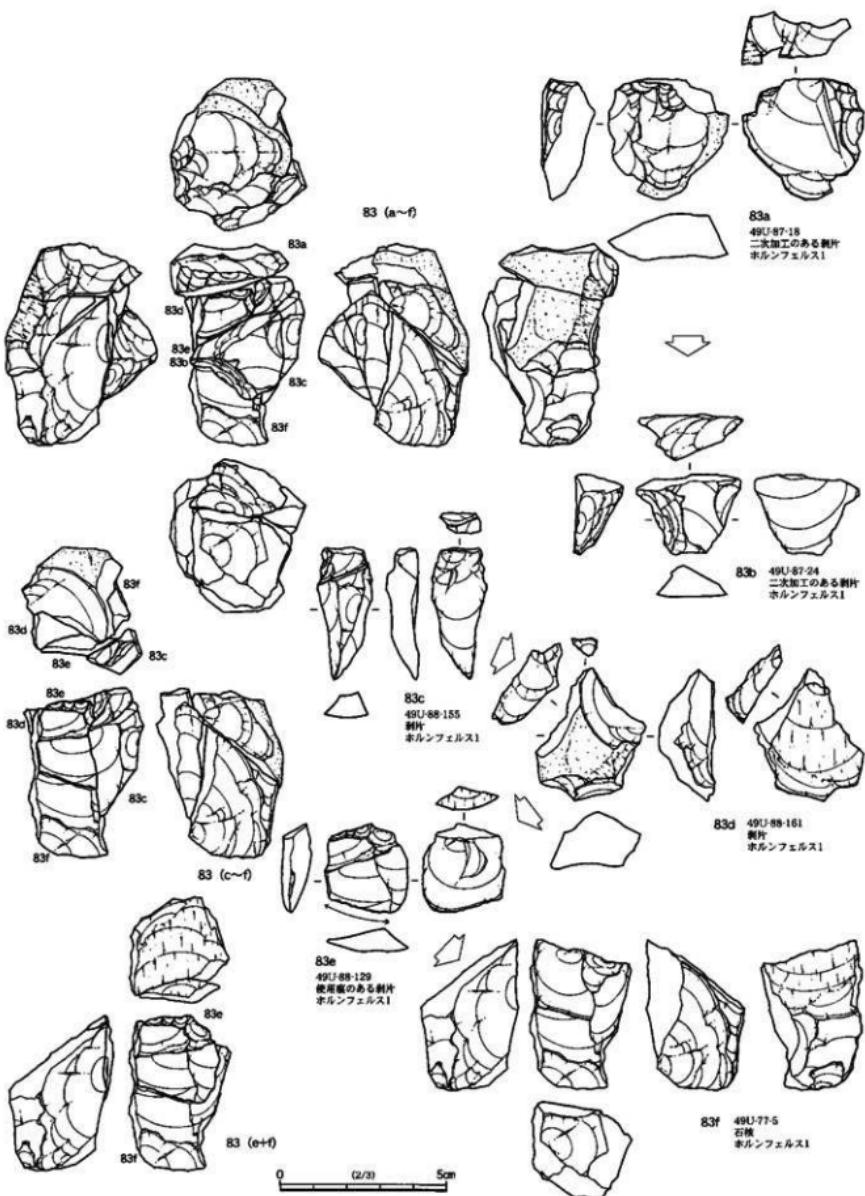
92は8-Dに分布する節理が発達したチャート10であり、剥片3点と石核1点の接合資料である。打面と作業面を入れ換ながら剥離作業が行われている。剥離された剥片の背面には頭部調整痕が残り、打面を整えた上で加撃されたことがうかがえる。



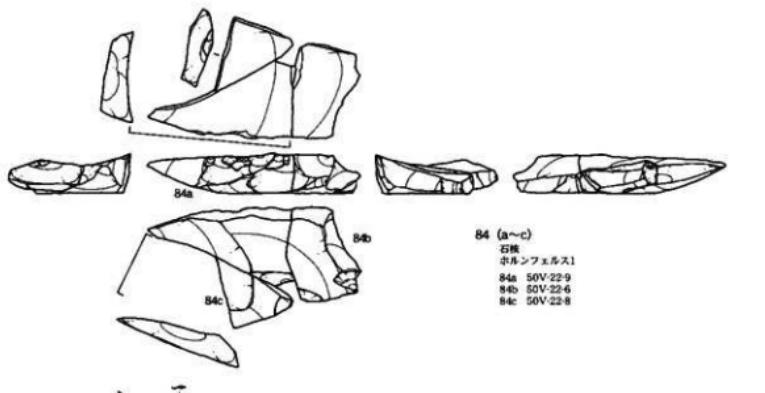
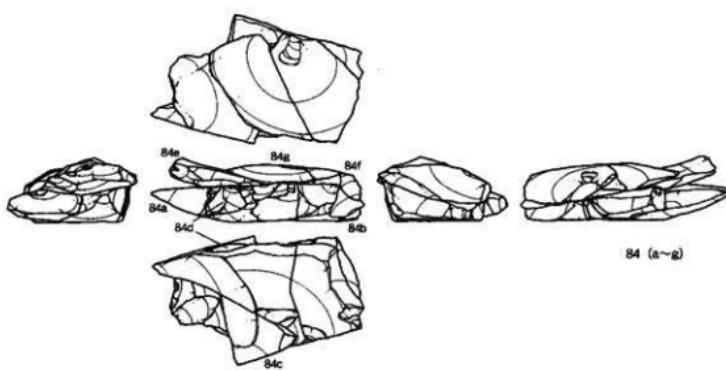
第53図 第4文化層第8ブロック出土石器 (14)



第54図 第4文化層第8ブロック出土石器 (15)

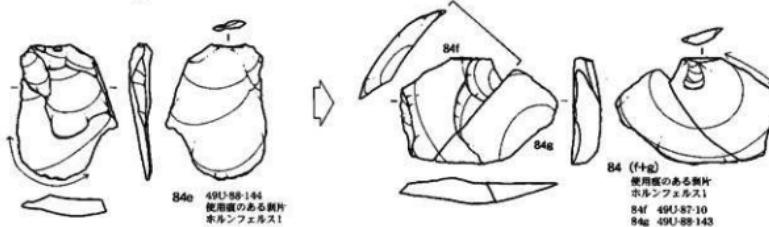


第55図 第4文化層第8ブロック出土石器 (16)

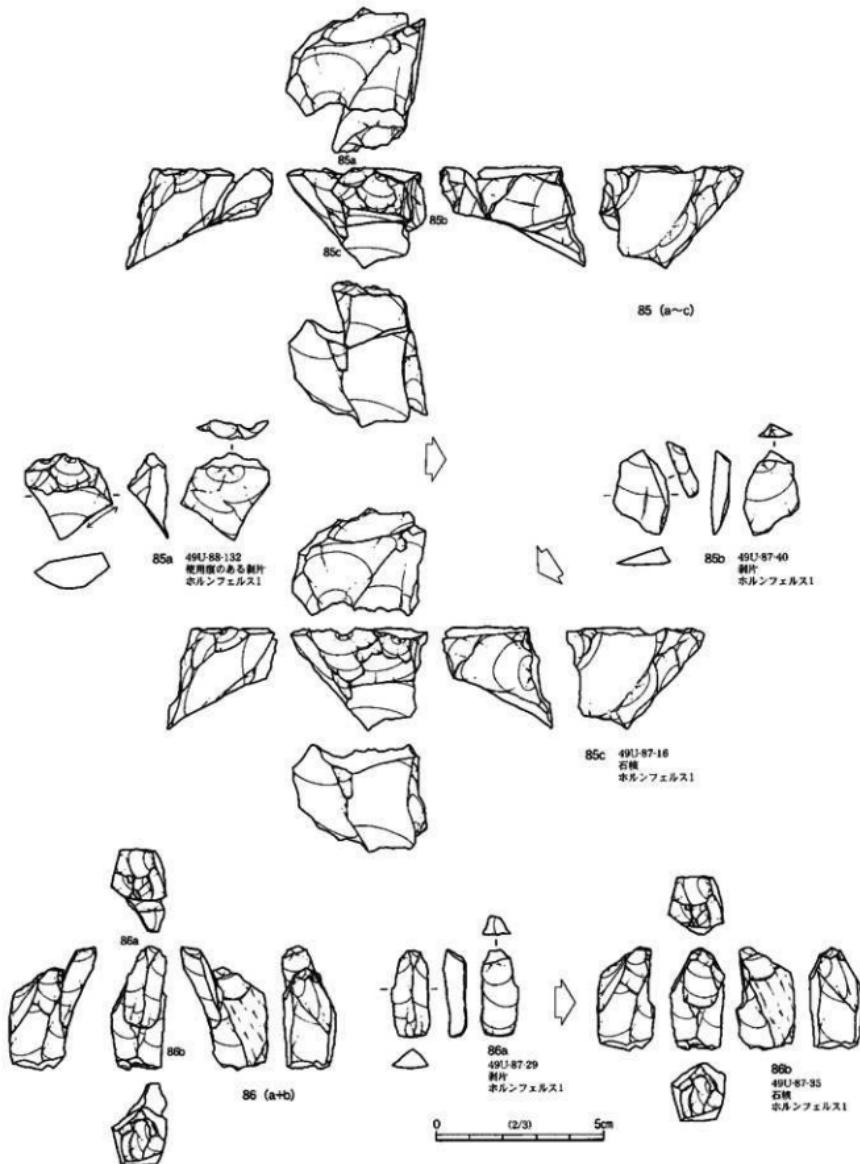


0 (2/3) 5cm

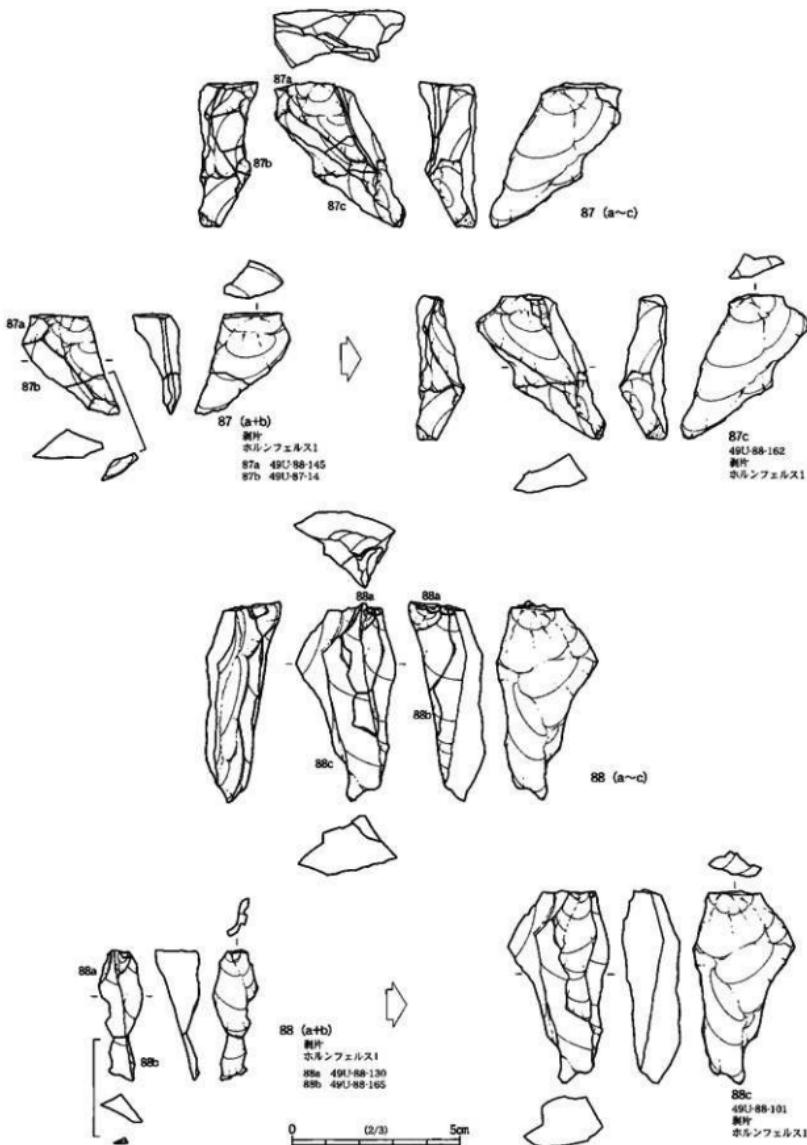
84d 50V-23-43
骨片
ホルンフェルス1



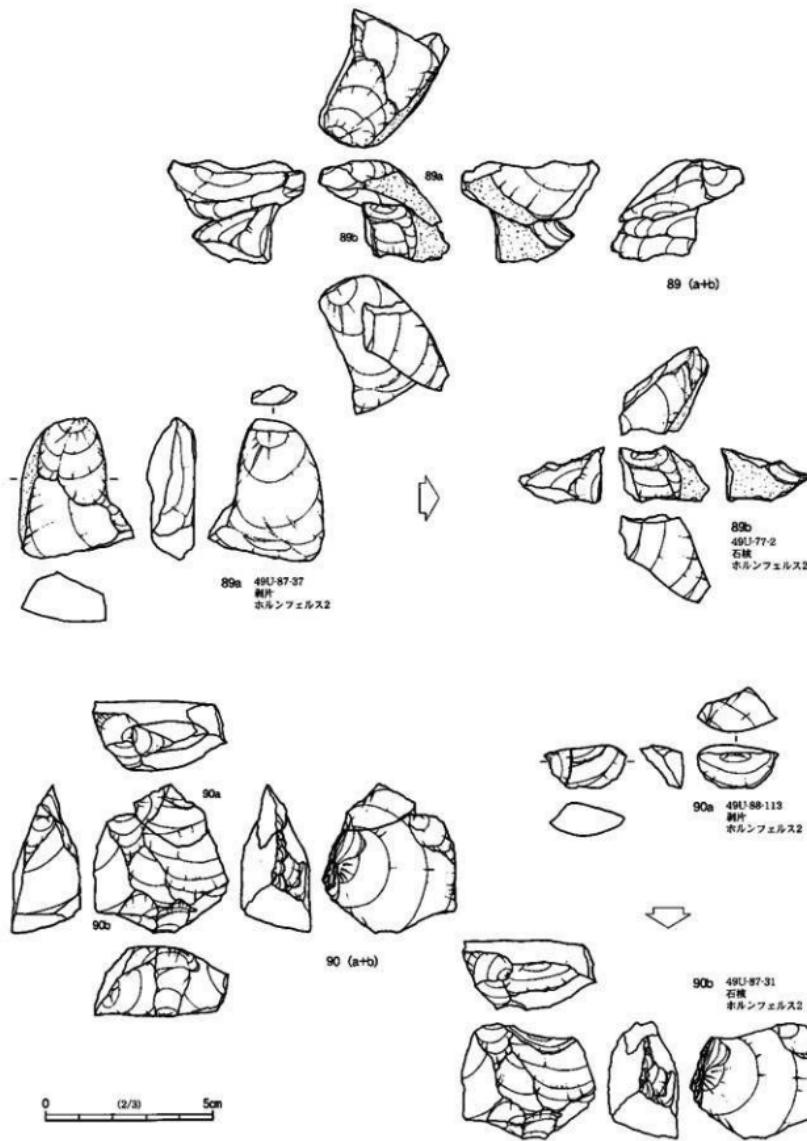
第56図 第4文化層第8ブロック出土石器 (17)



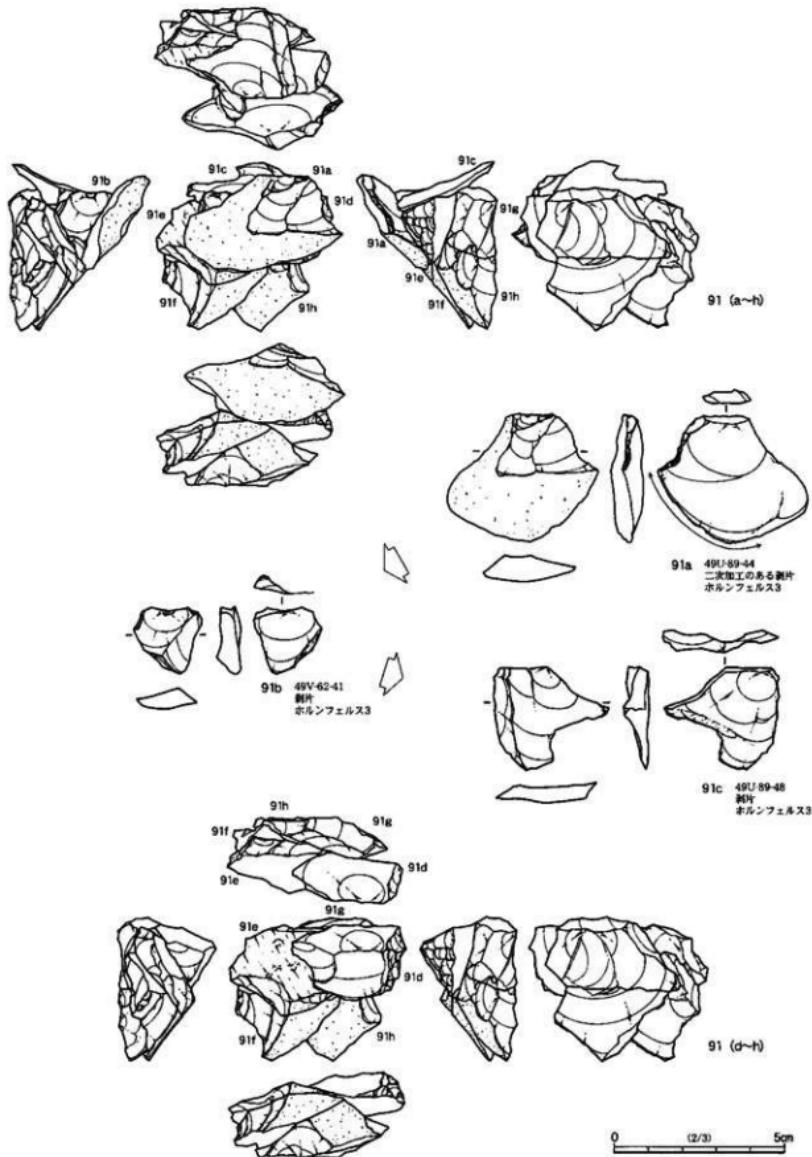
第57図 第4文化層第8ブロック出土石器 (18)



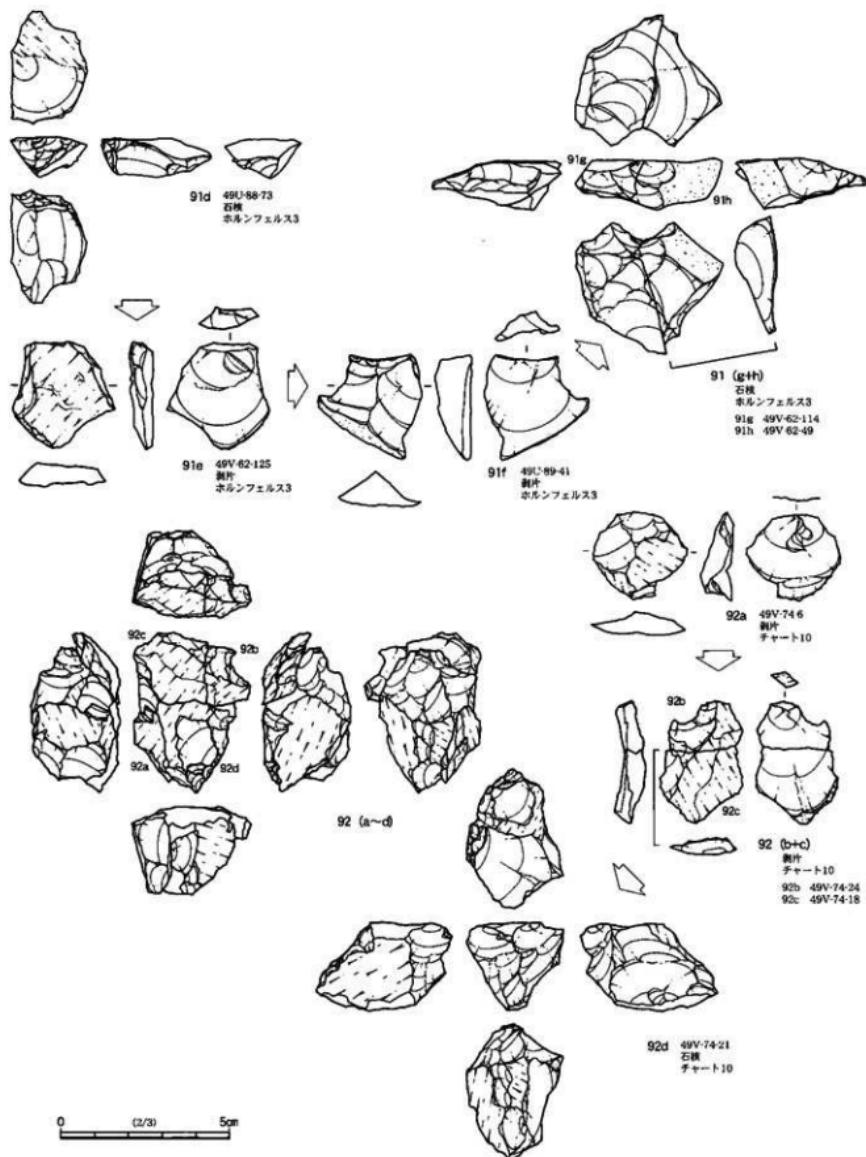
第58図 第4文化層第8ブロック出土石器 (19)



第59図 第4文化層第8ブロック出土石器 (20)



第60図 第4文化層第8ブロック出土石器 (21)



第61図 第4文化層第8ブロック出土石器 (22)

第6節 第5文化層

第5文化層はIII層に生活面を持つ。当遺跡では第9ブロックのみが該当した。

第9ブロック（第62～64図、第15表、図版3・19・20）

遺物分布状況

遺物は47V-87・97グリッドを中心とした直径20mほどの円形に分布する。遺跡(2)北東に位置し、標高17.5m～19.25m（標高差は1.5m強）で、北西から南東に向かい下降するため、北側と南側に分けて、土層図に投影した。南側の土層断面図には48V-18グリッドから出土した二次加工のある剥片（黒曜石2）のみが該当し、III層上面に分布する。調査時の断面観察地点を補正せずに掲載したため、西に向かって下降するような錯覚を見るが、北西に位置する47V-84グリッドと東南の48V-18グリッドでは直線距離にして21mを測り、1.5m強の標高差をもって東南に下降している。

器種組成はナイフ形石器1点、磨石1点、二次加工のある剥片2点、石核1点、剥片3点、礫片11点であり、全19点のうち半数以上が礫片である。

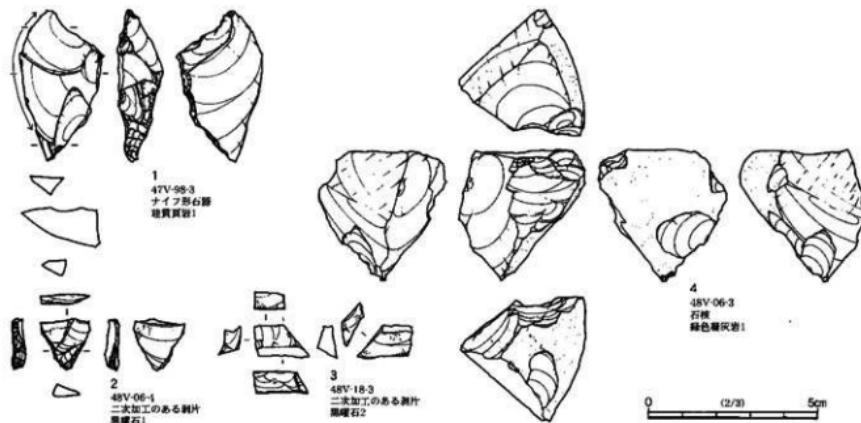
石器の出土レベルは17.141m～18.636m、高低差は1.495mである。

出土石器

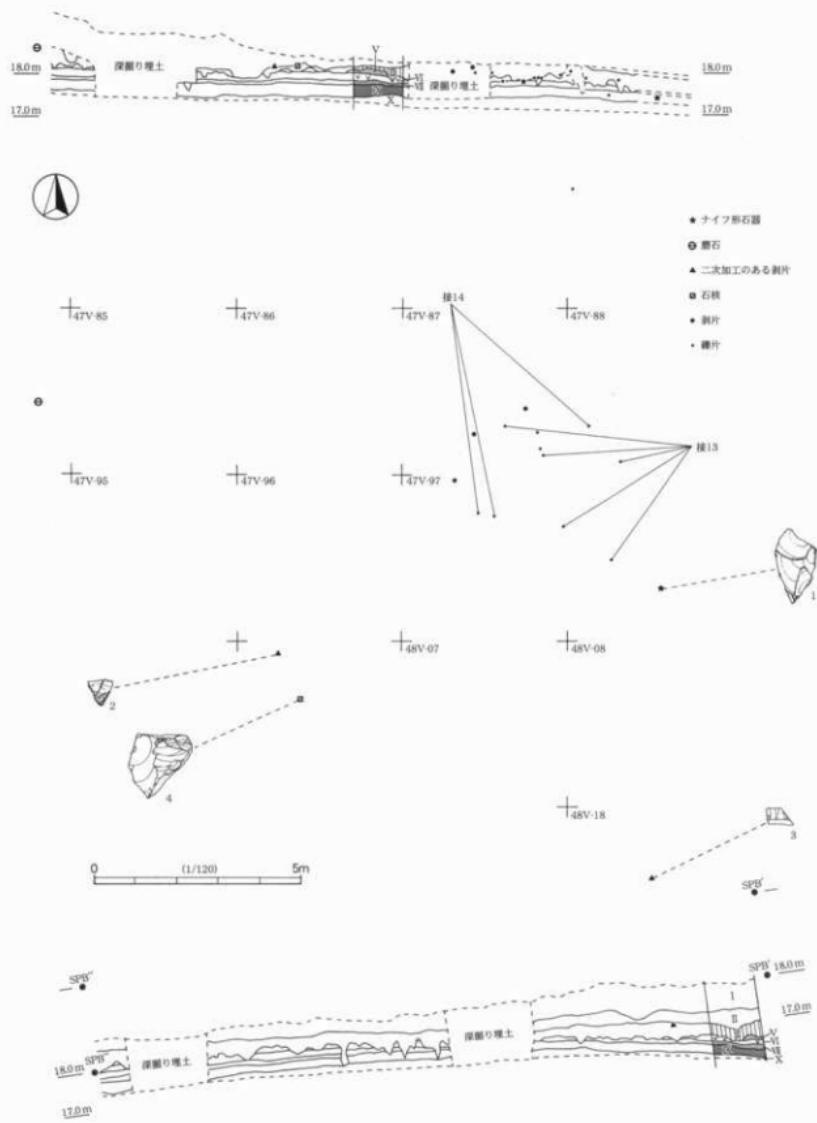
ナイフ形石器（1） 淡褐灰色～暗褐色の珪質頁岩1で、細粒で均質だが、光沢はない。右側面には背・腹両面から基部加工が施され、素材剥片広縁刃の刃部には使用による微細剥離痕が看取される。

二次加工のある剥片（2・3） 素材剥片の末端に尖端を意識した二次加工が施されており、上部は折れにより欠けている。右側縁下部は75°～80°、左側縁は90°～96°の急角度剥離である。3の上・左・右の三方は折れにより欠けている。主要剥離面と底面の作る稜上に小剥離痕が連なる。それぞれ、黒曜石1・2を母岩とする。

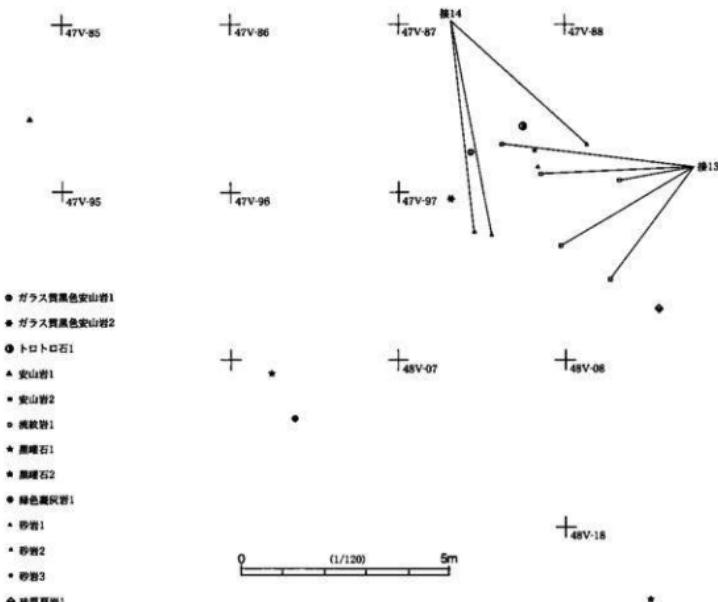
石核（4） 自然面は薄い肌色、剥離面は淡い灰緑色の綠色凝灰岩1の打面・作業面置換型石核である。



第62図 第5文化層第9ブロック出土石器



第63図 第5文化層第9ブロック器種別分布



第64図 第5文化層第9ブロック母岩別分布

第15表 第5文化層第9ブロック組成表

母岩名 / 組種	ナイフ形石器	磨石	二次加工のある 剝片	石核	剝片	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	0	0	0	1	0	1	5.26%	16.10	3.62%
ガラス質黒色安山岩2	0	0	0	0	1	0	1	5.26%	10.89	2.45%
トトロ石1	0	0	0	0	1	0	1	5.26%	2.67	0.60%
安山岩1	0	1	0	0	0	0	1	5.26%	111.83	25.12%
安山岩2	0	0	0	0	0	1	1	5.26%	8.04	1.81%
流紋岩1	0	0	0	0	0	5	5	26.32%	120.61	27.09%
黒曜石1	0	0	1	0	0	0	1	5.26%	0.11	0.02%
黒曜石2	0	0	1	0	0	0	1	5.26%	0.96	0.22%
緑色凝灰岩1	0	0	0	1	0	0	1	5.26%	41.48	9.32%
砂岩1	0	0	0	0	0	3	3	15.79%	115.97	26.05%
砂岩2	0	0	0	0	0	1	1	5.26%	4.89	1.10%
砂岩3	0	0	0	0	0	1	1	5.26%	2.09	0.47%
建質頁岩1	1	0	0	0	0	0	1	5.26%	9.62	2.16%
合計	1	1	2	1	3	11	19	100.00%	445.26	100.00%

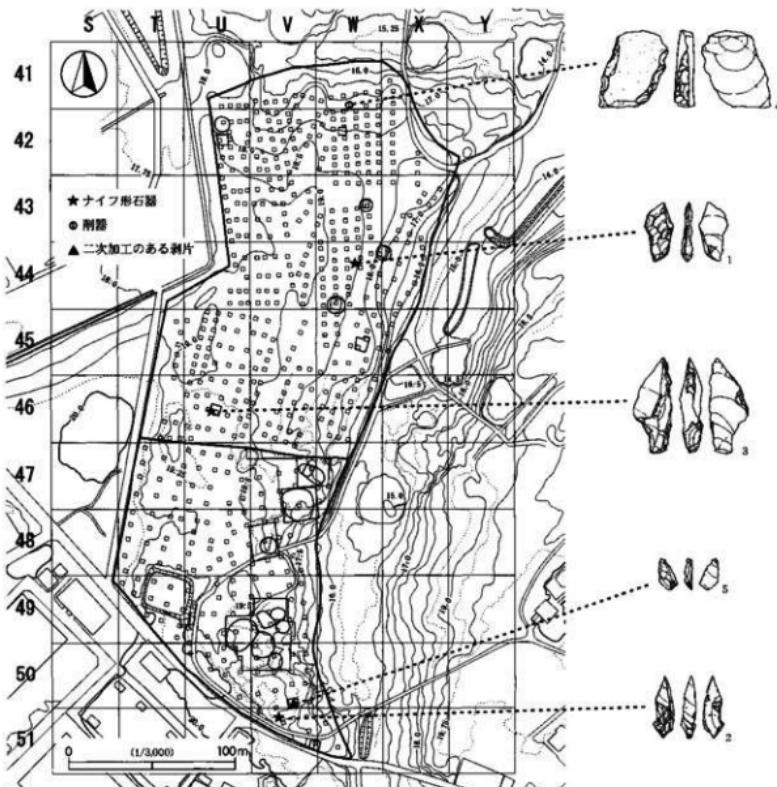
第7節 単独出土石器（第65・66図、図版21）

旧石器時代の遺物のうち、ブロック外及び単独で出土した石器である。全10点を数えたが、ここでは出土位置が不明のものや自然礫などを省いたナイフ形石器3点、削器1点、二次加工のある剥片1点の計5点を図化した。

1・2、4・5の4点はブロックの立地する台地の縁、標高17m～18.5mから出土しているのに対し、3は遺跡範囲の中央部付近（標高19m）から検出された。

出土石器

ナイフ形石器（1～3） 1は極微細粒の斑晶を持つガラス質黒色安山岩製である。左側縁基部はゆるやかに抉れ、対する右側縁基部は小剥離による刃潰しの後のグラインディングにより直線状に整えられる。



第65図 単独出土石器分布

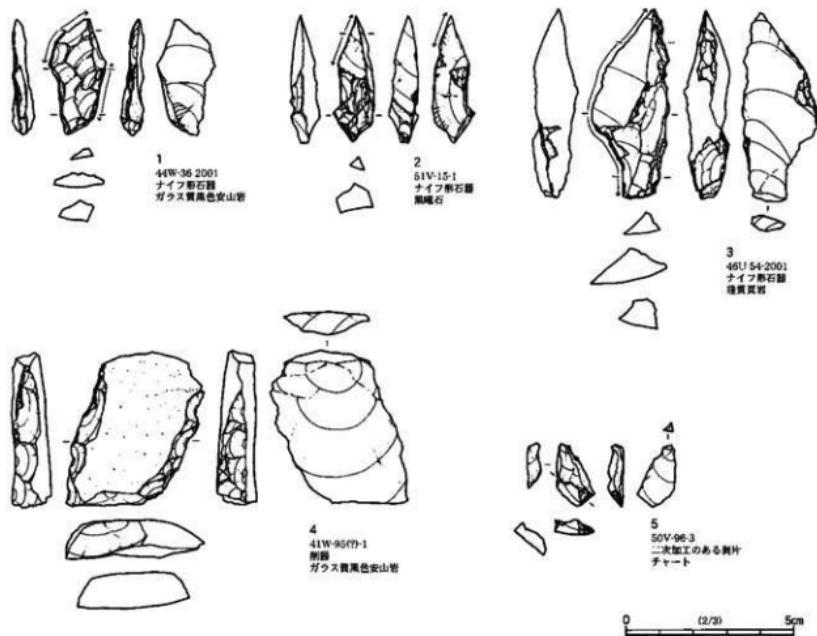
刃部に刃こぼれ状の使用痕が看取される。

2は漆黒・不透明で、直径1.5mm～2.5mm程の夾雜物を含む黒曜石製である。横打の剥片であり、広縁刃の一端を刃部に、対端を基部に据えている。刃部の断面は三角形状であり、二稜に刃こぼれ痕が看取される。

3は灰白色～淡灰色で、層状の淡黄色部分が混じる珪質頁岩である。油脂様の微光沢を放つ。器長の3分の2ほどの長い刃部を持ち、刃部下の基部は抉れる。素材剥片の広縁部を刃部、打面付近を基部加工し、素材時の打面は一部残される。背面中央部中高部分は石核時の棲上調整痕が残る。

削器（4）早い段階で剥離されたガラス質黑色安山岩製剥片を素材に用いている。両側縁が腹面側から加工され、エッジの角度は78°～88°を測る。

二次加工のある剥片（5）黒灰色で黒縞の入ったチャートが素材である。末端の剥離痕の角度は73°～86°であり、堅のように直線的な刃部を作出している。出土時の所見ではVII～IX層に帰属するとの記載事項があった。



第66図 単独出土石器

旧石器属性表の見方

属性表の記載事項は以下の通りである。

挿図番号 実測図として掲載した遺物の番号であり、写真図版の番号とも一致する。ブロックごとに1から順につけた。

打面 Cは自然面、Pは点状打面、Lは線状打面、1は平坦剥離、2以上は複剥離打面で、-は欠損等による打面なし・計測不可を示す。

打角・剥離角

打角は剥片の打面とポジティブバルブが作る角度、剥離角は石核の打面とネガティブバルブが作る角度。

背面構成 素材の情報が失われている石器に関しては記載しないが、背面構成のわかるものに関しては観察される範囲で記入した。Hは主要剥離面と同一方向、Tは主要剥離面と逆方向、Rは右方向、Lは左方向、Dは背面方向、Vは腹面方向からの加撃による剥離、Cは自然面、Jは節理面。

末端形状 Fは直線状、Hは蝶番状、Sは階段状、Oは石核の内側に力が向かったためにアーチ状またはL状になったもの。

調整角 削器の刃部、ナイフ形石器の刃溝などの調整剥離角。

刃部角 主にナイフ形石器の刃部の角度。

使用痕 Nは刃こぼれ、Hは被熱痕、Sは敲打痕。

欠損 定形的な石器で、欠損部分のあるものを+で表した。

遺存部位 折れたあとに残存している部位。背面側から見た部位を表す。

H：頭部

T：尾部

L：背面側から見て左部

R：背面側から見て右部

中間部の表し方

V-M：垂直方向の中間部

H-M：水平方向の中間部

以下、アルファベットの組み合わせによって遺存部位を示す。

LH：左頭部

RH：右頭部

LM：左中間部

RM：右中間部

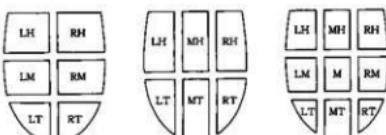
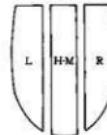
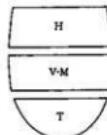
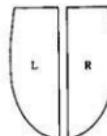
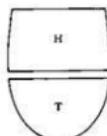
LT：左尾部

RT：右尾部

MH：中央頭部

MT：中央尾部

M：9分割された中間部



第67図 折れによる遺存部位の表示

第16表 旧石器属性表

第3章 繩文時代以降

第1節 遺構

溜井台遺跡では上層遺構の分布はきわめて稀薄であり、繩文時代の陥穴4基、土坑1基が検出された全てである。遺構分布図は第71図に示した。このうち上層確認調査での検出は陥穴2基のみで、のこる3基は下層本調査拡張時に発見された。小規模な遺構であるため、上層確認調査のトレンチと重複せず未調査のまま終了したものもあることが予想されるが、遺構密度からみればそれほど多くの遺構を見落としてしまったとは考えにくい。なお、50V-20~30グリッドを中心に繩文時代前期の土器がまとまって出土した地点があり「繩文土器集中地点」として調査したが、掘り込み等は確認されず分布密度もそれほど濃密ではない。遺物も若干の接合関係が認められるものの微小な破片が多く、図示しうるものもわずかであることから、遺構としては取り扱わず、目立った遺物のみを遺物の項で報告することにする。

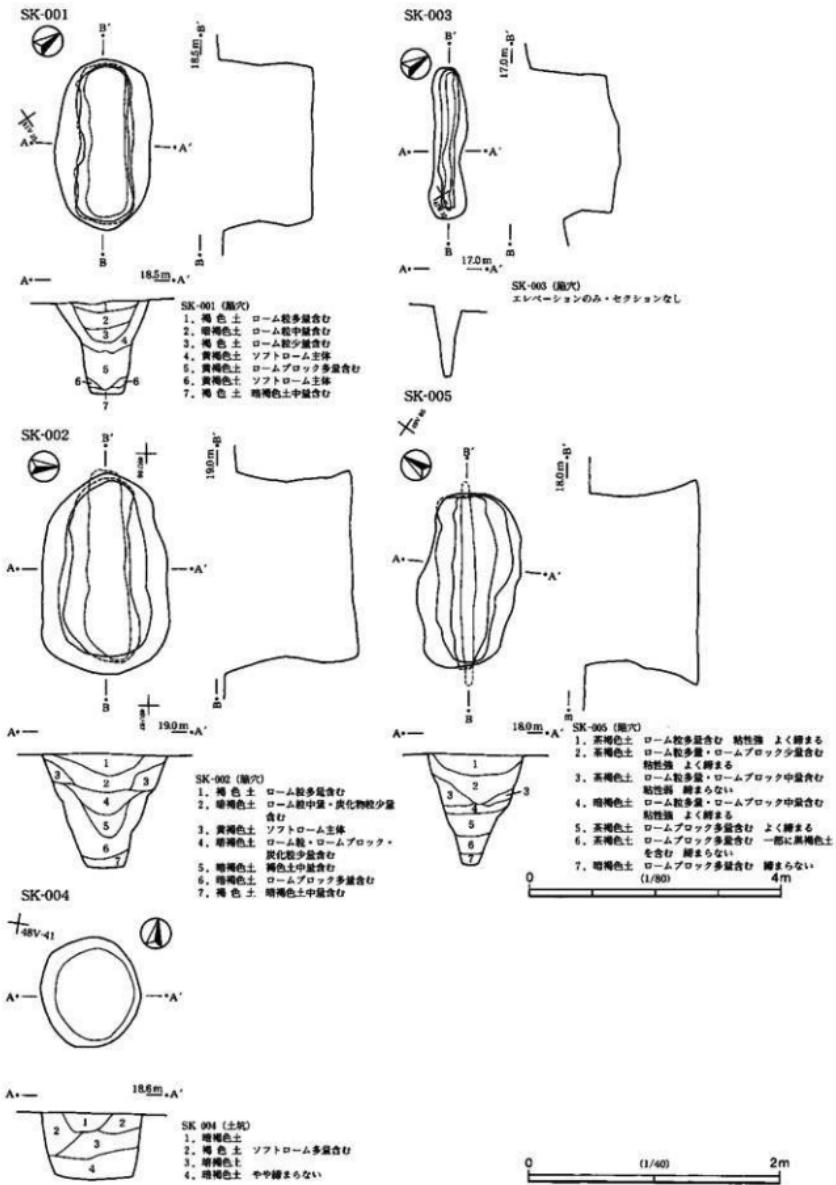
1. 陥穴(第68・71図)

SK-001 平成15年度の上層確認調査で、51V-15グリッドを中心に検出された。長径2.72m、短径1.52mの楕円形を呈し、主軸方向はN-65°-W、深さは1.50mを測る。底面は長径2.40m、短径58cmの長楕円形を呈する。深さ70cmほどに傾斜変換に伴う稜を有し、長軸方向では底面から40cmほど上方でオーバーハングしている。覆土は上部がローム粒をやや多く含む暗褐色土、下部がソフトローム主体の黄褐色土で、最下部には開口時に堆積したと思われる粘性の強い褐色土が認められる。遺物は出土していない。

SK-002 平成15年度の上層確認調査で検出、49U-86グリッドを中心に掘り込まれている。長径3.22m、短径2.04mの楕円形を呈し、主軸方向はほぼ東西で、深さは2.10mとかなり深い。底面は長径3.10m、短径56cm~72cmの不整長楕円形を呈する。深さ76cm付近と1.24m付近に不明瞭ながら傾斜変換に伴う稜があり、長軸方向の東側ではほぼ垂直に掘り込まれるが、西側では20cm~30cmほどオーバーハングしている。セクション図から、埋没過程に4~6層と1~3層の2段階が想定される。7層は開口時の堆積層であろう。炭化物粒を含む2層と4層は、陥穴としては珍しい例といえよう。遺物は出土していない。

SK-003 平成16年度の下層本調査中に47W-21グリッドを中心に検出された。遺跡東側の谷津に面する緩斜面に掘り込まれている。長径2.41m、短径53cm、底面で幅約15cmと狭小になり、いわゆるTピットの形態をなす。主軸方向はN-59°-Wを測る。底面は中央部付近が深く両端がやや浅くなっている、最深部で約1.2m、最浅部で約80cm掘り込まれる。覆土の状況は不明である。遺物は出土していない。

SK-005 平成17年度の下層本調査中に検出、49V-84グリッドに位置する。長径2.75m、短径1.53mの不整楕円形を呈し、主軸方向はN-54°-E、深さは1.84mと深い。底面は幅約20mと狭小で、長軸方向では北東側で約20cm、南西側で約30cmと大きくオーバーハングしている。SK-002と同様2段階の埋没過程が想定され、遺構の肩の部分が崩落するためか、新しい埋没段階の初期にはロームブロックを多く含む土層が堆積するようである。7層は開口時の堆積層であろう。遺物は出土していない。



第68図 繩文時代遺構

2. 土 坑 (第68・71図)

SK-004 平成16年度の下層本調査中に48V-41グリッドで検出された。平面形は径80cmほどの略円形を呈し、約50cmの深さにほぼ垂直に掘り込まれる。覆土は自然埋没を思わせる堆積である。出土遺物はないが、周辺から縄文時代前期の黒浜式土器がやや多く出土しているため、同時期の可能性が指摘される。

第2節 遺 物

1. 縄文土器 (第69・70図、図版22・23)

瀬井台遺跡では、散漫ながら縄文時代早期から後期にかけての各型式の土器が出土している。

1と2は早期撚糸文系土器である。1は口縁部外面がやや肥厚し、肥厚部と胴部にはわずかな無文部を介して単節縄文RLが縱走する。井草II式である。2は胴部の小破片で、間隔の狭い撚糸文Rが縱走する。撚糸文の施文には深浅があり、遺存部に限っていえば4条が深くはっきりしている。夏島式である。

3～6は早期条痕文系土器である。3は口縁部直下に2条の細隆線が横走し、その間に無文、上位は絡条体圧痕文、下位は半截竹管による平行沈線文が密に施されている。口縁部からは細隆線による懸垂文が垂下し、上方では口唇上まで延びて小突起を形成する。細隆線の上面には絡条体圧痕文が重複している。内面にはアナダラ属の貝殻復縁による貝殻条痕文が右下がり斜位に施される。胎土中には石英をはじめとする粗砂粒を大量に含み、植物纖維の含有量は少ない。子母口式終末から野島式初頭にかけての時期に比定されよう⁽¹⁾。4～6は外面に貝殻条痕文が施されている。貝殻条痕文は内外面ともに施されるのが一般的であるが、3点とも内面は無文である。胎土中には大量の植物纖維を含み、器壁はもろい。3とは明らかに異なった特徴を示しており、より新しい段階になろう。

7～9には前期前半の黒浜式と思われる資料を示した。いずれも胎土中には植物纖維を混入し、焼成はあまりよくない。7はわずかに外反しながら立ちあがる口縁部破片で、口唇から外面にかけては丁寧にナデられる。外面には条の幅のせまい無節縄文しが縦回転施文される。8は付加条縄文の施された胴部破片である。単節縄文LRに反対方向に撚糸文Lを2条付加し、縦回転施文される。9は無文の胴部破片であるが、筆先状のものによってついたと思われる圧痕が観察できる。

10～16は前期後半の浮島式である。10～13は同一個体の口縁部から胴部中位にかけての破片で、外面の輪積み部分を文様として残し、各段に対応させて鋸歯状の貝殻文を施している。胎土中には砂粒をやや多く含み、内面の調整はあまり丁寧ではない。施文具はハマグリのようななめらかな復縁を持つ貝殻で、貝殻の外側を右、内側を左にして右回りに施文している。14と15も同一個体である。調整や胎土の特徴は10～13とよく似ているが、色調的には赤みが強い。施文具には10～13と同じくなめらかな復縁を持つ貝殻が使われているが、その方向と施文方向は逆になる。16も貝殻文の施された浮島式である。貝殻の方向と施文方向は10～13と同様であるが、使用される貝殻はアナダラ属のものである。

17～20は諸磯式と判断される資料である。17は外反しながら大きく開く口縁部であるが、口唇部は欠損する。破片下部に浮線文状の細隆線が平行に3条横走し、その上面には単節縄文RLが横回転施文される。諸磯b式と思われる。18と19は、胎土や色調、焼成などの特徴から前期後半であると判断したものである。18は開きながら立ちあがる口縁部破片で、外面には半截竹管による平行沈線が斜位に施されている。一見するとランダムな施文のように見えるが、斜格子状になるかもしれない。19は幅の広い断面方形の沈線によって文様が描かれているが、全体の構成はわからない。20は同一個体の破片2点を合成して図示したが、

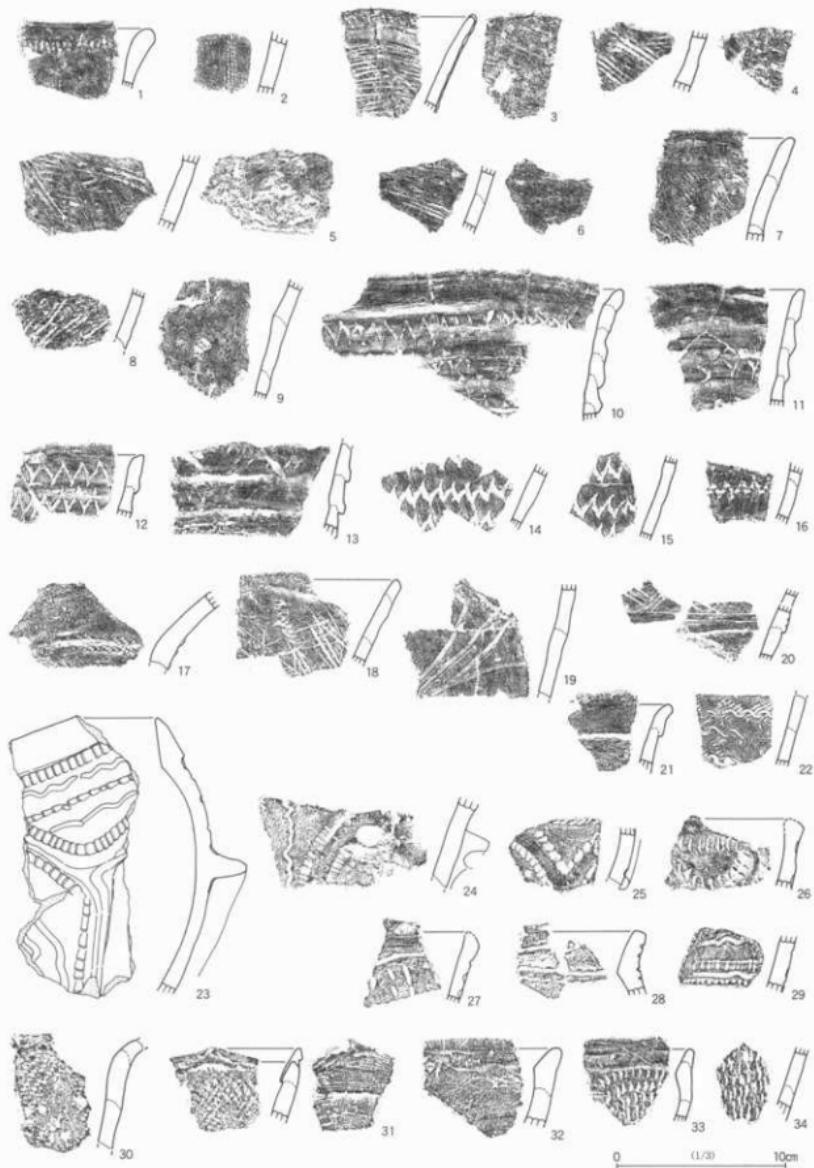
接合はしない。輪積み部分を折り返し状に残し、その上位に半截竹管による平行細沈線を廻らせ、さらに上位には2~3条の平行細沈線による鋸歯状ないし幾何学文状のモチーフが配される。

21と22は前期末と思われる資料である。21は折り返し口縁の破片である。文様が認められないため確実ではないが、胎土の特徴から前期末に属するものと判断した。22は無節繩文しをZ字状結節に自縛した原体を横回転施文している。結節文が横位であることから、これも前期末に属すると判断される。

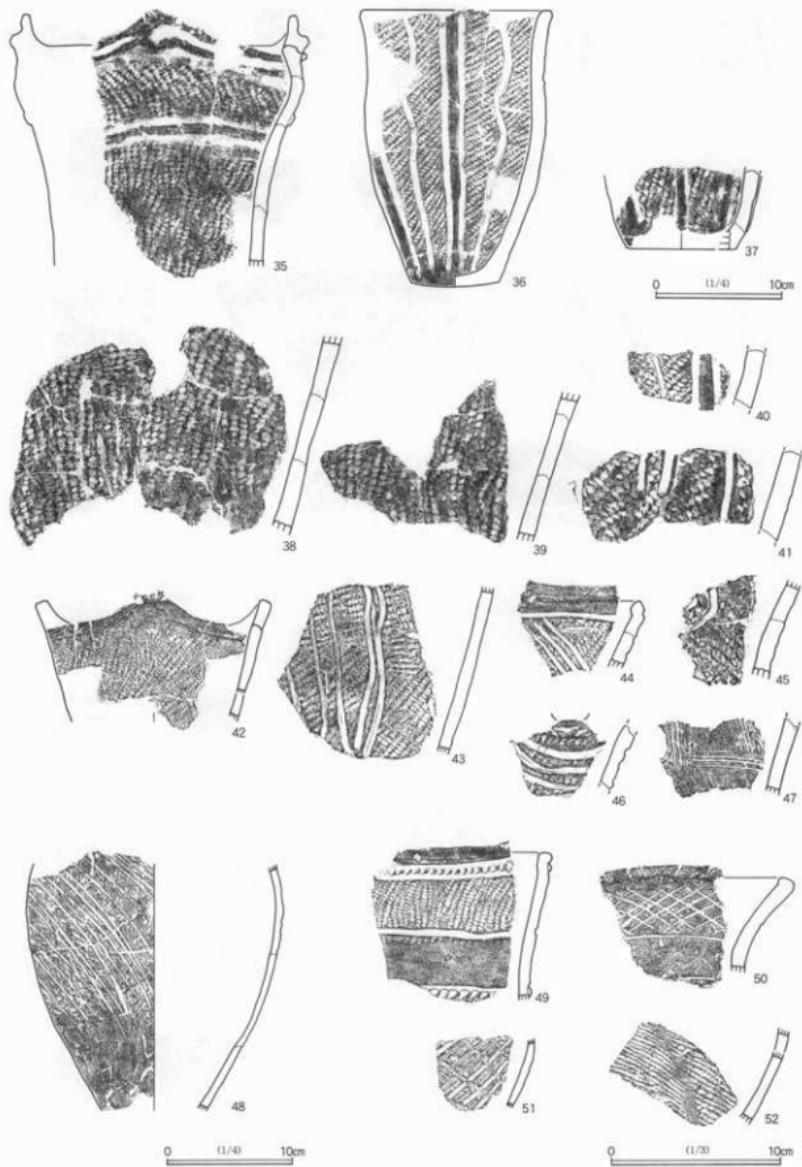
23~29は中期前半の阿玉台式土器である。23は大波状口縁を呈する深鉢で、口縁部文様帶には隆線による区画文が配され、区画の下端からは隆線が派生して懸垂文となっている。隆線の脇には幅の広い角張った施文具の連続押捺による角押文が付随するのを基本とするが、懸垂文部分をみると左側にはやや幅のせまい結節沈線文が沿い、右側には文様は観察できない。口縁部区画文内や懸垂文脇の空白部には結節沈線や小波状に引かれた沈線が充填される。阿玉台III式であろう。24は胸部中位の破片で、環状の小突起から両脇に角押文を伴う隆線が派生している。この隆線は懸垂文となるか、あるいは突起と併せて抽象文を構成するかのいずれかであろう。隆線左側の空白部には継位の小波状沈線が充填されている。これも阿玉台III式と思われる。25は口縁部直下と思われ、両脇に1条の結節沈線を伴う隆線がV字形に遺存し、破片上端にも結節沈線が観察できる。口縁部文様帶の区画文の一部であろう。26も口縁部区画文部分の破片で、区画文を構成する隆線の内側には幅の広い爪形文が付隨している。23~25よりも古い段階の特徴を示している。27も口縁部区画文部分の破片であるが、隆線に付隨するのは沈線であり、区画文内には結節沈線が疊に充填されている。28は「く」の字形に外折する口縁部破片である。外面には半截竹管による平行結節沈線が2単位4条横走している。浅鉢形土器である可能性が高い。阿玉台II式であろう。29は胸部破片で、角押文と小波状沈線が横位に交互に配されている。

30~34は中期中葉の、いわゆる中峰式の時期に属すると判断される資料である。30は頸部で「く」の字状に外折し、口縁部が大きくラッパ状に開く器形を呈する深鉢形土器の頸部破片である。外面には单節繩文RLが縦回転施文される。31は口縁部に幅のせまい無文帯を持ち、胸部には单節繩文RLが施文されている。無文帯と連続して小突起が設けられて小波状口縁となり、内面は折り返し状になっている。折り返しに伴って形成された肥厚部には横方向のナデ調整の痕跡が顯著である。32は厚手の深鉢形土器の口縁部破片である。文様は認められない。33と34は同一個体である。口縁部外面は輪積み部分でわずかに折り返し状になり、その上位は無文帯、下位には小形の爪形文を密に充填している。32~34は、胎土の特徴と口縁部の断面形態から当該期であると判断した。

35~41は中期加曾利E式土器である。35はいわゆるキャリバー形土器である。口縁部は4単位の波状をなし、波頂部には渦巻文の祖形ともいえる小突起を設け、そこから派生した沈線が次の波頂部までの口唇部を走っている。口縁部文様帶と胸部文様帶は断面カマボコ形のやや幅の広い隆線で画され、单節繩文RLが口縁部では横回転、胸部では縦回転で施文される。懸垂文等は施されない。加曾利E I式であろう。なお、38と39は同一個体の胸部破片である。36はキャリバー形土器の口縁部文様帶が省略された形態を呈する。磨消懸垂文と蛇行沈線による懸垂文が交互に8単位施されている。地文は縦回転施文された单節繩文RLであるが、直前段異東の原体を使用している。加曾利E III式であろう。40は同一個体の胸部破片と思われる。37はキャリバー形土器の底部破片である。地文には单節繩文RLが縦回転施文され、断面カマボコ形の隆線による懸垂文が8単位垂下する。加曾利E I式であろう。41は胴下部の破片である。2条の平行沈線による懸垂文の下端であるが、沈線間は磨消されない。これも加曾利E I式と思われる。



第69図 遺構外出土縄文土器（1）



第70図 遺構外出土繩文土器（2）

42～47は後期前半の堀之内式土器を示した。42は堀之内1式に特徴的な波状口縁深鉢の口縁部破片である。調整は丁寧であるが、文様は単節繩文LRが横回転施文されるのみである。43～46は堀之内1式の深鉢形土器である。43は横回転施文された単節繩文LRを地文に、2条1単位の平行沈線による懸垂文が配されるが、施文は難である。44は口縁部破片である。横走する1条の沈線によって幅のせまい無文帯を作出し、胴部には横回転施文の単節繩文LRを地文に3条の平行沈線による文様が観察できる。45は43と類似するが、平行沈線が蛇行ないし渦巻状になると思われる点と地文が単節繩文RLである点で異なる。46は波状口縁深鉢の波頂部直下の破片と思われる。破片上部中央には円孔と思われる痕跡が認められ、それを囲むように3条の沈線が同心円状に配されている。地文は単節繩文LRである。47は先端が4本の櫛齒状施文具によって方形区画状の文様を描いている。地文は認められない。堀之内2式であろう。

48～52は後期加曾利B式である。48は加曾利B式期の粗製深鉢形土器である。擦りの緩い単節繩文LRを疎に施し、上から右下がり斜位の条線を重ねている。49はいわゆる瓢形土器である。頸部括れ部より上方の破片で、口縁部直下と頸部括れ部に平行沈線間に刻みを加えた刻文帯が廻る。両刻文帯のちょうど中间には沈線が1条横走し、その下位は無文帯、上位は単節繩文LRが横回転施文された繩文帯となっている。加曾利B3式から曾谷式にかけての資料である。50は外反しながらラッパ状に開く口縁部破片である。破片下部には横走する2条の沈線にはさまれた無文帯があり、その上方は沈線による斜格子目状の文様帯となっている。口縁部内面はわずかに肥厚する。加曾利B3式と思われる。51と52は当該期の粗製土器の胴部破片である。51は先端がふたつに割れた施文具によって2条の沈線が平行に接するように左下がり斜位に密に施文し、そのうえから右下がり斜位に条線状の沈線を疎に重ねて、全体では不整な斜格子目状の文様を描出している。52は無節繩文Lが縦回転施文されるのみである。どちらも胎土は緻密で器壁は薄く、内面の調整・焼成とも良好である。

註

- (1) 小笠原永隆 2002 「千葉ニュータウン周辺における繩紋時代早期中葉の土器資料—子母口式及びその前後型式を中心として—」『研究連絡誌』第63号 (財)千葉県文化財センター

2. 繩文時代石器 (第71・72図、図版21)

出土石器

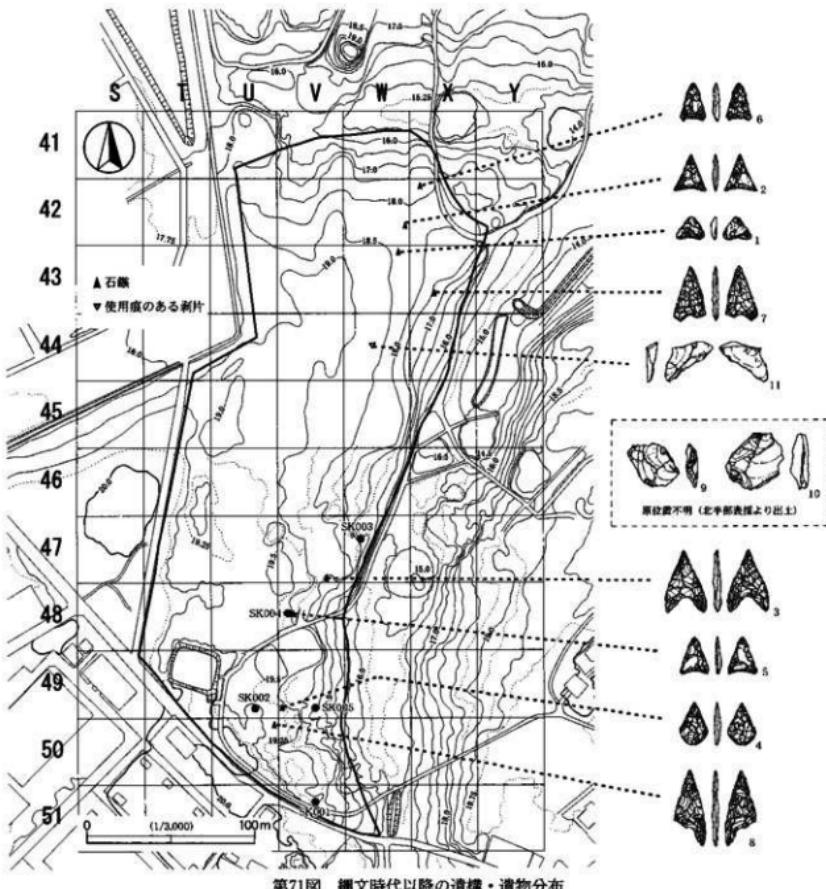
1～5は石鎌(完形)である。1は両面に自然面が残る。ただし裏面は剥離面が風化した面であり、原石取得と石鎌製作との間に時間差が生じたものである。成形及び整形は粗い。2は半透明で薄い緑白色のチャートである。二等辺三角形の整美な平基鎌である。3は白色透明の基地に黒色部分が入り交じったチャートである。左右対称の完形で、基部の抉りの深い凹基である。4は暗灰色のチャートで、ティアドロップ形である。半円弧を描く基部に左右対称の側縁と鋭い尖端を持つ。正面中央部に素材時の主要剥離面がわずかに残る。5は器厚の薄さからか、半透明の灰色を呈すチャートである。裏面に素材剥片時の主要剥離面が残る。2と同型である。

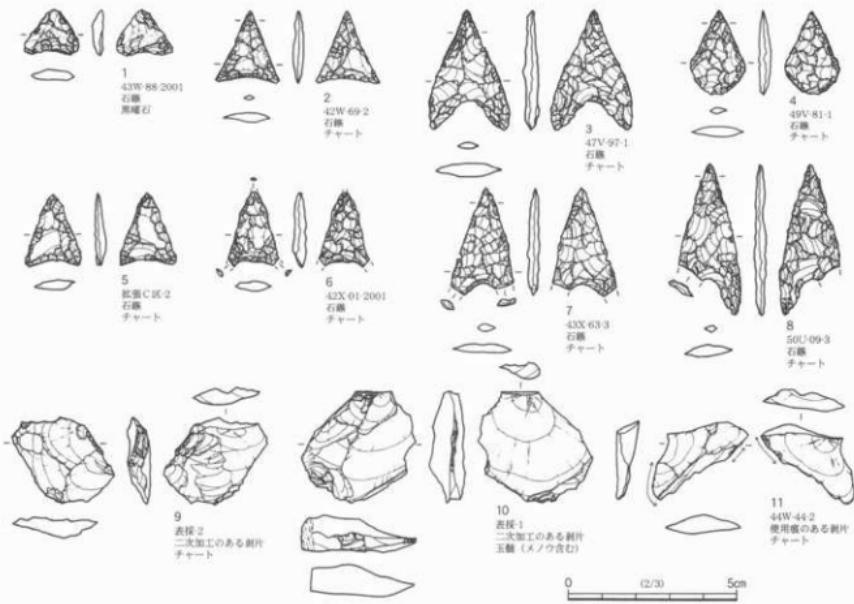
6～8は石鎌(欠損)である。6は濃灰色のチャートで、両脚部と尖端が折れにより失われている。7の両脚部は欠損しているが、完形を推定すると縦対横比はほぼ2対1である。8は黒色で白い筋の入るチャートである。縦に長いスマートな形状で、縦対横比は9対4である。左脚部は欠損しており、尖端部

の断面形状は菱形を呈す。裏面中央部に稜を集めて、肉厚な尖端を作出している。

9・10は二次加工のある剥片である。9は灰白色～灰色のチャートで、石鐵の素材剥片と推定される。10は赤玉石と呼ばれる玉髓で、棒状の素材を輪切りにするように、規格的に剥離された剥片のうちの1片か、もしくは器面調整のための剥片と思われる。同一母岩は出土しない。底面と側面の別は明確ではない。

11は使用痕のある剥片で、石材はチャートである。左側縁下部及び右上縁部に使用痕が看取される。

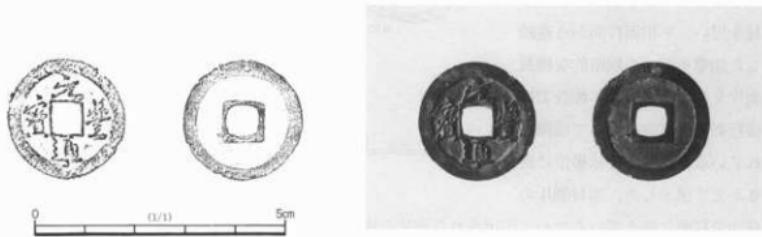




第72図 遺構外出土縄文時代石器

3. 中世錢貨

47Vグリッドより、北宋錢である「元豐通寶」が1点出土した。径24.2mm、厚さ1.2mm、重量は3.1gを測る。初鋤年は1078年、書体は行書である。



第73図 遺構外出土中世錢貨

4. 近世陶磁器

トレンチ内や表土中より、近世の所産と思われる青磁や白磁、染付といった磁器片、陶器の破片等が数点出土しているが、いずれも小片で図示に耐えるものはない。出土の事実を記載するにとどめる。

第4章 まとめ

旧石器時代

柏北部中央地区の西端に位置する本遺跡は、地金堀と大井川の開析谷に挟まれた標高16m～20mの台地上に立地し、旧石器時代における遺物の出土層を大別すると、立川ローム層のVII～IX層、III～V層に二分される。5枚の文化層、9か所のブロック、さらにそのうちの1か所を6つの集中域に細分した。これは複数の集中区間に密接な接合関係及び母岩の共有関係が確認されたため、全体を一つの複合ブロックと捉えたものである。各々のブロックについては既に第2章にて報告したが、ここでは文化層ごとに大別したうえ、III層からV層にかけて出土した特徴的な刃器についての考察を行い、まとめとする。

第1文化層

第1文化層としては第1ブロックが挙げられる。出土層位は本遺跡では最も古いVII～IX層であり、第3文化層第6ブロックの下部より検出された。黒曜石剥片の外周を溝深なく加工した削器、玉髓剥片、ガラス質黒色安山岩の剥片・接合資料、櫛岡産珪質頁岩のナイフ形石器とその調整剥片などが出土している。総出土点数は51点、その過半数はガラス質黒色安山岩であり、1～2点ずつではあるがバラエティーに富んだ様々な石材が持ち込まれている。

第2文化層

第2文化層に帰属するブロックは、第2ブロック1か所のみであり、その出土層は立川ローム層のV層段階である。黒曜石2点を除くとガラス質黒色安山岩1が19点を占め、単一の母岩による剥片生産のためのブロックといえる。2資料を実測・掲載（第14図）したが、不掲載の中にもこの剥離工程で作出された同型の横打剥片は9点をかぞえた。

この資料と同様の手順を示す他遺跡の例として、松戸市の彦八山遺跡⁽¹⁾が挙げられる。石器素材は泥岩であり、5片のうち4片が接合する。厚みのある板状の剥片素材を用い、平坦面打面から連続した加撃を行って規格的な横長剥片を作出している。報告では横打剥片を縦位に用いて展開されているが、ここでは横位に置きかえて図示した。素材剥片の



第74図 接合資料（V層段階）参考例

背面を打面に据えているため、作出された剥片の底面が素材時の主要剥離面となっている。

一方、当溜井台遺跡の第2ブロックにおいては、製品あるいは整った形状の剥片は少なく、彦八山遺跡の剥片と比較して小型である。おそらく、大型の剥片は素材として持ち出されたか、何らかの製品として他所で使用されたために遺跡内には遺存していないものと推測される。

第3文化層

第3文化層は第3ブロックから第7ブロックの5か所であり、立川ローム層のIII層～V層に相当する。

第3・4ブロックは10点未満の小さなブロックである。調査時の記録と示準石器（切出形ナイフ形石器）に基づいて当文化層の所産とした。

第5ブロックは礫・礫片のみ14点がかたまって出土している。

第6ブロックは第3文化層で最も出土数が多く、44点を数えるがその半数以上は礫・礫片を除くとホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩、黒曜石がそれぞれ8点、6点、4点、流紋岩、珪質頁岩、玉髓（メノウ含む）が1点ずつの出土である。器種は剥片・碎片が17点、石核3点、二次加工剥片1点である。

第7ブロックは18点のうち接合資料が3個体含まれる。礫・礫片は出土しない。石材はガラス質黒色安山岩、流紋岩、嶺岡産珪質頁岩が各々5点、4点、3点、トロトロ石、珪質頁岩が2点ずつ、ホルンフェルス、チャートが1点ずつであるが、同一母岩である流紋岩4点のうち2点がナイフ形石器であり、そのうちの1点は切出形を呈する。嶺岡産珪質頁岩は縦長剥片2点と石核1点の接合資料である。

このように、出土遺物の形態においては第4文化層の中にも類似する石器が存在することから、第3、4文化層は同一時期の所産である可能性が高い。層準もIII層～V層、III層～IV層下部と区分しがたいものがあり、共通母岩は認められなかったが、まとめて捉えててもよいかと思われる。

第4文化層

第4文化層はIII層～IV層下部を出土層準とし、第8ブロックが相当する。遺跡内總石器出土点数の81%にあたる776点がここに包含され、約58%が焼礫片である。剥片石器、礫片の別を問わず、母岩の共有、接合関係が確認されたため、6か所の集中域をひとまとめのブロックと捉えた。出土した器種・石材は集中域によって偏りがあり、集中域別組成表を参照されたい。（第8～14表）

ナイフ形石器については8-A（第8ブロックA集中域の意、以下略）から4点、8-Bから1点、8-Cから1点、8-Eから2点、8-Fから1点の計9点が出土している。

集中域間における接合状況からみたそれぞれの場の特徴であるが、8-Aと8-B間ではホルンフェルス3・7が、8-Aと8-E間でホルンフェルス1が接合する。8-A、8-B、8-Eそれぞれの集中域において複数の剥片が接合していることから、これらは作業の場として機能していたものと思われる。

8-A、8-Bは礫・礫片を除いた石材の約半数がホルンフェルスであり、8-Eでは約7割が珪質頁岩である。だが必ずしも主体となっている石材が利器の出土と一致するわけではない。第8ブロックにおいて、接合資料が完形にまで復元される例はなく、その空間に在ったはずの石片は遺跡内からは検出されない。

ところが8-Eにおいては、主体をなす珪質頁岩の接合資料の中にナイフ形石器を含むものが存在する。滑らかで光沢のある黄橙（10YR7/8）～明黄褐（10YR6/8）の珪質頁岩7を母岩にした78a、79cである。いずれのナイフ形石器も剥片剥離工程の比較的初期の段階の所産であり、器長の1/2ほどが自然面と主要剥離面によって作り出された63°～73°の刃部である。79cの刃部の刃こぼれは素材作出と使用の場が同一であったことを示すものであろう。

ナイフ形石器の形態としては、

- ① 器長に占める刃部の割合が1/2以上あり、緩やかに弧を描き、基部は逆に抉れを持つもの（第3文化層第4ブロック1・78a・79c・単独出土3）
- ② 刃部が主軸に対して斜交し、基部の整形剥離が少ない切出形（第3文化層第7ブロック1）



第75図 III～V層出土ナイフ形石器

③ 縦長剥片を素材にして、木葉形に整形しているもの(第4文化層第8ブロック1・2、4～7、単独1)に大別されるが、ここでは特に①について、素材剥片との関連を考察したい。

剥片の形態としては、横長剥片を規格的に剥離したもの、打点対縁が弧を描いて器周の2/3ほどに達するものが多く、貝殻状を呈するものが目立つ。ゆるやかな半円弧を刃部とするナイフ形石器作出のための素材獲得を意図したものであろう。

78a 及び79c が含まれる接合資料にみられるように、ナイフ形石器の素材になりうる剥片を作出・選別したのち、弧を描く刃部の対縁に急角度加工を施して形態を整え、基部に抉りを入れる。78a・79cとも明黄褐色で滑らかな光沢を持つ良質な珪質頁岩7であり、8-E以外に同一母岩は出土せず、ブロック内消費に限られる。

このナイフ形石器と同様の形態を示す類例としては、南東方向に直線にして約25km下った八千代市壹田遺跡群にも存在する。中でも北海道遺跡⁽³⁾第2文化層においては、横打剥片・縦長剥片を用いて弧状の刃部とゆるやかなノッチ状の加工を施された基部を持つナイ

フ形石器が複数出土している。ここでは珪質な堆積岩製のナイフ形石器を図示した。

近傍では中山新田II遺跡⁽³⁾第1Aユニット、矢船遺跡⁽⁴⁾ブロック外(IV層～V層)、元割遺跡⁽⁵⁾No.2地点に類例をみることができ、元割遺跡のNo.2地点では、器種・石材組成、剥離工程において当溜井台遺跡との



第76図 ナイフ形石器(IV層下部段階)参考例

近似点が多く見受けられる。

次に当遺跡における使用石材であるが、黒曜石が極めて少なく、遺跡全体では958点中18点であり、2%に満たない。第3文化層～第5文化層では、871点中14点、当遺跡のIII層～V層の黒曜石の割合はわずかに1.6%である。

一方、ホルンフェルス、珪質頁岩、ガラス質黒色安山岩は多用され、塊で搬入された素材礫が規則的な剥片剥離工程を経て石片生産されている。一部は利器に整形され、そのうちのいくつかはおそらく外部へ持ち出されているものと思われる。また同一面からは被熱した礫・礫片が多数出土しており、遺跡内で製作したナイフ形石器を刃器として用い、何らかの物を加熱・調理・加工するための場として機能していたと推察される。

第5文化層

第5文化層は第9ブロックの1か所のみであり、石器は東南に向かって下降する傾斜地から出土する。直径20mの円内にわずか19点（剥片石器類8点、礫・礫片11点）が、接合礫を中心にして散漫に分布する。礫片を除外すると一母岩一器種であり、同一時期に存在したという根拠は薄いものと思われる。

以上、滝井台遺跡においては立川ローム層III～V層に生活面を有する旧石器時代人の痕跡が濃く残されている。遺物から鑑みると、大量の焼礫・焼礫片、刃部が湾曲するナイフ形石器、きわめて良質な明黄褐色珪質頁岩の接合資料、大型の黒色石材（ガラス質黒色安山岩・頁岩・ホルンフェルス）の剥離工程、ごく少數の黒曜石などの特徴が挙げられる。

この台地には、旧石器時代の石器集中地点が多く検出されており、現在も調査、あるいは整理中である。周辺遺跡（原山遺跡・内山遺跡・屋敷内遺跡・大割遺跡など）の整理作業が進展すれば、時期的な課題や搬入石材の分配などの足跡を追うことがより可能となるだろう。ひいては、関東西部・北部地域などの石材供給地とのかかわりや、下野一北縦回廊⁽⁶⁾の南端に位置するこの地域の特異性についても詳らかになることが期待される。

参考文献

- (1) 田村 隆 1987 「松戸市彦八山遺跡」『北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書I』(財)千葉県文化財センター
- (2) 橋本勝雄ほか 1985 「八千代市北海道遺跡・萱田地区埋蔵文化財調査報告書2」(財)千葉県文化財センター
- (3) 清藤一順ほか 1984 「花前I・中山新田II・中山新田III」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書II』(財)千葉県文化財センター
- (4) 橋本勝雄ほか 1985 「花前II-1・花前II-2・矢船」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書III』(財)千葉県文化財センター
- (5) 田村 隆ほか 1986 「元割・聖人塚・中山新田I」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV』(財)千葉県文化財センター
- (6) 田村 隆・国武貞克・吉野真如 2003 「下野・北縦回廊外縁部の石器石材」(第一報)『千葉県史研究』第11号 千葉県

第17表 文化層別器種別組成表

文化層	ブロック	ナイフ 石斧	剣 鉤	骨 角	骨 石器	器 石	器 石	二 次 工 の あ る 部 分	使 用 部 分 の あ る 部 分	石 器	陶 片	砂 片	器 石	土 灰	点 数	点 数 比	重 量 g	重 量 比	
第1文化層	第1ブロック	1	100	0	1	0	0	0	3	4	29(20)	7	1	2	49(51)	5.31%	1993.78	7.88%	
第2文化層	第2ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	1	12	8	0	0	21	2.23%	18.31	0.07%	
第3文化層	第3ブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	1	5	1	0	0	8	0.88%	60.71	0.24%	
第4文化層	第4ブロック	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	3	7	0.74%	234.47	1.32%	
第5文化層	第5ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	1	13	14	1.49%	3623.31	14.29%	
第6文化層	第6ブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	3	120(33)	4	0	23	43(64)	4.57%	1463.04	5.89%	
第7文化層	第7ブロック	2	0	0	0	0	0	0	2	2	12	0	0	0	16	1.91%	170.43	0.67%	
第4文化層 合計		3	0	0	0	0	0	2	2	7	31(32)	5	1	39	80(91)	9.57%	5681.96	22.40%	
第4文化層	第8ブロック-A	4	1	1	0	0	0	18(19)	9(10)	22(23)	96(101)	32	6	230	426(436)	45.32%	8160.50	22.58%	
	第8ブロック-B	1	0	0	0	0	0	9	5(6)	2	12(2)	20	14	3	107	153(155)	16.38%	2315.83	9.12%
	第8ブロック-C	1	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	31	37	3.94%	4351.39	17.16%
	第8ブロック-D	0	0	0	0	0	0	2	1	2	9(10)	1	1	7	36	56(59)	6.17%	4261.54	16.60%
	第8ブロック-E	2	0	0	0	0	0	0	3	2	7(9)	43	3	0	0	59(61)	6.28%	367.55	1.53%
	第8ブロック-F	1	0	0	0	0	0	2	2	1	2	0	2	19	28	2.98%	736.10	2.95%	
第4文化層 合計		9	1	1	0	0	1	29(32)	16(17)	34(36)	176(176)	50	19	431	751(770)	80.96%	17222.14	67.91%	
第5文化層	第9ブロック	1	0	0	0	1	0	2	0	1	3	0	0	0	11	19	2.02%	445.36	1.70%
総計		14	2(3)	1	1	1	1	33(37)	21(22)	47(51)	245(253)	70	21	485	940(950)	100.00%	25361.45	100.00%	

第18表 文化層別石材別組成表

文化層	ブロック	ガラス ガラス質 白色 化粧 石	トロトロ 石	黄 白 石	黑 白 石	黑 石	綠 白 石	綠 石	白 石	黑 石	黑 白 石	黑 白 石	黑 白 石	白 色 石	オル シ フェ ル テ マ ー ト	玉 器 メ ノ ク モ カ ハ シ テ イ ア リ ト	重 量 g	重 量 比				
第1文化層	第1ブロック	20(21)	0	0	2	0	1(2)	1	0	2	0	1	1	4	1	0	1	49(51)	5.21%	1993.78	7.88%	
第2文化層	第2ブロック	19	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	2.23%	18.31	0.07%	
第3文化層	第3ブロック	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0.88%	60.71	0.24%	
	第4ブロック	3	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	7	0.74%	234.47	1.32%	
	第5ブロック	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	1.49%	3623.31	14.29%	
	第6ブロック	5(6)	0	1	15	4	4	0	0	8	0	0	1	0	0	0	1	43(44)	4.57%	1463.04	5.89%	
	第7ブロック	6	2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	1	0	1.91%	170.43	0.67%
第3文化層 合計		14(21)	2	2	26	0	4	0	0	13	0	2	3	9	3	1	39(41)	9.57%	5681.96	22.40%		
第4文化層	第8ブロック-A	23(25)	0	81	72	3	0	0	0	32	0	36(37)	13	14	96(104)	13	0	426(436)	45.32%	8160.50	22.58%	
	第8ブロック-B	6	2	17	94	0	0	0	1	17	0	0	6	4	28(29)	6	0	153(155)	16.38%	2315.83	9.12%	
	第8ブロック-C	0	0	4	14	2	1	0	0	13	0	0	0	1	0	2	0	37	3.94%	4351.39	17.16%	
	第8ブロック-D	2	0	2	9	2	3	0	0	16	1	2	1	0	0	3	17(18)	0	43(45)	4.57%	1463.04	5.89%
	第8ブロック-E	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	41	0	9(11)	0	0	10(11)	6.28%	367.55	1.53%
	第8ブロック-F	0	0	1	4	1	4	0	0	8	0	0	1	0	0	1	2	0	2.98%	736.10	2.95%	
第4文化層 合計		34(27)	18	111	182	10	0	0	1	105	0	44(45)	60	19	137(147)	40(41)	0	781(776)	80.96%	17222.14	67.91%	
第5文化層	第9ブロック	2	1	2	2	0	2	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0	19	2.02%	445.36	1.70%	
総計		161(160)	19	115	280	16	17(18)	3	1	126	0	47(48)	71	28	347(347)	43(44)	0	940(950)	100.00%	25361.45	100.00%	

※第17、18表は単枝・複文石器を含まない。()は出土点数

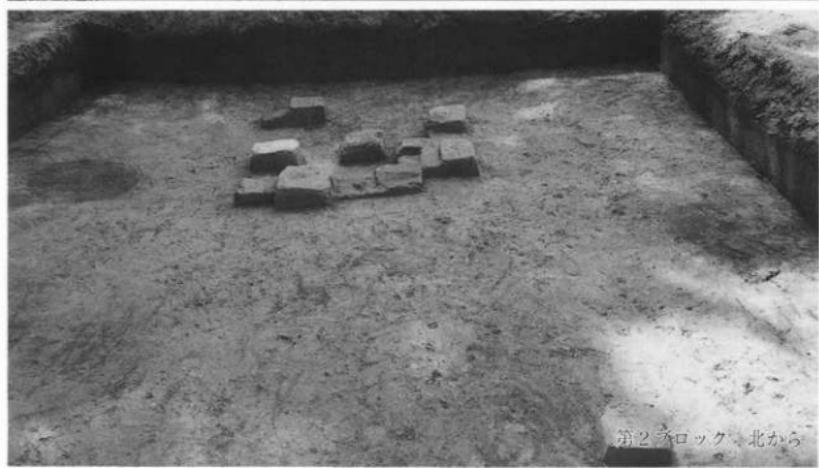
写 真 図 版



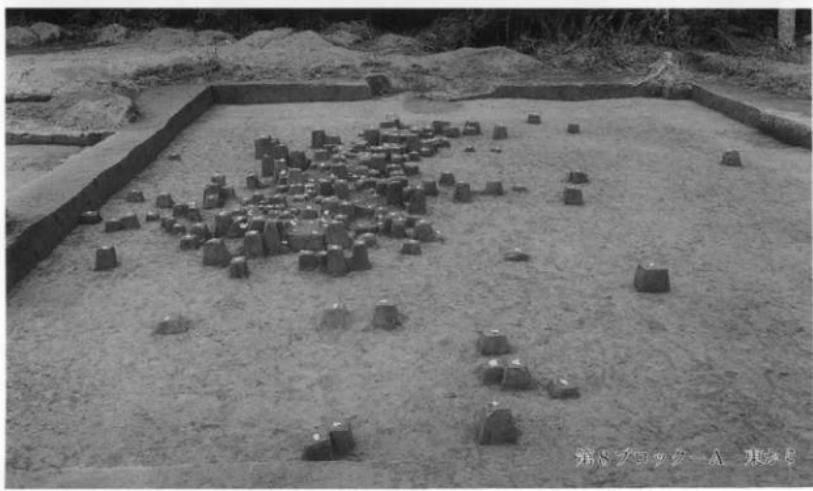
土層46Uクリップ 前側



第1・6ブロック 南側から

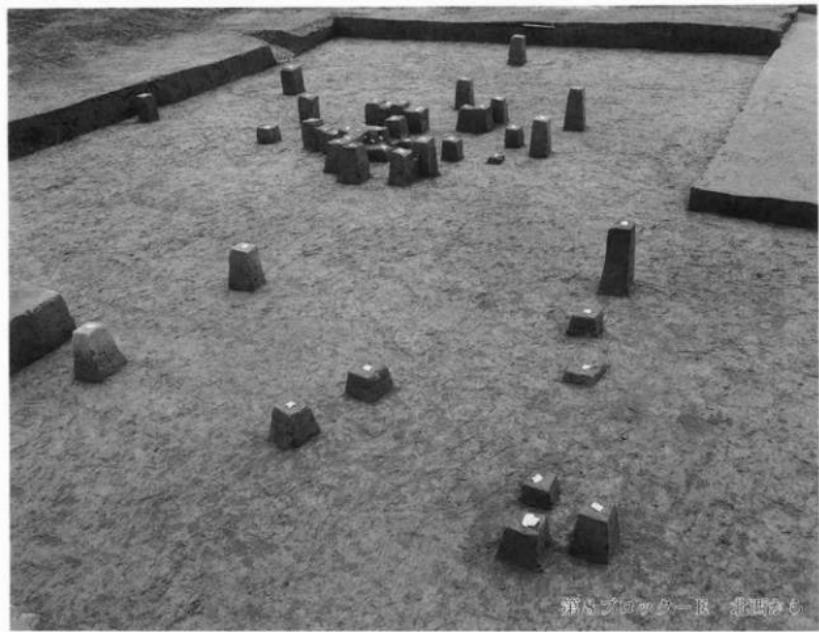


第2番ロック 北から





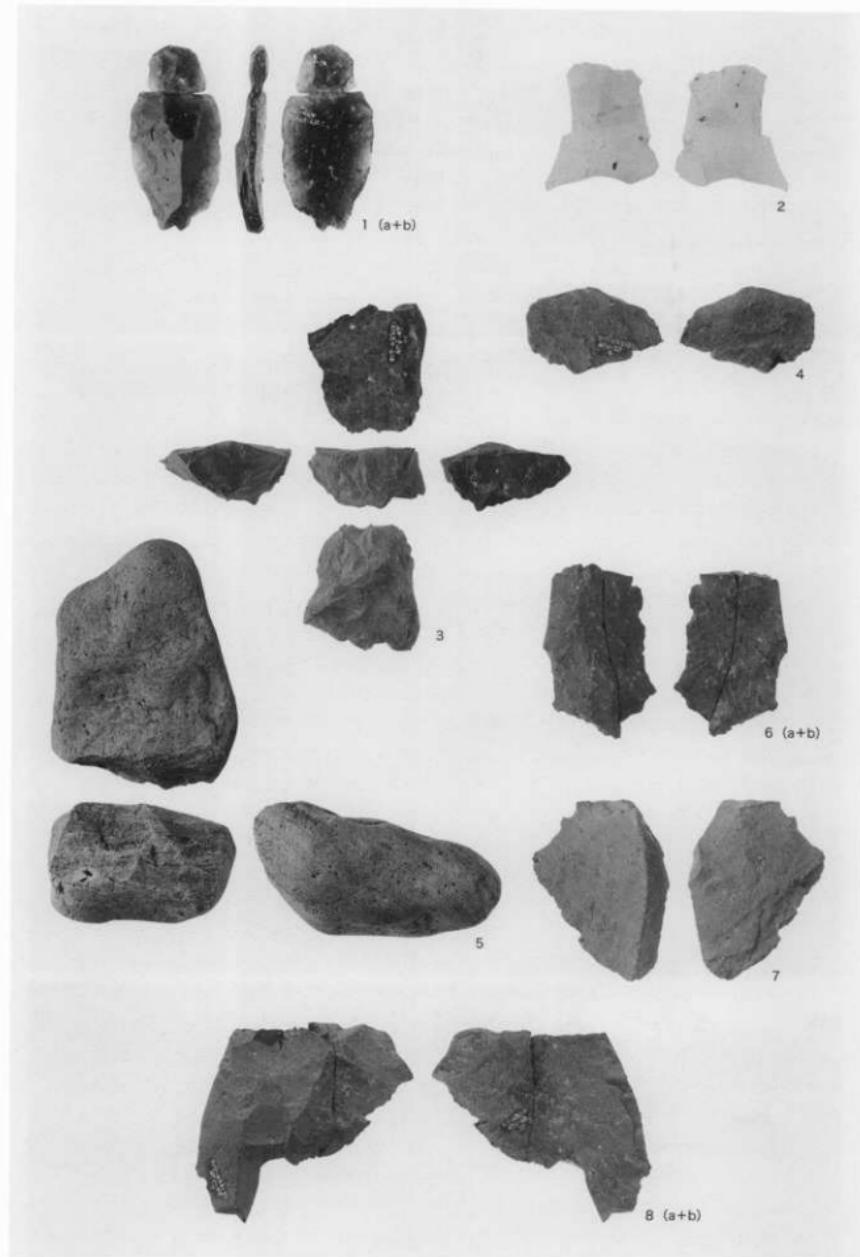
第8ブロック(・)より東から



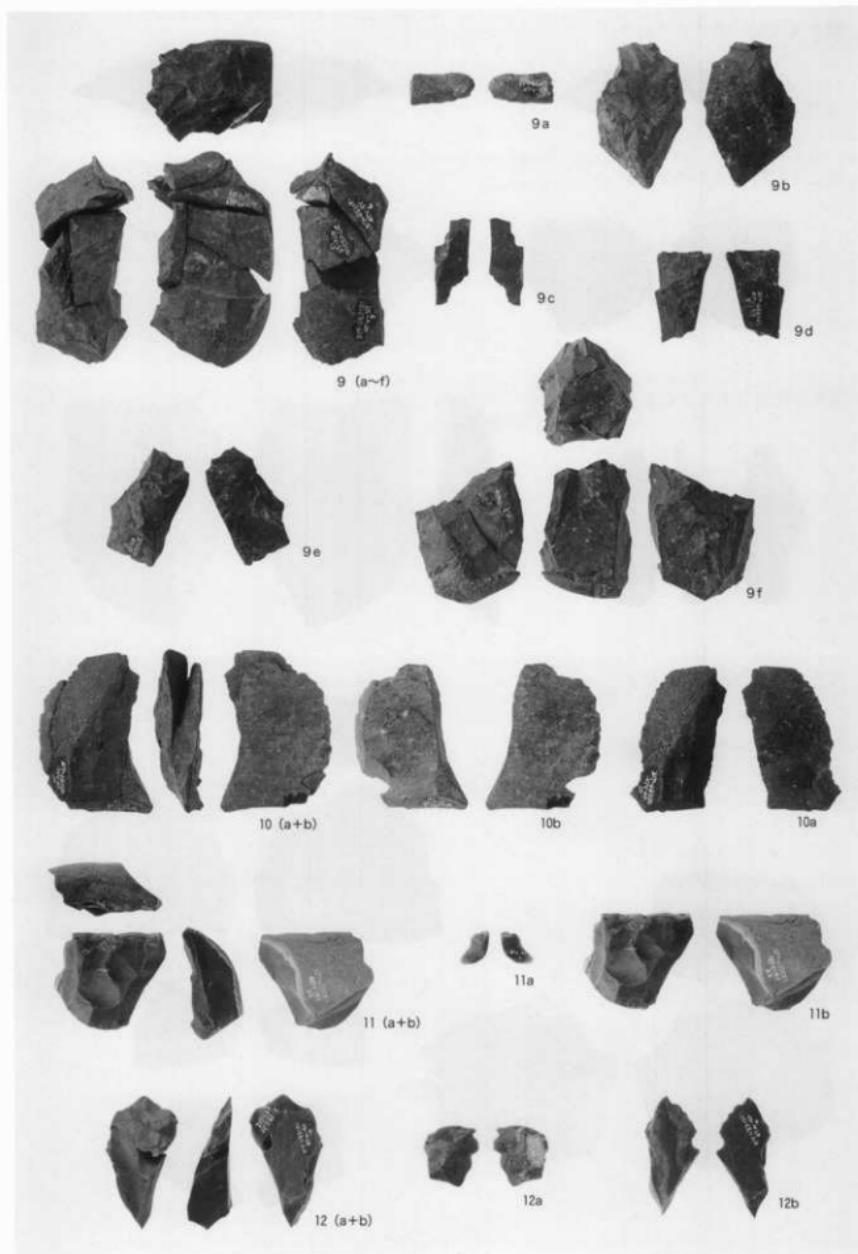
第9ブロック(・)より北西から



第9ブロック(・)より南西から



第1文化層 第1ブロック（1）出土石器



第1文化層 第1ブロック（2）出土石器

第2文化層 第2ブロック



第3文化層 第3ブロック



第3文化層 第4ブロック

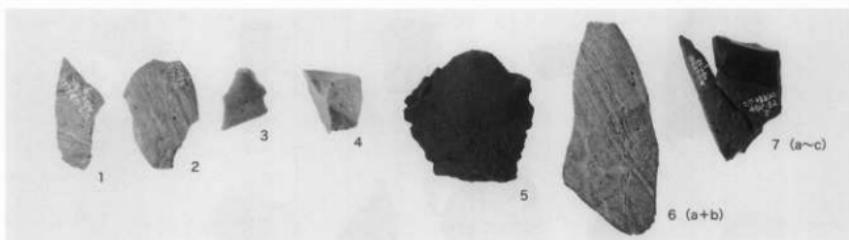
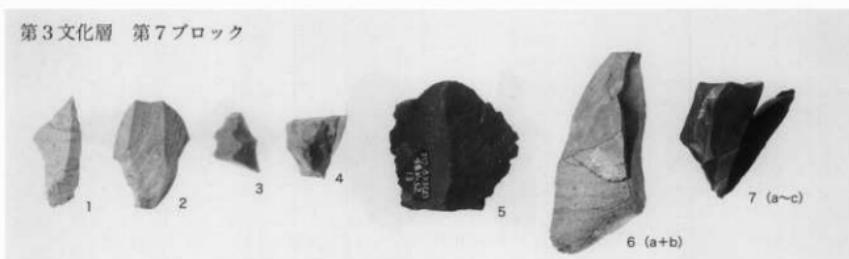


第3文化層 第6ブロック

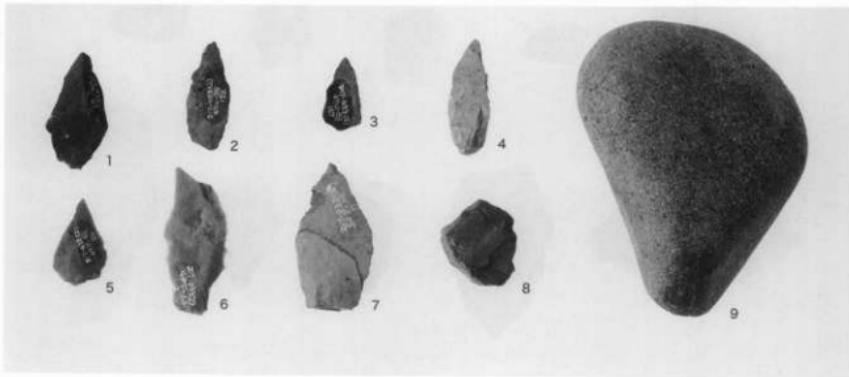
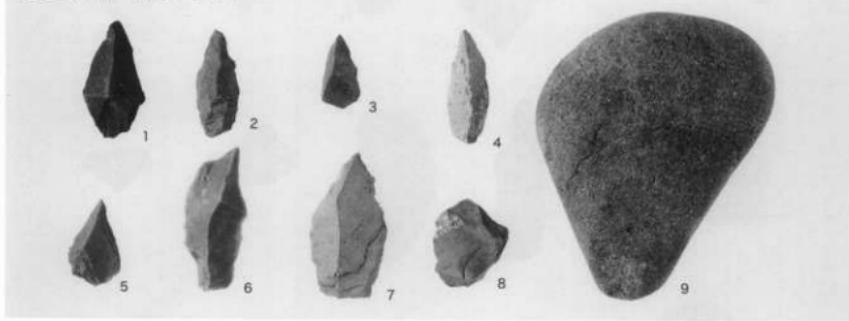


第2文化層 第2ブロック、第3文化層 第3・4・6ブロック出土石器

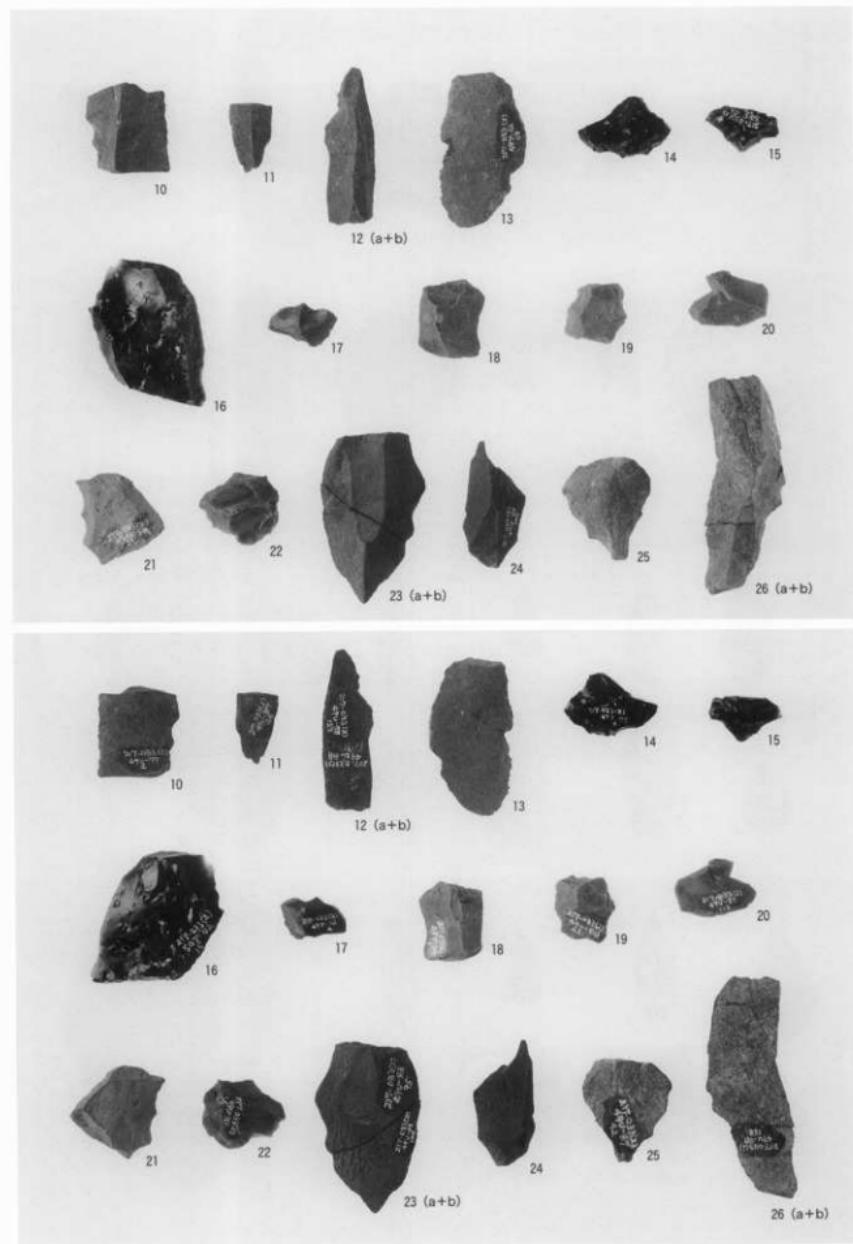
第3文化層 第7ブロック



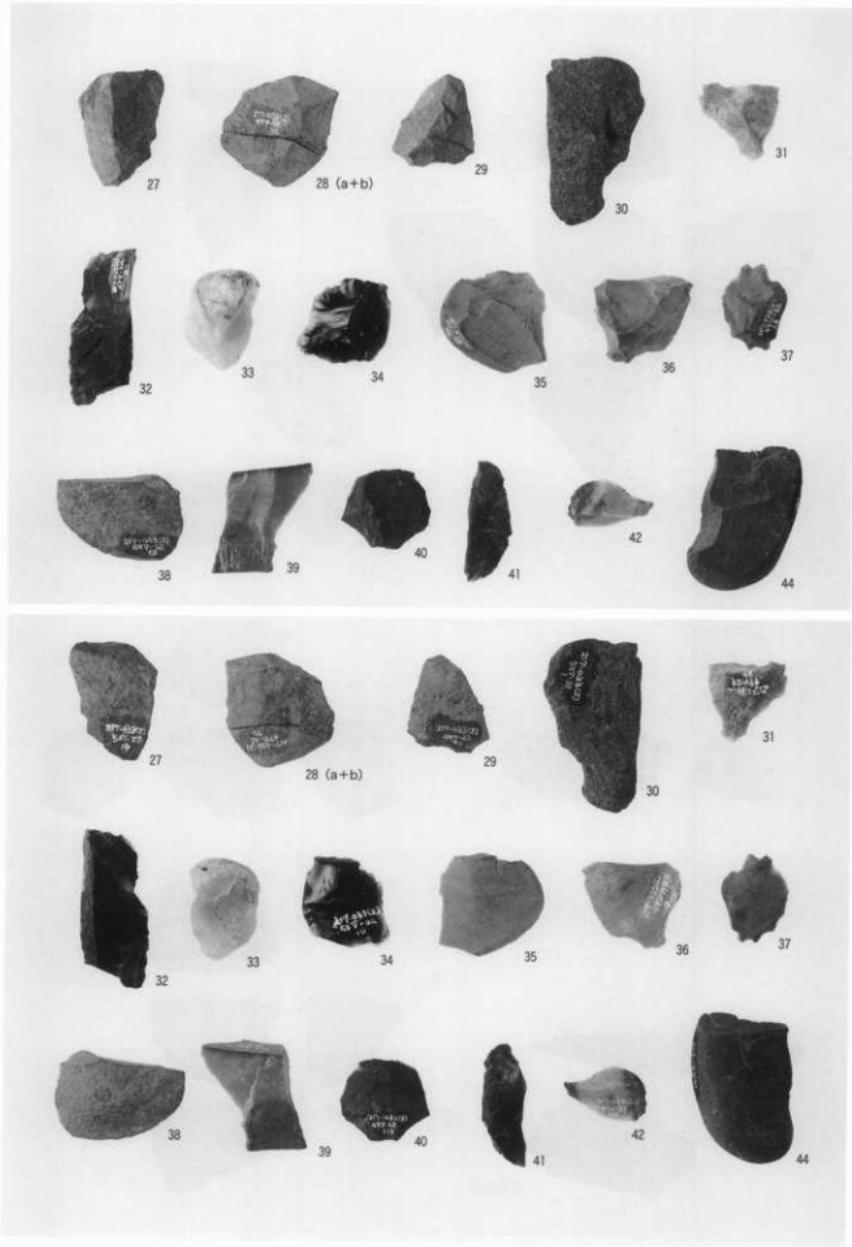
第4文化層 第8ブロック



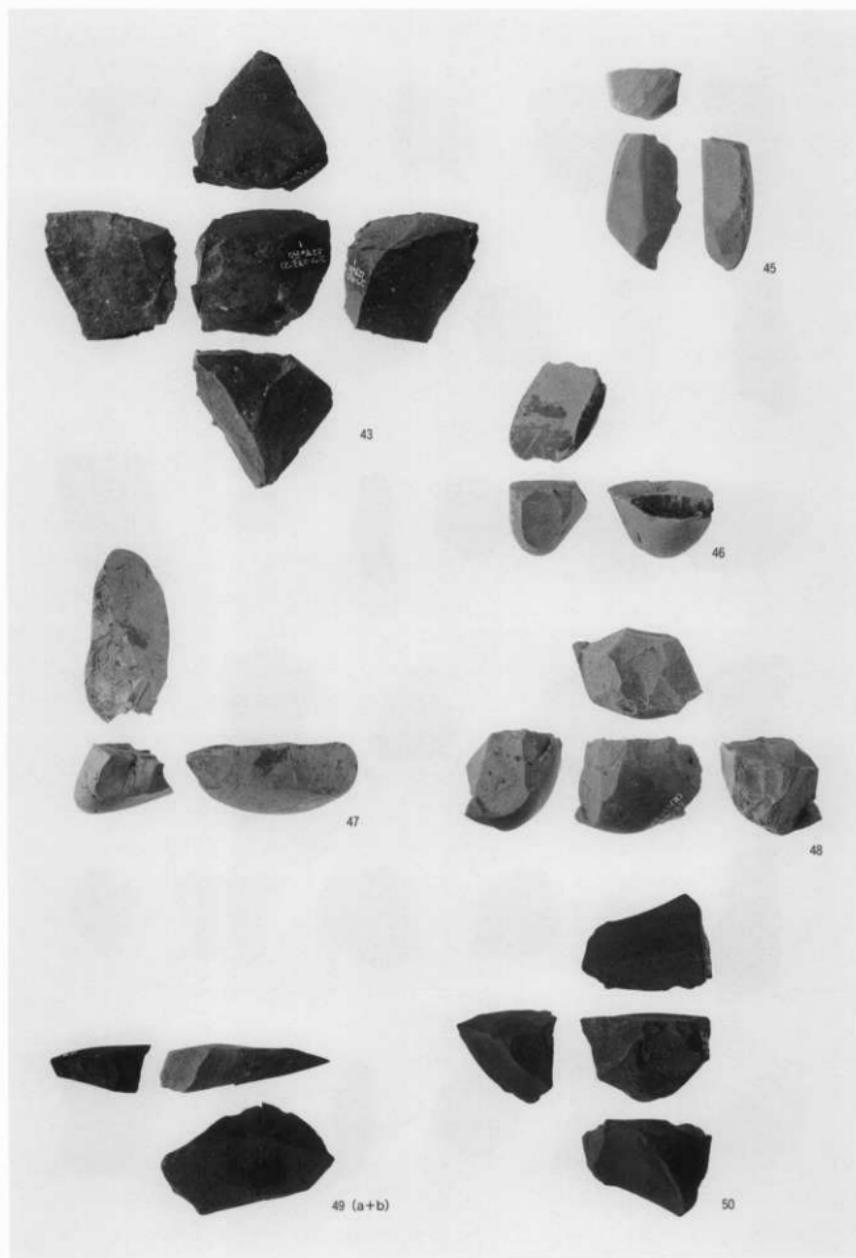
第3文化層 第7ブロック、第4文化層 第8ブロック (1) 出土石器



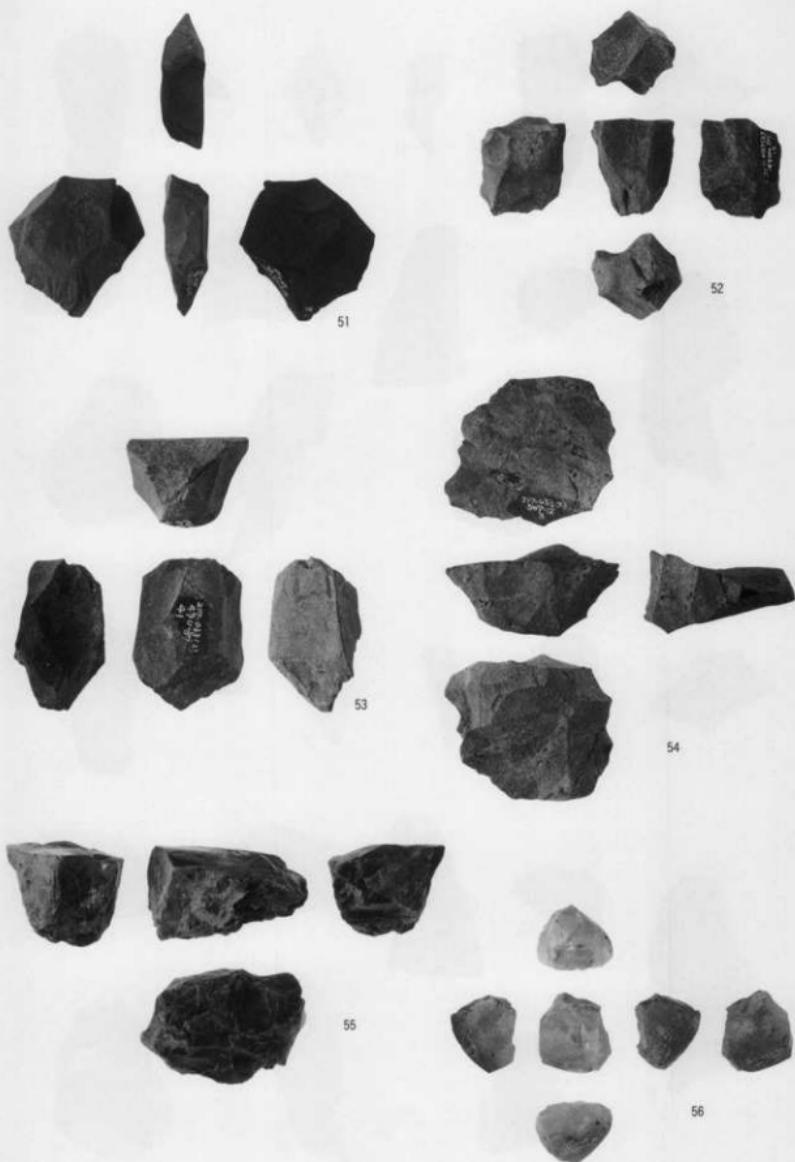
第4文化層 第8ブロック（2）出土石器



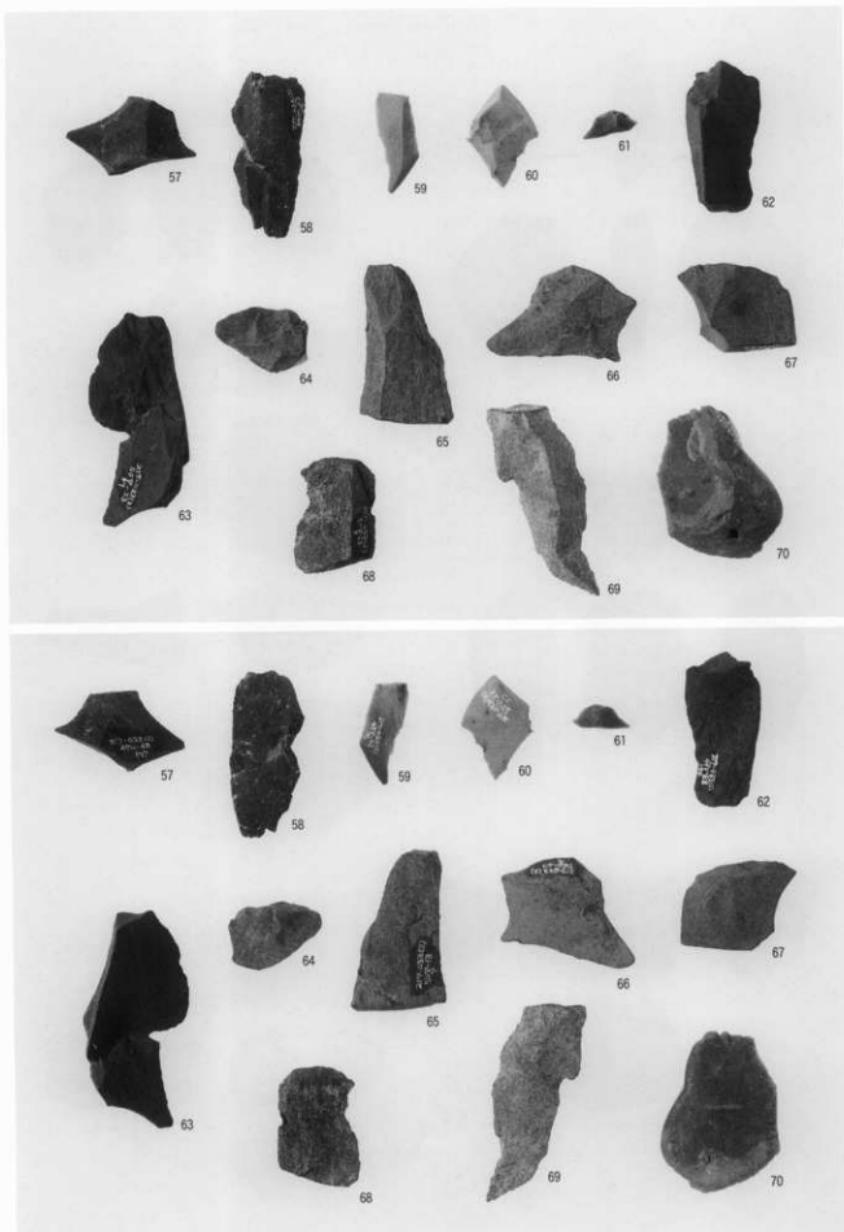
第4文化層 第8ブロック（3）出土石器



第4文化層 第8ブロック(4) 出土石器



第4文化層 第8ブロック（5）出土石器



第4文化層 第8ブロック（6）出土石器



71 (a~f)



72 (a~c)



73 (a+b)



74 (a~e)



75a



75b



75 (a~d)

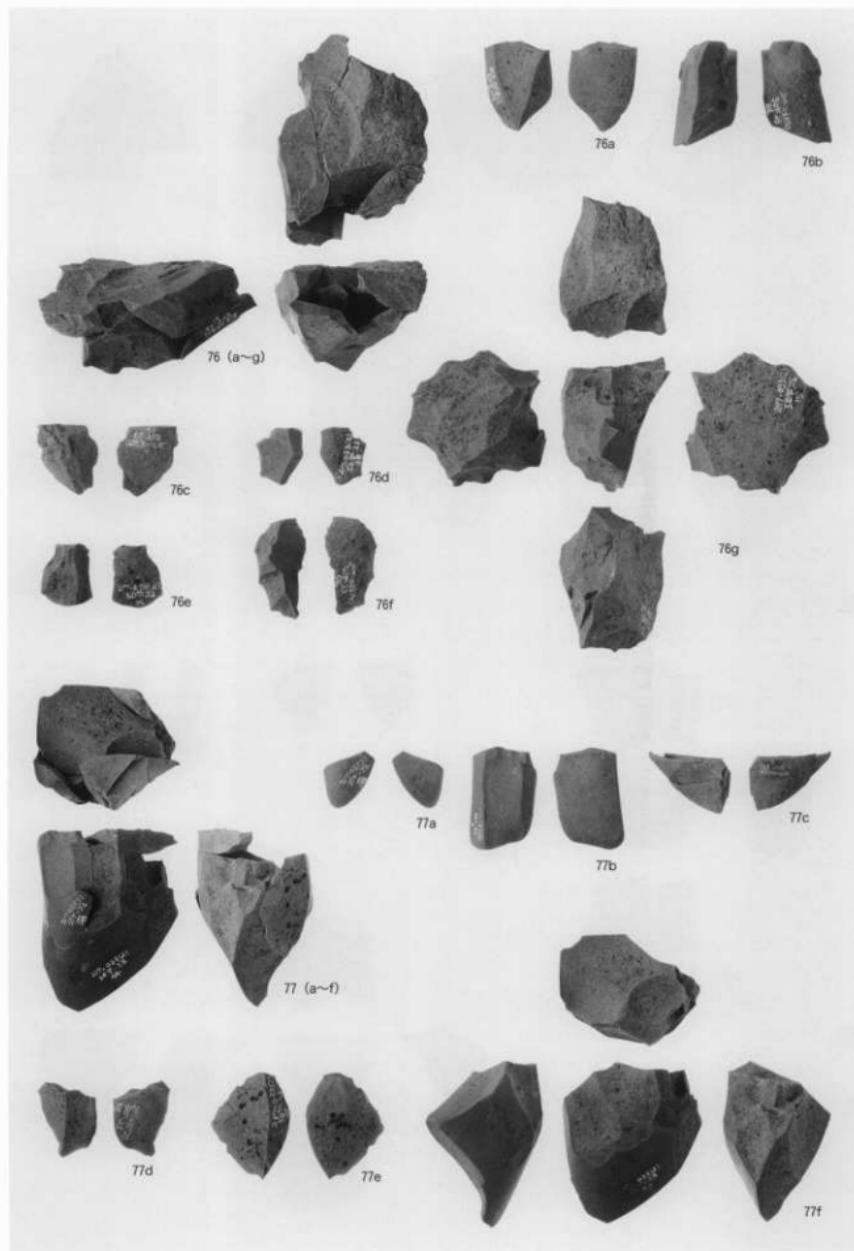


75c

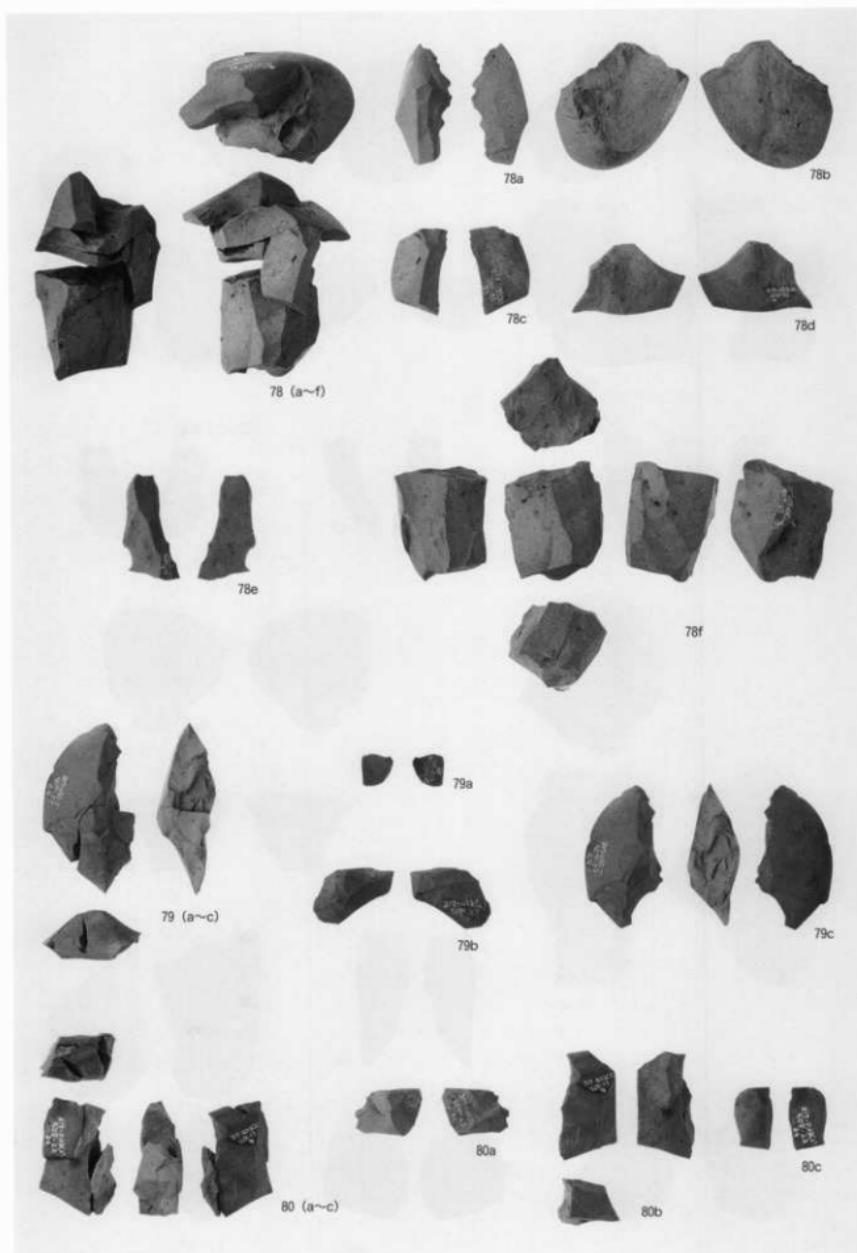


75d

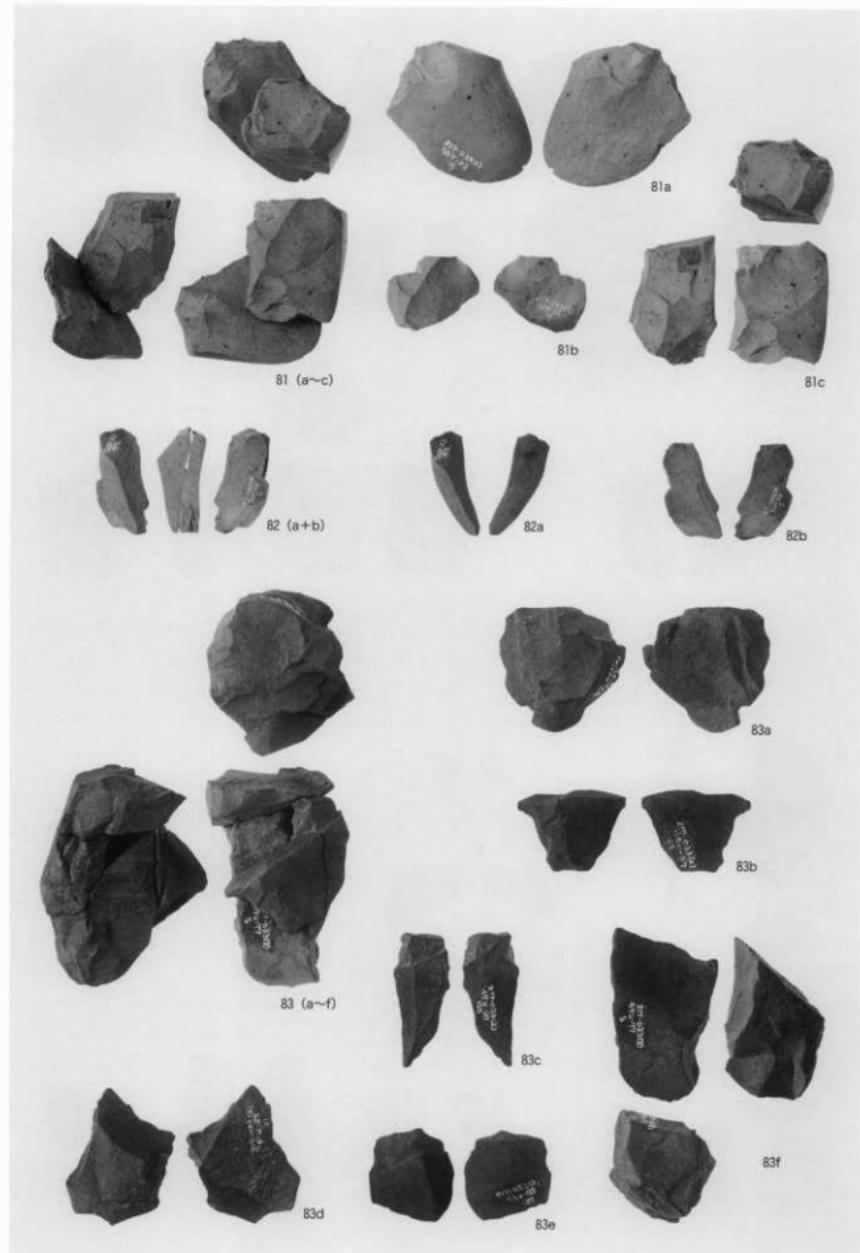




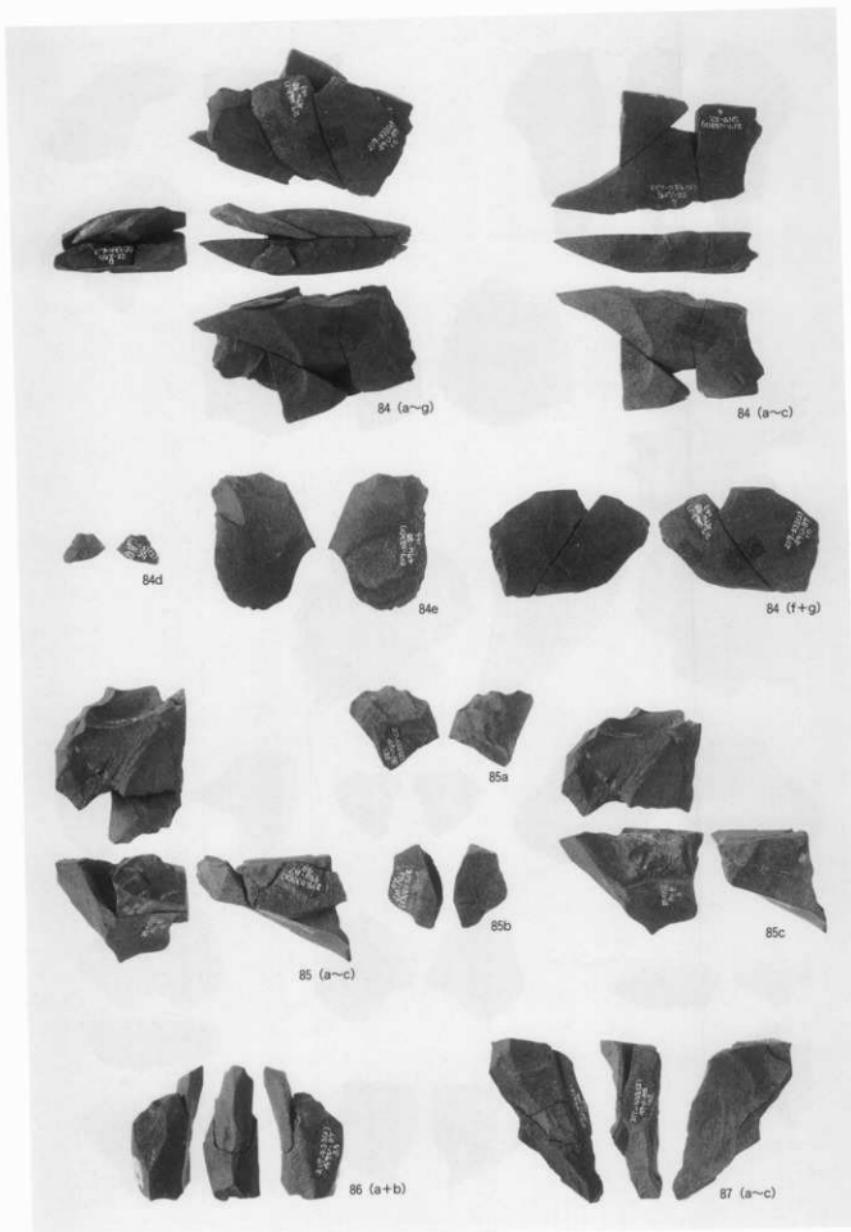
第4文化層 第8ブロック(8)出土石器



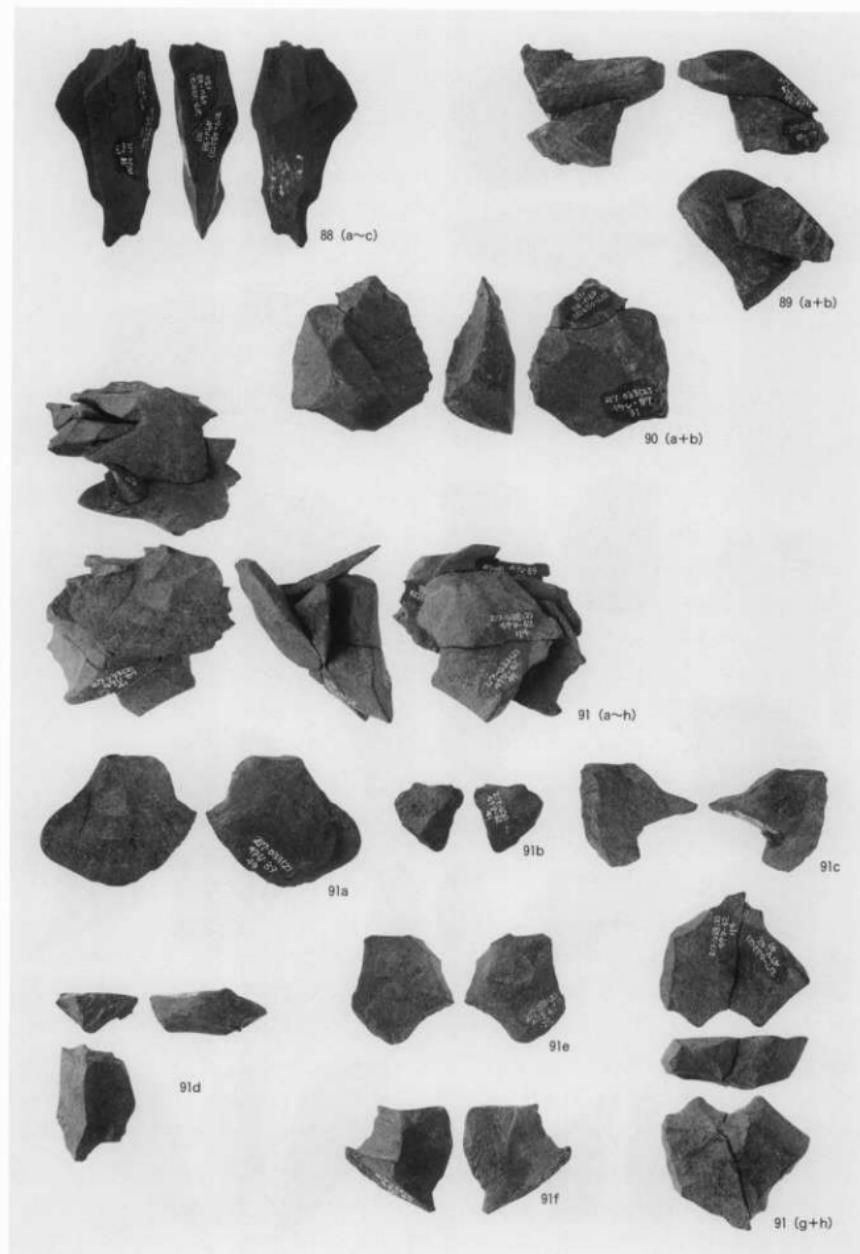
第4文化層 第8ブロック(9)出土石器



第4文化層 第8ブロック(10) 出土石器

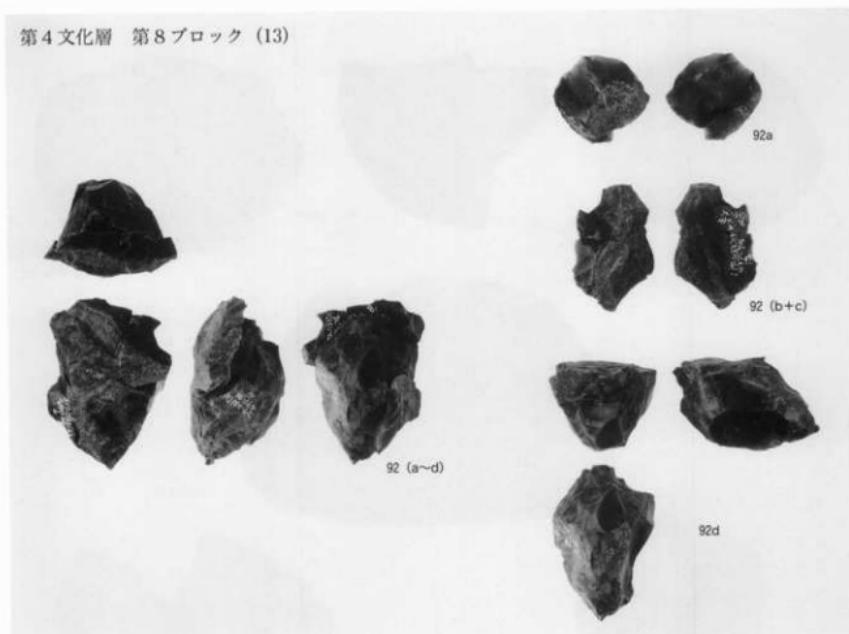


第4文化層 第8ブロック(II) 出土石器

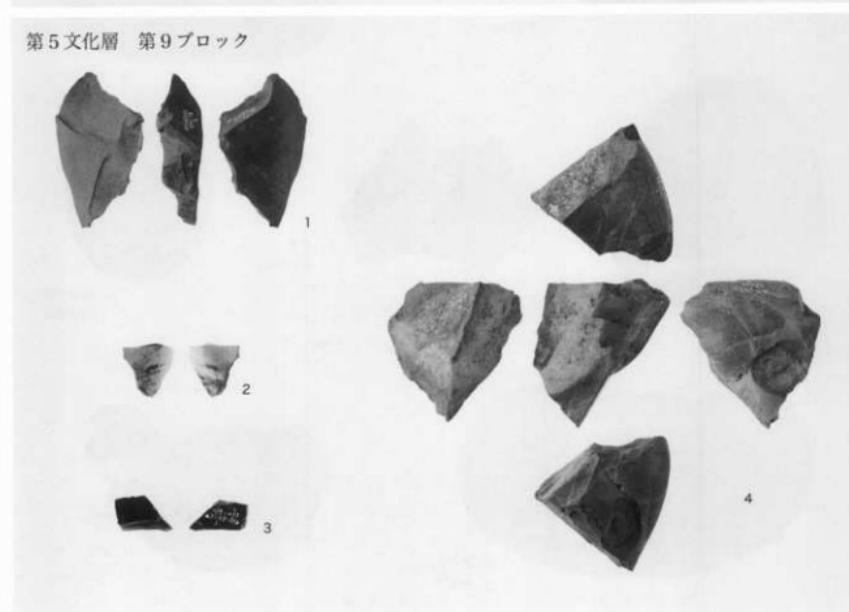


第4文化層 第8ブロック (12) 出土石器

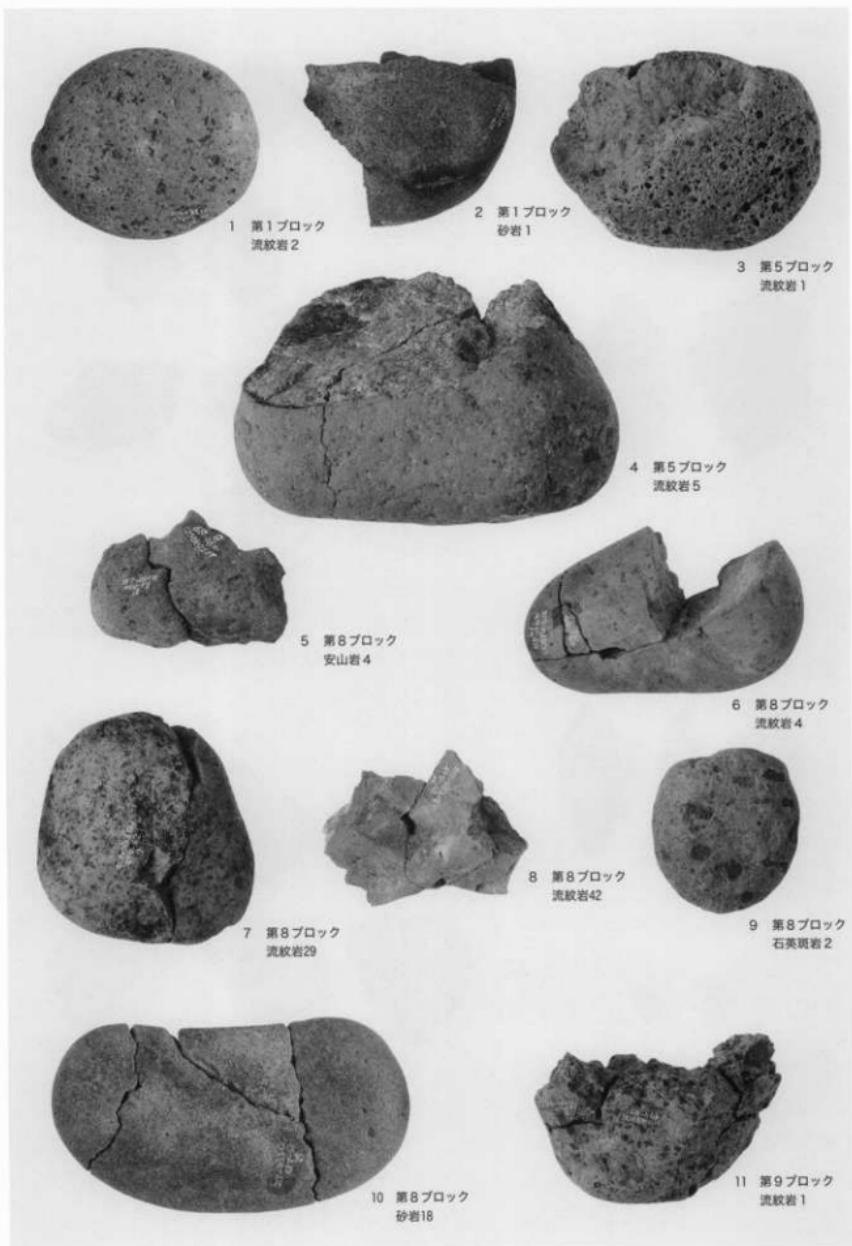
第4文化層 第8ブロック (13)



第5文化層 第9ブロック

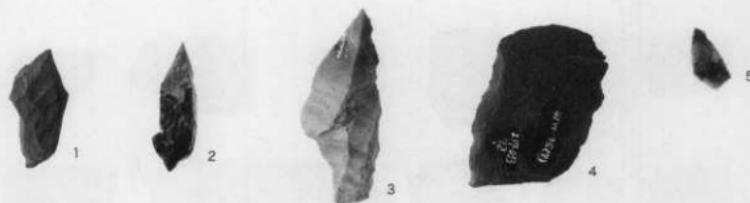


第4文化層 第8ブロック (13)、第5文化層 第9ブロック出土石器

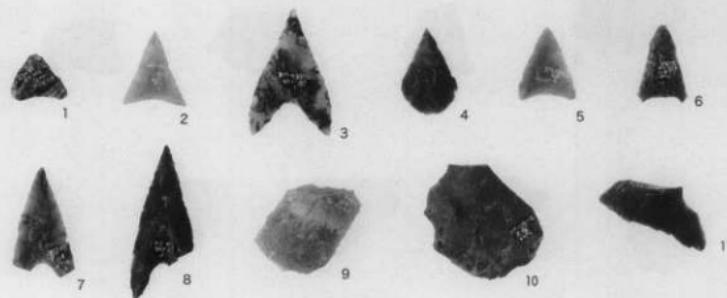
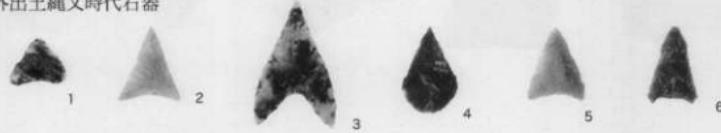


出土礫・礫片

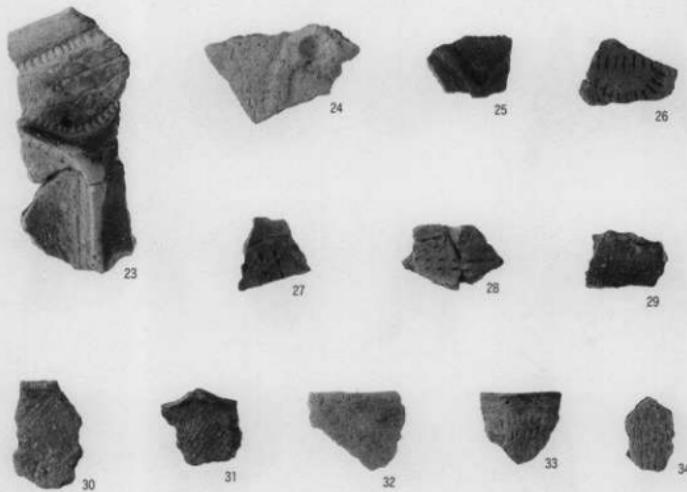
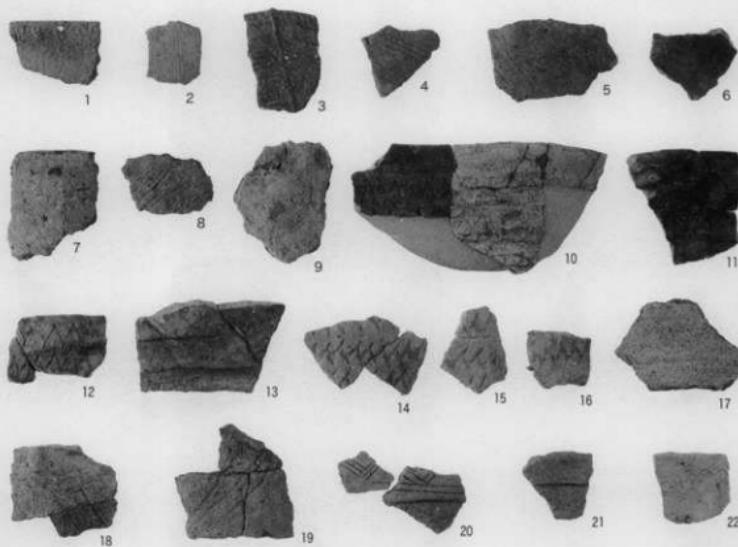
单独出土石器



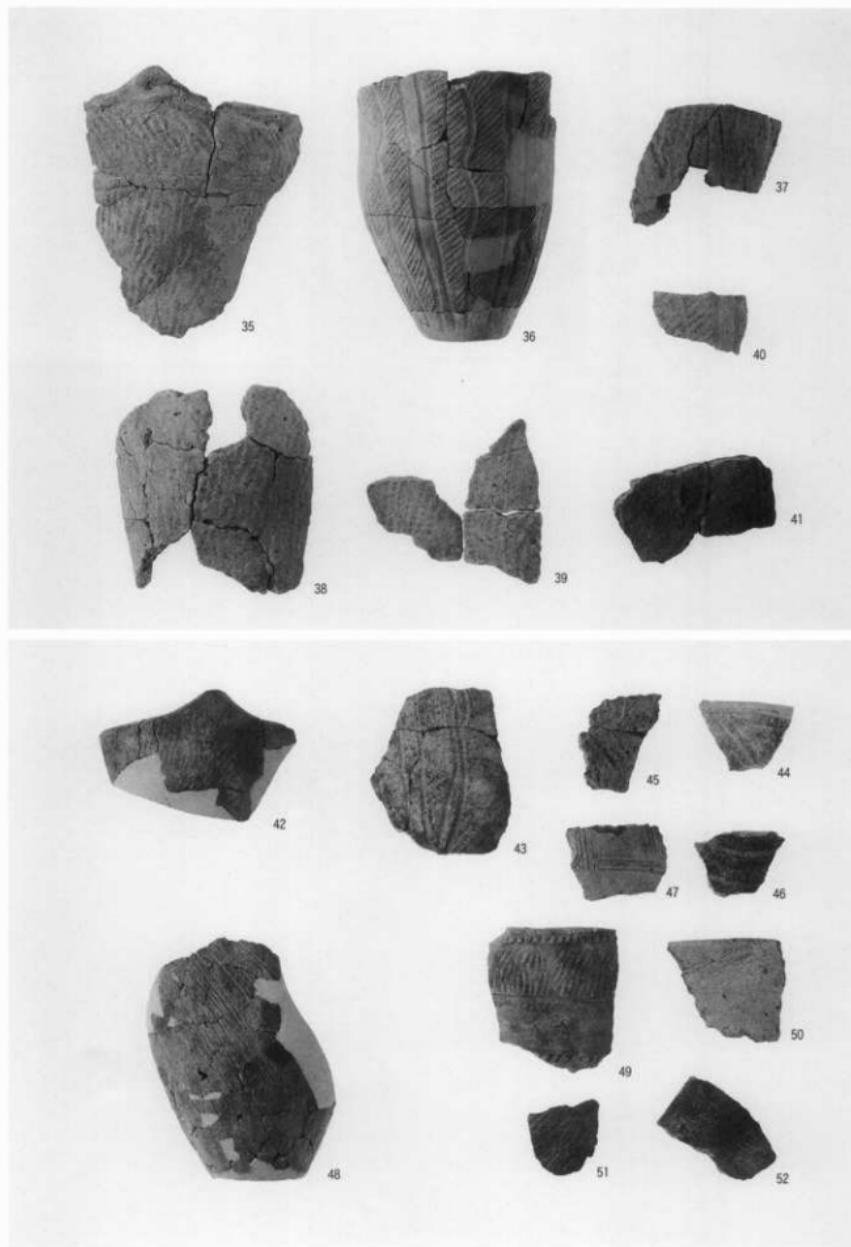
遺構外出土縄文時代石器



单独出土石器及び遺構外出土縄文時代石器



遺構外出土繩文土器（1）



遺構外出土縄文土器（2）

報告書抄録

ふりがな 書名	かしわほくぶちゅうおうちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ 柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書							
副書名	柏市溜井台遺跡							
卷次	1							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第585集							
編著者名	新田浩三、豊田秀治、四柳 隆、山岡磨由子							
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦2007年12月20日							
よりがな 所収遺跡名	よりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
溜井台遺跡	千葉県柏市 若柴字溜井 台264-1ほか	12217	033	35度 53分 20秒	139度 57分 10秒	20020104～ 20020329 20031209～ 20040210 20040301～ 20040329 20040802～ 20040917 20050106～ 20050114 20050901～ 20051130	51,000	柏北部中央地区 面整備に伴う埋蔵文化 財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
溜井台遺跡	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点14か所、疊群4か所		石器总数968点、 ナイフ形石器・削器・搔器、接合資料等	III層～V層に生活面を持つ第4 文化層第8ブロックでは剥片・ 石器類と焼跡・疊群群が同一面上から検出され、ナイフ形石器 を含む接合資料が複数確認された。		
	集落跡	縄文時代	陥穴4基、土坑1基		縄文土器（早～後 期）、石鐵、剥片			
要約	旧石器時代においては、III層～IX層にかけて、5枚の文化層が検出された。石器集中地点14か所、疊群4か所の遺構とナイフ形石器を含む968点の石器が出土した。 縄文時代においては、陥穴4基、土坑1基が検出された。							

千葉県教育振興財団調査報告第585集

柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書 1

— 柏市溜井台遺跡 —

平成19年12月20日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 千葉県県土整備部
千葉県千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元總社町67
